

撰びき。此の集は阿佛尼の『夜の鶴』に折らば落ちぬべき萩のつゆ拾はゞ消えなんとする玉さゝの翫など申すべきを餘りにたはれすゞして歌のあしさまに成りぬべしとて『新勅撰』は思ふところありてまことある歌を擇ばれけりなどぞ承り候ひしとある如く『新古今』の詞の艶なるに過ぎて誠の心少きを矯めんとして撰ばれたるなりと雖もなべては彼の集に劣ること遠し。概評せば此の集は『新古今』の一層花に流れたるものとや云はん新奇を衒ふ氣味ありて其の姿やさしき所多し。また此の集の歌の何となく『新古今』にもまして悲哀の調を帯びたるは承久の變一大打撃を公卿の上に及ぼし其の事に關與せるとせざると一般に鎌倉幕府を怖るゝところより人々の思想のつから畏縮したるにも依りしならんか。其のち廿年を過ぎて後深草天皇の建長三年に定家中納言の子爲家朝臣後嵯峨上皇の院宣を奉じて『續後撰和歌集』を撰びまた十五年にして龜山天皇の文永二年に爲家卿再び藤原基通朝臣全行家朝臣全光俊朝臣等と共に『續古今和歌集』を撰進せり。而して『續拾遺集』は爲家の子爲氏朝臣の撰進せる所後宇多天皇の建治二年に成りぬ『續後撰』を距ること十一年なり。其の他『新後撰集』は後二條天皇の嘉元元年に爲氏卿

の子爲世朝臣の撰進せる所『玉葉集』は花園天皇の正和二年に藤原爲教卿の子爲兼朝臣上り『續千載』は後醍醐天皇の元慶二年に爲世朝臣再び撰進し『續後拾遺』は同天皇の正中二年に爲世卿の子爲藤朝臣及び藤原爲定朝臣撰進せり。『新古今集』の出でより此の間百廿一年勅撰歌集の出でし事總じて九種に及ぶ。『新古今』以後歌界の狀態稍衰微に赴きまた昔日の比にあらずと雖も尙ほ盛大なりし事想ふべし。されど此の間史上に録すべき程の歌人は誠に寥々として以上の外殆ど其の名あるものなし。而して其等高名の歌人といへども大方古格に泥みて『新古今』の弊のみ襲踏し新ならんとして奇僻に流れ單に詞花言葉の修飾を事としたるのみ。爲家の如き稍巧者なりしものも尙縁語をわやなすを以て我が事終れりと思惟したるが如し。其の長子爲氏二條家といひ爲教昆沙門堂と稱し三子爲相冷泉家と唱へて各門戸を張り歌學の師範を爲し妄りに制禁を設けて相争ひしより歌はいよ／＼轉退せり予輩は前代の末葉に於いて既に歌道師傳の斯學に無益なるよしを述べたりしが此處に至りてます／＼其の弊の著しきを見る。故小中村博士曰ひけらく

爲家は一世の倚望殊に重き宿老なりしかば終に此の道の泰斗となりて可否得失を論
 ぜず一に其の指揮に従ふ事となり恰も世尊寺の筆道に於て其の家を立てたる如く歌
 道を以て家の榮えなしたるは實に此の卿を以て始めとす。然れども此卿の歌は概ね
 持法に汲々として専ら縁語を以て修飾し上下のかけ合ひを取るを主とせしかば雄偉
 麗麗なる『新古今』の林一變して遂に其の風地を拂ふに至れり。爲家三子あり長子爲氏
 を御子左(又二條家とす)二子爲教を毘沙門堂三子爲相を冷泉と各家を分ちたれば歌
 林も随ひて異なる中に毘沙門堂流なる爲兼は一時の名匠にて勢威ある歌人なりしか
 ば二條家の流の平坦著實なるを嫌ひ専ら俊成定家の風を心とせしかば少しく氣概あ
 るに似たれど到底一種の奇僻を免れず。『玉葉』『風雅』の二集の如き即ち其の撰なるを以
 ておのづから勅撰集の中一種異林の風あり。因りては二條流なる爲氏爲世の徒數種
 の書を著して毘沙門堂流にて既ふ詞を云々とは詠す可らず云々とは庶幾すべからず
 と書を定家爲家に托して其説を異にせり。爾後毘沙門堂の流は家絶えたれば世人た
 ら二條家の説を以て醇然たる歌學とするが故に(冷泉家と二條家とは大同小異あるの
 み)禁制にのみ拘りて磊落佚宕の風なく歌は型の如く持法に詠むべき者ぞ尋常一様
 の人は思ひて近世に至れり。

と、三家分立の際、歌道師傳の害以て知るべし。當時代の末葉に於ける詞壇の蔚平
 たりしにも拘はらず名匠少く随ひて勅撰歌集の詞思太く劣りて評論すべき價値
 なきもげに宜なり。

以上の勅撰歌集の外「自讃歌」といふものあり後鳥羽院の御時當代の名家十六人(式
 子内親王、後京極攝政前大僧正慈圓權大納言通光、權中納言通具、釋阿俊成卿、俊成卿
 の女宮内卿、有家卿、定家卿、家隆卿、具親朝王、雅經朝臣、寂蓮法師、藤原秀能、西行法師)に
 仰せて各自の佳作と思へる歌十首宛を奉らしめ給ひ院の御製をも十首添へさせ
 給へるもの、彼等が特色の一斑を窺知するを得べし。『百人一首』は藤原公任卿の
 『三十六歌仙』に倣ひて定家卿が小倉の山莊の障子の色紙に古今の名手百人の歌各、
 一首宛を撰録したるものなり。其の他家集に後鳥羽、土御門、順徳、三上皇の御集、實
 朝將軍の『金槐集』、慈鎮和尚の『拾玉集』、西行法師の『山家集』、家隆卿の『壬生二品集』等最
 も其の名高し。歌學の書には定家卿の『詠歌大概』、『未來記』、『和歌庭訓』、長明の『無名
 抄』等後世に傳はれり。而して此等の歌集と歌學の書とに就きては猶下に重要な
 る歌人を評騭するに至りて明了となるべし。

第二節 當期の重要な歌人

西行法師 藤原定家卿 全家隆卿 源實朝將軍

花山院爲兼朝臣 二條爲世朝臣

當時代に通じて歌謡の盛行したる事上來叙陳せるが如し故に名人の稱譽を博したる歌人の多きこと此の世に過ぎたるはなし。其の重なるものゝみを列擧するも猶十數人に下らず。即ち後鳥羽、土御門、順徳の三帝をはじめ奉り西行法師、藤原隆信朝臣、全良經朝臣京極攝政、源通親朝臣、寂蓮法師、慈圓僧正、鴨長明、慈鎮和尚、源實朝將軍、源通具朝臣、藤原有家卿、全定家卿、全家隆卿、全秀能朝臣、源雅經朝臣、式子内親王、宮内卿、俊成卿の女、稍、後れては藤原家良卿衣笠内大、二條爲家卿定家、藤原基通朝臣、全行家朝臣、全光俊朝臣、阿佛尼、二條爲氏朝臣、藤原爲教朝臣、冷泉爲相朝臣以上三人爲家の子、二條爲世朝臣、全爲藤朝臣、全爲定朝臣、花山院爲兼朝臣等是れなり。さて是等の人々に就いては後鳥羽天皇の歌道に秀でたるのみならず當時の歌人を奨励保護せる西行法師の性來瀟洒にして天稟の詞才に富める、又は定家卿、隆家卿さては爲家卿の詞壇を左右せるなど其の他孰れも多少異なる技倆を具へて一世に立たざるはなし。されども元來特殊なる詩想に乏しき我が歌界は是等數多の歌人を列擧して概評を試むるも各自獨特の趣致感想を認むる能はず。故に予輩は是等の中最も多く異采を具へて一世を風靡し併せて後世に至るまで多少其の影響を及ぼ

せるもの數人を撰出して是れが評論を試みんとす。すなはち爰に撰出する歌人は前にしては西行法師、藤原定家卿、全家隆卿、源實朝將軍後にしては花山院爲兼朝臣及び二條爲世朝臣をいふ。まづ西行法師より筆を起こして順次爲兼及び爲世の朝臣に及ばん。

西行法師は俗名を佐藤憲清一説には藤といふといひぬ、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫、左衛門の尉康清の子なり。鳥羽天皇の御宇元永元年(一七七八)に生まれき。年稍長ずるに及びて崇徳天皇の朝鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり左兵衛門の尉に任ぜられたり。祖先累世武を以て著はる。憲清また勇敢にして射を善くし韜略に通じ併せて歌道に造詣するところありしかば上皇深く其の奇才を愛せり。されども彼れは性來榮利を喜ばず平素遁世の志あり。憲清嘗て其の族人左衛門の尉憲康と共に鳥羽殿に朝して還る別れに臨みて明日また相與にせんことを約して翌日期の如く憲康の家に来るに哭聲の外に聞こゆるものあり怪みて家人に問へば曰はく「憲康昨夜暴かに病死す」と。憲清惕然としてこゝに出家の志ますます堅し。彼れ一日出遊して家に還る其の女に年甫めて四歳なるものあり嬉笑し

て出で迎へ衣にまつはりて戯むるさま可憐云ふべからず。憲清も流石に其の意動きけるが既にして以爲らく我が出離を害するもの之れに過ぐるはなし愛着を脱離するは當にこゝに始むべしと乃ち其の女を蹴つて牀上より墜し其の夜遂に官祿妻子を棄て、嵯峨に往き僧となりぬ。年僅に二十三。頃は當に崇徳天皇の保延六年なりとす。法名は圓位といひ後更に改めて西行と呼びぬ。其の妻も後また尼となりて高野の天野に居りて志操堅固に行ひすましたりといふ。西行常に云ひけるやう桑門に家なし須らく抖擻行脚に一生を終ふべしと。此の故に彼れは嘗て一所に定住せず或は西海或は奥羽と歴遊して六十餘州殆ど其の足跡の印せざる地なし。悠々自適興到れば即ち杖を止めて吟詠に餘念なく興去れば身また去りて他處に彷徨す。何時の頃にか伊勢に止まりて二見浦に蘆を結び草を敷きて茵と爲し石を穿ちて研となし扇又は花筐を文臺に代へて年月を送りたることもありとぞ。又或時遠江の國天龍川を渡らんとて武士の乗りたる船に上りけるに舟人乗客の多きを危みて法師ありよと云ひけれど聽かぬふりしてありけるに舟人怒りて彼れを鞭撻せしかば血流れて面を被ふに至りしかども西

行更に恨みたる色なく従容として船より下りたりといふ。其の外彼れ鎌倉に遊びて頼朝將軍の爲に兵法の奥儀を談じけるに臨みて將軍贈るに白銀の猫を以てせしかば受けて漸く門外に出で小兒の嬉遊するを見て投與して去りきといふこと普く人口に膾炙す。是等の逸事は孰れも以て彼れが如何に堅忍不拔にして榮達利欲を念頭に掛けざりしかを想見するに足る。而してまた彼れが如何ばかり船略に通ぜしかは彼れが頼朝將軍の爲に談せしところ轉傳して竟に後世兵家の秘傳となりたるよし『東鑑』に見えたるにても推測するを得べし。

釋教に就いては彼れは顯密の二教に兼通せりきといふ。特に和歌は其の造詣するところ頗る深かり。後鳥羽上皇宣はく西行は才思天成にして常人の學び得るところにあらざ人麿の後身といふべしと以て彼れが歌道の奥義を如何ばかり會得たりしかを知るに足る。彼れ嘗て慈圓僧正に教へて曰ひけらく凡そ密教を學ばんと欲するものは先づ和歌を學ぶべし、さらでは其の奥旨を悟りがたしと。かゝる零碎なる隻句は彼れが歌學上の意見を明知するを得ずと雖も和歌を以て密教の旨に協ふとなす所以のものは此の道の専ら物の哀を知るを第一の要義と

なす故にあらざるか。今彼の歌に就きて驗するに其の歌ふところの概して物の哀を詠じたるもの多し。例へば

わきて見ん老木は花もあはれなりいまいくたびか春にあふべき
かぎりあれば衣ばかりをぬぎかへてころは花を慕ふなりけり
津の國のなにはの春はゆめなれやあしのかれ葉に風わたるなり

の如き又は世上に普く喧傳せる

ころなき身にもあはれは知られけり鳴立つ澤のあきの夕ぐれ

といへるをなど見ても知らるゝ如く彼れの詠歌の大半は殆ど此の悲哀の調を帯びたり。されども彼れが物の哀を詠ずるは滔々たる世上の歌人が單に歌はあはれに詠むべきものと心得たるとはいたく異なるどころなくばあらず。彼れは元來妻子財寶をも棄てゝ世を通るゝ程の人心深く物の無常なるを悲しく感じたるなり。されどもまた彼れは物の無常なるを悲しむと共に無常即常なるを知る、換言すれば彼れは物の無常なる中に常道の終始一貫するを知る故に喜ぶこともかぎりなく深し。上に引用せる歌の中にも明かにかゝる感想を具有するを

見る。猶一層其の旨の幽玄なるものを求むれば

ふかく入りて神路のちくを尋ねればまたうへもなき峯の松風

さやかなる鷺の高根の雲井よりかげやはらぐる月よみの森

の如きは其の一例となすに足れり。されば彼れの詠に或は瀟洒なるもの或は哀絶なるものゝあるは勿論或は人におくれて嘆きける人を見ては同感の情といめあへず

なきあとの俤をのみ身に添へてさこそは人のこひしかるらめ

と詠じ或は棄てたる浮世のなほ厭はしきとては

何事にとまるころのありければ更にしもまた世のいとほしき

とよみたる如き孰れも彼れの肺肝より出でたるものにあらざるはなし。かるが故に彼れの詠には奇を求め巧を競ひたる跡は更にあらざるなり。措辭の技倆に就きては彼れは明かに其の感想を發露するに餘裕ありしが如し。其の句法に艱澁信偏なる調子を認めざるのみならず往々斬新なる言詞さへも能く調和して流暢なるを得しめたり。

かくて彼れは文治の頃京都に還り東山の双林寺のほとりに草蘆を結び櫻の木など植ゑめぐらして常に釋迦入滅の日に臨終せんことを願へり。嘗て歌うて曰はく

ねがはくは花のもとにて春死なんそのきさらぎのもちづきの頃

と果して其の詠の如く建久元年二月十六日即ち釋迦入滅の日におくるゝこと一日にして逝りぬ。享年七十三歳。其の家集を『山家集』といふ。また昔より自ら詠みおきける歌を抄出して三十六番につがひたるもの一卷を『御裳濯の歌合』と名づけ他の一卷を『宮河歌合』と名づく。其の外に彼れが見聞のまゝ書き集めて佛説を載せたる隨筆を『撰集抄』といふ、これはた今に傳はれり。

藤原定家卿は俊成卿の子にして母は若狹守親忠朝臣の女にて美福門院の女房伯耆といひし人なり。卿は二條天皇の御宇應保二年(紀元千八百廿二年)に生まれき。初の名は光季といひしが中頃季光と改め尋いでまた定家と改めたり。資性頗る躁急にして進取の氣象に富みまゝ才氣に誇負する癖あり。治承壽永の間正五位下に叙せられしが文治元年殿上に於いて源雅行朝臣と忿争し燭を把りて其の類

を擧ちし罪によりて後白河法皇の勅勘を蒙り官薪を除かれたり。されども其の年の暮父俊成卿深く此の事を歎き歌を作りて哀訴の意を寓せしかば法皇聞こしめしていたく之れを憫み給ひて本位に復させられき。其の後越えて五年左近衛の少將に任せられ兼ねて因幡安藝等の權介を歴て正四位に叙せらる。建仁中左近衛權中將と爲り美濃の介をも兼ねたり。元久二年後鳥羽上皇の勅を奉じて藤原有家卿全家隆卿全雅經朝臣源通具朝臣等と共に『新古今和歌集』を撰進せし事前記載せるが如し。承元の初つ方上皇當時和歌に名あるものをして最勝四天王の障子に名所の歌を詠ましめ給ふに上皇躬ら撰定し給ひしが此の卿の歌を最も多く採り給ひたり。建暦元年從三位に叙せられ建保中參議に任じ治部卿と爲り正三位に進む。其の後民部卿に遷り貞應元年に參議を辭し安貞元年に更に正二位に叙せらる。定家卿常に父俊成卿は三位にて終られしにものれのかく二位に叙せられたるは無上の幸慶なりとぞ悦ばれける。貞永元年權中納言に任せられ尋いで帶劔をも授けらるゝに至りぬ。此の時に當りて卿が得意の程知るべきのみ。其の頃後堀河天皇の勅命を承けて『新勅撰和歌集』の撰進に着手し夙夜匪勉

事に従ひしが巻軸完成するに先だち文暦元年天皇崩御ましませしかば奏せずして稿を留めたり。『新勅撰和歌集』とて今に傳はるものは即ち此の稿本なりとす。天福元年齡七十一の時剃髮して明靜と號し仁治二年遂に逝りぬ。行年當に八十歳。世に此の卿を京極黃門と稱するは二條の北、京極の西に住まはれし故にて黃門は中納言の唐名なり。卿はまた嘗て別莊を嵯峨の小倉山に設けて靜養の地となし時に或は居住せし事もありきといふ。

卿は歌通の外史傳を涉獵し又詩を賦し文を作り兼て弓馬の術にも長じたり。就中和歌の才は殆ど其の天稟に出で加ふるに家學として其の奥義秘説を繼承せしかば能く一世に獨歩するに至りぬ。後鳥羽上皇ある時定家卿を小御所に召され和歌を判ぜしめ給ひて勅説ありけるは、朕が汝を此所に召すは汝を重んずるが故なり宜しく汝が胸底を開いて思ふところ殘すことなく批判し申さるべし、若し知りながら憚りて云はざる事もあらば其は朕が汝を召す本意にあらずと申されたる事あり。かゝれば當時諷詠の道大に榮えて名匠偉人を以て目せられしもの多かりきと雖も皆此の卿を推重せざるはなかりき。さて卿が歌道に於けるは天稟

の才に出で家學に淵源せるところ頗る深しと雖も其の平生の勵精刻苦は亦大に興りて力ありしが如し。卿が家に在りて歌を作るには必ず南面の障子を開かせて遠く外を望み衣襟を整へ坐を正してのち詠まれたり。其の言ふところを聞けば曰はく、日ごろ靜肅の處に在りて之れを習ふ時はかしこき御前にありても慮する事なかるべしと。卿はまた歌を詠まんと思ふ時はまづ白樂天の「故郷有母秋風涙、旅館無人暮雨魂」といへる句若しくは「關省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」といふ句などを誦するを常としき。かるが故にや其の詠もあつから風格高妙にして心深きもの多し。

秋の歌

明けばまた秋のなかばもすぎぬべしそら行く月のをしきのみかは
守覺法親王五十首の歌よませけるに

霜まよふそらに知られしかりがぬのかへるつばさに春雨ぞ降る
されども一概に云はし卿の歌は過巧なるものなり即ち意匠は務めて新奇ならんを希ひ措辭はわざと華麗ならんと企てたる趣あるを見る。蓋し措辭の一題に就

きては卿は殆ど無比の才能を有するもの、縦横無盡優に精緻を極めたり。例へば
攝政大政大臣家歌合に「中晚風といふことを

うづくにか今宵はやどをかりごろも日も夕ぐれの嶺のあらしに

詩を歌に合はせ侍りしに山路秋行といへる心を

みやこにも今やころもをうつ山夕しもはらふつたのしたみち

題を知らず

消えわびぬうつろふ人の秋のいろに身をこがらしの森のまたつゆ

等の諸詠は只其の一斑を示すのみ。按ずるに意匠の新奇措辭の華麗は我が歌界
が必ず一度は過ぐべかりし趨勢なりしが此の趨勢は卿によりて始めて充分に發
展せられたりともいふべし。されどもかゝる趨勢は恐らくこゝに其の進路を止
めざるを得ず。何となれば意匠の新奇と措辭の華麗とは卿の如き才能あるもの
によりてこそ充分なる成功をもなすことを得べけれ、さらぬものによりては徒ら
に輕佻浮華に流れて終るべければなり。後鳥羽上皇申されけるは、定家の歌は人
の能く模倣し得るところにあらず、彼れは専ら流麗を尙びて意味を主とせず、おも

ふに彼れは衆に優れたる技倆ありて巧に趣向を構ふるも若し骨力頓弱なるもの
にして之れに倣はしめば其の歌大方無味索然たるものたるべしと。現に其の子
爲家卿の如きは其の才力稍、見るべきものありて僅に父卿の衣鉢を承けて其の風
の歌をも詠みたりと雖も其等も概してはあらぬさまに流れて皮相を傳へたるに
止まりき。まして其の餘の歌人や輕佻野卑殆ど見るべきものなきに至れり。
さて定家卿はかくの如く才能衆に超えて古今の詞壇に一時期を畫する程なりし
かども躁急なる資性は晩年に至りても僅に其の主角を消磨し去りたるのみにて
往々儕輩を蔑如する事ありき。故に卿か進取の氣象に驅られて自己の不遇を嘆
ぜし壯時の作に不平を漏らせる言詞の鄙からざるは勿論稍、晩年に及びても才氣
を恃みて人を侮蔑したるがために讒せられて後鳥羽天皇の勘氣に觸れしことも
ありきとぞ。上皇の宣旨にも定家は才學たぐひなしと雖も心術正しからず故に
其の推獎せる歌の如きも或は私なしとも限らず加之みづから高うして人を侮る
風あり世の或は其の歌を賞するものあるも若し我が自讚の詠にあらざる時は色
をなして恐ることありとやうに云れたり。かゝれば當時彼れを敵視する人も

蓋し尠からざりしならんに能く其の中にありて一世を風靡したる技倆豈に尋常なりとせん。

其の著述に『百人一首』と題して天智天皇より當時に至る歌人百人の詠一首宛を擇びたるもの、世に流傳せるは誰れも知るところ、其の他『詠歌大概』『雨中吟』『未來記』『照註密勘』『辭案抄』『毎月鈔』『源氏奥入』『拾遺愚艸』『同員外』『明月記』等あり。此の中『拾遺愚艸』『同員外』は其の自詠を集録せるもの、『明月記』は其が家の日次の記録なり。

此の頃に於いて定家卿と殆ど其の盛名を齊くせしものを藤原家隆卿とす。此の卿は壬生中納言光隆卿の第二子にして母は兼實朝臣の女なり後白河天皇の御宇保元三年に生まれ幼にして穎悟の聞こえありき。卿は嘗て寂蓮法師の婿となりしが其の頃和歌を藤原俊成卿に學びぬ。俊成卿常に人に語りて、此の仁未來の歌仙たるべし、見參のたびに難義などいふことは問はず、いつも歌よむべきまさしき心はいかに侍るべきぞといふことを問ふとていたく感ぜられたり。されども少壯のをりはさまで聞こゆる事もなかりしが建久の頃よりやう／＼其の名を顯

はし遂に歌道の奥義に達して定家卿と共に世上に賞讃せらるゝに至れり。定家卿は前にもいひし如く驕慢の風ありて常に儕輩を輕侮せしかども此の卿に對してのみは毫もさる風なきのみならず勅を奉じて歌集を撰びける時は大方此の卿の歌を多く採録せられたり。さる程なれば爾餘の歌人に尊重せられしことは管々しく云ふまでもあらじかし。『古今著聞集』に曰はく、後鳥羽天皇始めて歌の道御沙汰ありける頃後京極殿攝政藤原良經公に申し合はせ參らせける時彼の殿奏せさせ給ひけるは家隆は末代の人麿にて候ふなり、彼れが歌を學ばせ給ふべしと申させ給ひけりと。又西行法師も家隆卿のいまだ若くて坊城侍従と稱しける頃其の秘藏の『御裳濯河の歌合』と『宮河歌合』とを授け奉るとて、圓位は往生の期既に近き侍りぬ此の歌合は愚詠を集めたれども秘藏のものなり末代に賞殿ばかりの歌よみはあるまじきなり思ふところ侍れば附屬し奉るなりといひて二卷の歌合を授けしるよしも同集に見えたり。此の卿常に後鳥羽上皇の爲に甚だ親昵せられたり故に承久の亂後上皇の隠岐に遷さるゝに及びても卿は猶去ばく／＼獻詠するところありき。元久二年定家卿等と勅を奉じて『新古今和歌集』を撰進せし由は既

に再三記載きたるが如し。其の一年の間に詠せしところの歌およそ六万首今に傳はるものは僅に其が十の一にも及ばずといふ。其の官は宮内卿に進み從二位に至りぬ世に壬生の二位と稱せしも此の故なり。四條天皇の御宇嘉禎二年病のため薨髪して佛性と號し攝津の國の天王寺に住しけるが明年つひに逝りぬ。此の時年八十歳。家集を『玉吟集』とも亦『壬生二品集』ともいふ。

其の詠せる歌は感想、着實、平淡にして妄りに奇巧を衒はず格調流麗にして高雅の風を帯びたり。是れ蓋し此の卿の當時の人々に振んでたる所以なり。此の點を以て云は、卿は當に定家卿の絢爛を貴び奇巧を求めしと相對立せるものとも謂はれ得べし。例へば

攝政太政大臣家百首歌合に春曙といふ心をよみ侍りける

かすみたつ末のまつ山ほのくくと涙にはなるよこぐものそら

和歌所にて六百首歌奉りしに冬月

ながめつゝいくたび袖にくもらん恙ぐれに更くる有明のそら

詩に合はせし歌の中に山路秋行といへることを

秋風のそでに吹きまく嶺のくもをつばさにかけてかりも鳴くなり

百首歌よみける中に

きのふだに問はんとおもひし津のくにのいく田の森にあきは來にけり

千五百番歌合に

おもひいでよ誰がかねごとのすゑならん昨日のくものあとの山風

の如き孰れも感想文致の着實、平淡にして高雅流麗なるを示さざるはなし。『續歌仙落書』に此の卿の歌體を評して風體けだかくやさしく艶なるさまにて又昔思ひいでらるゝふしも侍り末の世にありがたき程の事にやすがたさまくなれども大内の花盛り心あらん雲の上人いざなひて暮るゝまで詠むる心地なむする」と見えたるも過言にあらず。此の卿の詠歌が當時の詞壇を占領せる靡浮巧緻の風を離れて着實高雅の格調を持したるは恰も延喜天曆の歌風を再び數百年の後に見るらん趣あるを覺ゆ。

斯くの如く家隆卿の詠歌は稍當時の風格を離れて着實高雅の趣ありきといへども仔細に稽查する時は未だ其の着想措辭兩ながら全く當代を脱せしものと云ふ

べからざる點あるを見る即ち軟弱なるが如きは其の較著なるものなりとす。故に若し此の時代にありて能く此等の風格を離れて優に一異采を點出せしものを求むれば予輩は鎌倉第三代の將軍源實朝卿を推さざるを得ず。實に實朝卿の詠は高大雄渾眞摯素樸當代に於いて遂に其の比を見ず、さながら奈良朝の歌謡を吟咏する概あり。以下直ちに其の特質を摘出する前にまづ將軍が閱歷の一斑を見ん。

將軍は誰れも知る如く源右府頼朝卿の第二子にして母は北條時政の女政子なりき。後鳥羽天皇の建久三年一千八百五十二年父頼朝卿恰も征夷大將軍に補せられたる當年鎌倉に生まれ幼名を千幡といひぬ。其の年はづかに十二歳にしてたま／＼兄の頼家卿將軍の職を廢せらるゝに至りしかば其の跡を襲ぎて從五位下に叙せられ征夷大將軍を拜命し次いで右兵衛佐に任ぜられき。これより後十數年を出でざるに右近衛少將、同權中將、權中納言、左近衛の中將等の諸官を経て建保元年二月正二位に至り同六年正月權大納言に任ぜられしが同二月みづから請うて左近衛の大將となり同十月更に内大臣に進み同十二月遂に右大臣となりぬ。

是れより先將軍の權大納言に拜せらるゝや幕臣大江廣元將軍の齡まだ壯に至らず剩へ尺寸の勳功なくして榮進甚だ速かなるを見、不測の殃禍あらん事を怖れて切諫せしかども將軍當時外戚いたく跋扈して源氏の正統永く繼承せざらんを慮りせめては我が身の官位をだに高め家聲を發揚しおかんとて聽許せざりきといふ。さる程に將軍は右大臣に任せられて翌年即ち承久元年正月廿七日夜鎌倉の鶴が岡八幡宮に於いて拜賀の禮を行ひ其の式果て當に石階を降らんとして頼家卿の遺子僧公曉のために刺殺せられけり。齡やう／＼二十八歳。翌日其の地なる勝長壽院の側に葬りぬ。初め將軍拜賀の日其の室をして髪を梳らしめ自ら之を抜いて室に興へ戯れて曰はくことを我が亡き跡の形見にもせよと又其の邸を發するに臨み庭上の梅花を見て

いでいなばぬしなきやどしなりぬとも軒端のうめよ春なわすれそ
と歌へりきと後に思へば二者さながら鏡を爲ましが如し。

將軍は資性温雅聰慧、幼にして學を好み頗る風雅の念に富めり。故に當時學事に疎き鎌倉武士の間に人と成れるものとして、稍、異常の教育を受けた。則ち彼

れは文章博士源仲章に就きて孝經をはじめ引きつゞき和漢の書史を學習せりき。されども和歌に至りては將軍年まさし十五の時其の詠三十首を京都に遣はして定家卿の批判を乞へりし事あるのみ。尤も加茂眞淵翁の説に従へば將軍はその後定家卿より其の相傳の私本と稱する『萬葉集』を得て専心に講習し能く其の所載の歌に就き玉石を甄別して讀めりきといふ。また『東鑑』には建曆元年鴨長明源雅經朝臣の推舉により鎌倉に下りて將軍實朝卿に謁したる由見えたり。鴨長明は當時有数の歌人として其の名を知られしもの然らば將軍はまた長明につきても歌道を質したることもありしなるべし。

其の著『金槐和歌集』は彼の自詠七百首を集録したるものなり。將軍の歌風はあづから一昧を爲して管に當時の詞壇に一の比類を見ざるのみならず殆ど『古今集』の風格をも離れて復に『萬葉集』の調を帯びたり。たとへば

歌

武士の矢なみつくろふ小手の上にあられたばしる那須の志の原

太上天皇御書下影時歌

山はさけ海はあせなん世なりとも君にふたこゝろわれあらめやも

といへる歌の高古雄壯にして眞摯なるは誰れも知るところ其の他

古郷春月といふ事をよめる

たれ住みてたれながむらん故郷の吉野の宮の春の夜の月

秋のばしめ月あかゝりし夜

秋風に夜の更けゆけば久方の天の河原に月かたむきぬ

秋の歌

かり鳴きて秋風さむくなりけりひとりや寐なん夜の衣うすし

箱根の山を打ちいで見れば浪のよる小嶋あり供の者に此の海の名は知るやと尋ねしかば伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞きて

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

と詠じたる如きも亦適強素樸の體すゝるに『萬葉集』を見るらん心地す。さて將軍の歌の斯く高古雄壯にして眞摯素樸の風あるは管に平凡なる歌人等が強ひて萬葉の風格を學ばんとして單に措辭の上を修飾摸倣したりしとは全く異なり感想

はた能く高古雄壯の趣致ありしこと以上に列擧したる歌を見ても知らるべし。蓋し將軍は定家に就きて學習せしことありきといへども措辭の一點はむしろ將軍の注意せざりしところなりしが如し。例へば「大乘作中道觀歌」と題しては

世の中はかゝみにうつる影なれやあるにもあらずなきにもあらず
と詠じ又「思罪業歌」と題しては

ほのほのみ虚空に充てる阿毘地獄行くへもなしといふもはかなし
と詠ずるなど其の風姿の簡短なる散文めきたるをも顧慮せざりき。就中紅梅を
字音に讀ませて

我が宿の八重の紅梅咲きにけり走るも知らぬもなべて訪はなん

と歌ひたる如きは益措辭の上にはさせる注意を置かず唯感ずるまゝに其の言はんと欲するところを吟咏せし人なるを知るに足る。此の外にも猶古歌を誤解し語義を違へて用ゐたるなどは殆ど數へがたき程なり。按ずるに將軍が此の如き不注意にして未熟なる措辭を以てして猶高古雄壯の調を歌ひ一意専念優麗纖巧を事とせし詞壇に立ちて世の視聽を驚かせしは將軍の性來おのづから歌人たる

に適したるものありしや必然なり。故に余輩は將軍が定家卿に學びたる事ありきとするも其の一事のさまで將軍をして得るところあらしめきとは思はざるなり。若しそれ將軍が『萬葉集』を講究したる影響に就きては予輩も多少認識せざるにあらずと雖も亦將軍が武門に生まれ尙武の氣象旺盛なりし鎌倉にありて成育したるに重きを措かんとす。此の點より見れば京鎌倉に於ける人情風習の差異は此處に尠からず。其の現象を呈したりと謂ひ得べし。後世の史家將軍を評して極めて文弱優柔なる一貴公子に過ぎずとなせども余輩は嘗て將軍の詠を誦することどに其の決して平家の子孫の如き柔弱なるものなりきとは爲す能はざるなり。さはいへどまた予輩は強ちに眞淵翁の所説の如く直ちに將軍を目して奈良朝以後唯一獨歩の大歌人と爲すものにあらず唯將軍の如き少壯の齡にして能く詞壇の一方に卓立し以て當時に推され百世の後にまでも熱誠なる嘆美者を出ださたりしを偉なりとするのみ。實に當時において定家卿は既に將軍の歌を賞して鎌倉右府の歌を見る時は歌は物憂くなりぬといひ其の一首を「百人一首」の中に擇びて朝夕の諷詠に資し『新勅撰和歌集』には其の二十五首を採録したりき。其の

後詞壇の風織細をのみ貴びぬる世となりても賞揚するもの尙盡きず諸集の撰者はた將軍の歌を採りて載録したるもの數十首の多きに及べり。近世に至りても眞淵翁の如きは特に將軍の詞才に秀でたるを賞揚して貫之躬恒といへども之れに師たること能はざるべしと云へりき。されども天齡を將軍に假さず彼れは遂に其の姪公曉の爲に暗殺せられて高古雄壯眞摯素樸の風また榮えず我が歌道は是れより永く反對の方向を取りつゝ唯一に軟弱織細を以て其の極宗と看做すに至りぬ。

さて實朝將軍逝きて後また高古雄壯の調を歌ふものなく我が歌界の全く軟弱織細に赴きたるはそも何の故ぞ。按ずるに此の頃我が歌界の覇權は全く優柔なる公卿の手にのみ委せられ一種の技術となりたるに剩へ定家卿等の一派が専ら意匠の新奇を求め措辭の華麗を競ひたる餘弊のみ傳はれるに依らずばならず。蓋し優柔なる公卿の口より雄渾壯絶の調を唱へいでんはかたく詞才定家卿等に及ばぬ歌人の彼れが如き意匠の新奇と措辭の華麗とを併はせ求めんは易からず遂に其の弊のみを傳へて軟弱織細の風に成り了せしにこそ。されば余輩は特に

定家卿の意匠と措辭とを模倣せんと企てしものに此の風の甚しきを認む。故に切言すれば定家卿に於いて既に此の軟弱織細なる風調を來たすべき暗潮ありと謂ふべし而も其の子爲家卿(一八五七—一九三五)詞壇の牛耳を執るに及びて其の潮流の稍顯著なるを見る。即ち爲家卿は詞才なかりしにあらざるも遠く其の父に及ばざりしかば歌ふどころも徒に父祖が歌風の皮相を傳ふるに止まりて其の精神に及ばず格法を守るを以て專一の要務とし只管ら新を求め奇を希ふあまり縁語を用ひて上下の掛けあひを取るを主となせりき。かゝれば『新古今』時代の雄偉艶麗なる風は此の頃一轉してあらぬ方に赴きしも當時許多の歌人中能く此の卿に及ぶものなく殊に此の卿は父祖の聲望を荷ひしかば歌界はつひに其の風の歌をもて占領せらるゝに至りぬ。かくてのち爲家卿の長子爲氏朝臣(一八八二—一九四六)御子左又は二條ともと號し第二子爲教朝臣毘沙門堂と稱し第三子爲相朝臣(一九二三—一九八八)冷泉と呼びつゝ三家分立するに及びては其の詠出せる歌風各多少異なりきと雖も亦其の祖俊成卿若しは定家卿等の務めて歌ひしものとほのづから別にして孰れも其の弊をのみ襲ふが如き觀あり。爲家卿の法に

泥み又華に流れたるは

春立つ心をよみ侍りける

あら玉の年はひとよのへだてにてけふより春を立つかすみかな

早春を

いとはやも春立ちけらし朝かすみたなびく山に雪はふりつゝ

といへる歌にても知らるべし。其の格法に泥みたる故にや姿詞整然たる趣あれども歌情猶深からざる風あり。其の父定家卿の歌の詞髓にして義理幽遠なるに比すれば未だ及びがたくやあらん。さて爲氏爲相の兩朝臣は爲家卿の風骨を得て姿詞共に和熟す而も爲氏朝臣の句法整然として稍氣力あるは爲相朝臣の措辭婉曲にして無下に軟弱なるとは異なれり。爲氏朝臣の歌の

秋夕雨

ながむとて夕は露の我がそでをいかにかほさん秋のむらさめ

掃衣幽

里とほき夜半の寐さめの秋風にそれかあらぬか衣うつなり

といへるを爲相朝臣の

立春の心をよみ侍りける

いつのまに霞の色となりぬらん昨日は雪のふる年の空

院百首歌の中に

風すさぶ垣ほの草の下葉までおつれば露をまたふ月かけ

といへるに比較し見よおのづから其の別あるを認むるを得ん。かくてまた爲教朝臣の歌に至りては爲氏爲相の兩朝臣と異なるどころ多し。此の朝臣の歌は爲家卿のに似たるよりは寧ろ父祖俊成卿定家卿等の幽玄体に倣ひて及ばざるものとやいはん奇僻見えたり。例せば

見花

春ごとに飽かずなれても山ざくら花にや今日もながめくらさん

寄柱戀

契りしもありしなごらの橋ばしら立つ名ばかりに朽ちや果てなん

の如し。其の子爲兼朝臣「一九九二」また父爲教朝臣の歌風を襲ぎて稍氣骨ある

を詠出せしものから其の其極往々奇に流れたり。

家に歌合し侍りし時春雨を

梅の花くれなるにほふ夕ぐれにやなきなびきて春雨ぞふる

の如き又は

春歌の中に

思ひそめき四つの時には花の春はるの中にもわけぼのゝ空

と歌へる如きは僅に其の一斑を示せるのみ。此等の歌を見るに殆ど歌謡の趣味を没了する觀なくばならず。されども朝臣の歌にも亦真率流麗なる歌の諷咏に適するもの往々見えたり。

百首歌奉りし中に夜旅

とまるべき宿をば月にあくがれて明日の道ゆく夜半のたび人

海邊眺望を

浪のうへにうつる夕日のかげはあれど遠つ小島は色くれにけり

爲氏朝臣の子爲世朝臣(一九一〇—一九九八)の歌は祖父爲家卿さては父爲氏朝臣

等の風を學びて是れはた一方に僻したる趣見ゆ。

守覺法親王家に五十首歌よませ侍りけるに旅の歌

九重よちもひちきつの濱千鳥なくく出でしあどの月かけ

攝政太政大臣家歌合に羈中晚風といふことをよめる

いづくにか今宵はやどをかり衣日も夕ぐれのみねのあらしに

措辭婉曲流麗なれども縁語を用ゐ上下の掛合をとるに過ぐ。是れ前に云ひし如く爲家卿等の詠出せし歌風の一層極端に流れて措辭の奇巧に流れたるものとやいはまし。故に此の朝臣の歌を爲兼朝臣に對すれば彼此の歌さながら兩極端を示す趣あり。彼れは想の邊に奇を求めて其の奇に失し是れは詞の上に巧を希ひて其の巧に過ぎたるものなり。此の故に彼れの最も極端なるものは意味滅裂して錯雜なる平語の如くこれの最も極端なるものは姿詞圓轉して一種の綺語に似たり。予輩嘗て三家分立の後に至りては孰れも父祖が歌風の弊のみを襲ふ觀ありと云ひたるも此の故なり。若しそれ爲兼爲世兩朝臣の歌の平坦着實なるものを選びて比較せんには予輩は歌人として寧ろ爲世朝臣の優れるを想ふ。左に掲

ぐる歌の如きは蓋し此の説を證明するに足るべしと信ず。

暮春月

中そらにかすみてのこるかげもなし暮るゝ彌生の有明の月

稀逢戀の心を

あつから待ちえて今夜はらふとも枕のちりはまたや積らん

百首歌たてまつりし時

煙りさへかすみそへけり難波人あし火たくやの春のあけぼの

かくて兩朝臣各流派を立て、相拮抗せしかばつひにはおのれの門戸を張らんとするあまり互に非議するに至りき。故に爲世朝臣一派の輩が父祖の遺訓に托して爲兼朝臣の歌を貶黜せしが如きは素より無稽なる譏諷に過ぎずと知るべし。爲兼朝臣の歿後毘沙門堂の流派は跡絶えて獨り御子左と冷泉とのみ永く榮えたり就中御子左の一派繁盛を極めたり。爲世朝臣の子爲藤爲明爲定爲通等の諸卿共に其の名あり殊に爲世朝臣の門に順阿法師一世に其の譽れ高し。是等はまた後に至りて分説すべし。

石原正明が『尾張の家裏』に曰はくかくて此の道地に落ちて年月経たりしを後嵯峨院世をまつりごちし給ひしほご再び世上に勃興して百首歌合など何にくれど数多かり。かゝりければ又其の世につけたる上手たち出來て絶えたる道をつぎしなり。其の上手たちの中に爲家卿は俊成卿の孫子なりければ世のおぼえよせ重き宿老なりしかば唯此の人ひとりをおもてに立て、よくもあしくも其の指揮に従ふ事となりぬ。世尊寺の筆道に家を立てたる如く歌道を家業とあたは此の卿なん始めなりける。かくて此の卿に子三人あり太郎爲氏其の子爲世御子左と號す二郎爲教其の子爲兼毘沙門堂と號す三郎爲相冷泉と號す。冷泉は此の論に用なければ姑くさしおくべし。御子左の流れは爲氏爲世打ちつゞきていさめてたき歌よみなり。さるは爲家卿が風骨にて俊成定家の氣韻には遠く及ばれどもさる處せき規矩の中になん滞りなく詠みたるものにて結句は爲家卿よりもすぐれたる所なん見ゆる。(中略)毘沙門堂の流れは爲教卿上手にて爲氏卿にも劣れりといふけつめふさしも見えわかず。其の子の爲兼卿もまた一時の名匠にていさ勢ひある歌よみなり。此の風は爲家卿の持法なるを嫌ひて上二代の風に心をかけたれば少しく氣概あるに似たれど怪しき僻ある風にて御子左にまさらず、まさられど一家なり。『玉葉』『風雅』さていみじき物にいひおもふは御子左の遺言なればさのみはいかゞあらむ。野守鏡、非蛙眼目なさにそまられたるは我が力引きたる論説なれば其の心して見るべし。かくて御子左は爲氏爲世と打つゞきて和歌は只我が家のもを爲しはてたるは同流にさる物の上手出でて撰集をも承りしことな

れば家門の嫡庶のまぎれも出できぬべくて周章したるものなり。『群書類從』に入りたる陳狀を見て知るべし。さるまゝに若干程の偽書を作りて毘沙門堂にてあそぶ言葉どもをまかぐとてよまざるこそ、まかぐとは、希はざる事と云ひて定家爲家の兩卿に托して其の既を主張して爲兼卿の既を防ぎたり。此の兩卿はかの系別の祖なれば必ず、據るべしと思ひてなり。世上の歌よみに草庵跡とて持法なるがあるは其の風の名残りなり。かくて爲兼卿は其の家つゝかす爲世卿は爲藤爲明爲定爲通等の卿皆めでたき歌よみにて遂に此の風に一致したり。

第四章 散文

第壹節 散文界の概況

鎌倉時代に於ける散文の特質 佛教思想若しくは

厭世的觀念 武士道並に儒學思想 文詞の進歩

作者 著書

以上に説ける如く此の期の歌謡は猶平安朝の艶麗優美若しくは不自然の傾向を繼承して所謂様によりて蒔蘆を描く觀ありしが散文は全く之と異なりて顯著なる發達を見せり。單に其の種類のみに就きていふも既に前代に見えたる序跋、

物語、日記、紀行、消息、草子、雜史等の如きは勿論、記録、戰記、註疏の類はた新たに此の期に入りて出でたり。而して是等のもの、通有せる感想に至りては殊に平安朝に其の比を見ざるものありて存す。即ち佛教思想若しくは厭世的觀念の一大思潮となりて普く此の期の散文界に流通せること是れなり。蓋し是等の感想は既に第貳章に於いて述べたる如く當代の人士が一般に懷抱せるもの、發して散文の上に見はれたるなり。それ當代の初期に於ける天災地妖はさてあれ保元の亂、平治の變は眼のあたり人倫の壊滅を示し源平の盛衰は親しく人生の恃むべからざるを知らしめき。此の時に生まれあひて躬ら世態の變異を聞睹せるもの誰人か無常の感あらざらん。况して此の頃興隆せる佛教的思想は普く人心を陶冶して益、無常の感を鼓吹したるをや。されば躬親しく此の壊亂の世を関し佛教的思想に陶冶せられつゝ遂に厭世の觀念を懷抱するに至れるもの筆を執りて文を成す如何でか其の作の是等特異なる思想を包容せざるべき。げに當期に於ける散文は或二三の作を除く外概ね此の佛教的若しくは厭世的觀念を以て支配せらる。况んや當代筆を執りて散文界に馳騁する者多くは僧侶、隱士の輩にして其の主題と

するところのものはた當時の社會或は人事にありしをや。すなはち

それ人の友たるものは宿めるを疎み無なるを先きす必ずしも情あることすなほなることば愛せず只、絲竹管絃を友とせんには如何す

とす

今は禁色雜袍をゆり顯職温官を経て父子丞相の位に至り兄弟將相の榮を並べたり未代といへども不思議なりし事共なり。政道忽ちに亂れ官途こゝにすたる、歟。是はひさへに大威徳明王の御利生にやき覺えたり

といへる如き僅に其の一例に過ぎされども此の如き思想は當期の散文中殆んど明暗何れにか認識せらるべし。そもく前代の散文は歌舞音樂溶々たる平安城裡の詞人が其の間の消息を描寫せるものにして既に樂世的思潮の流行せるを見たり盛衰常なく榮枯定まりなき鎌倉時代の文士が當時の社會を叙述せるもの、厭世的觀念を包容せるも理の當然なるのみ。而して當代の散文が包容せる感想は實に是等佛教思想若しくは厭世的觀念に限らずかの當時武人の生命とせる武士道の如きさては汎く儒學思想の如きまた孰れもこゝに見るを得べし。例へば

『保元物語』に

乙若生年十三なるがあな心憂の者共のいひかひなさや我等が家に生まる、者は助けなければ心は猛しきこそ申すにかく不覺なる事を宜ふものかな。世の理をも辨へ身の行末をも思ひ給はゞ七十になり給ふ父の病氣に依りて出家還世して憑みて來たり給ふなだに斬るほどの不常人のまして我々を助け給ふ事あらじ(中略)命助かりたりとも乞食流浪の身となりて此處彼處に迷ひ行かばあれこそ爲難入道の子どもよと人々に指をさしれんは家の爲めにも耻辱なり

とて死を輕んずるは所謂義のために生を鴻毛に比して顧みざる武人の精神にあらずや。また同物語に保元の亂階を論ずると

されば聊かも御私なく天下を治め給ふべきに愛子に溺れて庶を立て後妃に迷ひて弟を用ゐる國の亂る、基なり。此を以て書に曰はく聖人の禮をなす其の嫡を尊みて世を繼がしむるにあり太子殿しくして庶子を尊ふは亂の始なり必ず危亡に至る事

是れ即ち儒學的思想を以て帝位正統を論評するものにあらずや。若しそれ同時代に於ける詞人の作にして散文のみひとり平安朝のと異なるどころ多く歌謡の依然前代の風ありしもの主として彼れは自然なる人間社會の描寫をつとめ是れは不自然なる題詠をつとめたるに歸せずばあらず。

さて當期の散文に於ける文詞の進歩に至りては特に著るきものあり。蓋し前代の散文も多少漢語若しくは佛語等を混和せざりしにあらざると雖も此の期の散文には殊に能く是等の調和せられたるを認む。由來我が國語の優長閑雅なるは單に悲哀優婉の事件を寫すに餘りあるも未だ莊重偉大の思想を發表するに足らざりき。然るに此の期の散文は能く漢語佛語等を固有の國語に調和して優婉悲哀なる事件も莊重偉大なる思想も共に自在に描破叙陳するを得たり。

頃は二月十日餘りのこまなれば梅津の里の春風に余所の句ひもなつかしく大井川の月かけも霞にこめて朧なり。一方ならぬあはれさも睡れゆみこそ思ひけめ往生院レウツウインさは聞きつれども定かにいづれの坊さも知らざれば此處にやすらひかしこに千み尋れいぬるぞむさんなる。

といへる句の優美にして

左門衛尉は頭もなき女房の傍に臥沈みたり。盛遣は走寄り御敵具して参りたり、先づ御首御覽せよとて懐より女房の首を取出だして其の身に指合せて腰刀を抜きて左衛門尉に與へて盛遣が所爲なり和殿の頭を振くと思ひたれば斯かる事を仕出だしたり

餘りに心憂ければ自害せんと思へども同くは御邊の手に懸りて死なん、さこそ本意なく思ひ給ふらめ、疾々切り給ふとて頭を延べてぞ居たりける。

といへるの如何に壯絶なる孰れも優に固來の國語漢語さては俗語を調和して流暢自在なるを見るべし。尙予輩が第二章に述べたる諸種の言詞は散文の上にて於いて始めて認むべきものなるにても其の進歩の尠少ならざりしを推知すべきなり。是れにつけても漢文學の深遠なる講究は早く既に衰運に歸せしも所謂淺く沈く斯學の一般に傳播せしを想察するに足る。佛語はた然り。

これを要するに此の期の散文の主なる特質は其の感想の佛教的若しくは厭世的なると、其の主題を普く人間社會に求めたると又作者の多くは僧侶又は隱士なりしとにあり。而してまた武士道の發揮の如きも平安朝に比すれば一異采を表するものといはれ云ふべし。其の聲調の莊重偉大の風を帯び而して之れを現はすに和漢混和文の一體を創始して漢語佛語の如き外國語を固有の國語に調和したるはた前代に其の比を見ざるところなり。但し當期の末葉に出でたる二三の作、又は女流作家の手に成れりしものには尙是等の特質を具有すること尠く一瞥し

たるところのみにては殆ど平安朝のと區別すべからざるものありきと知るべし。こゝに最も多く當代の特質を發揮せるものを雜史とす。草子即ち隨筆もの之れに次ぐ。

作者には僧西行、鴨長明を始めとして葉室大納言時長、信濃前司行長、橘成季、源親行、同光行、辨内侍、阿佛尼、玄惠法師等最も名聲あり。著書には『方丈記』、『四季物語』、『發心集』、『撰集抄』、『沙石集』、『十訓抄』の如き、『保元物語』、『平治物語』、『源平盛衰記』、『平家物語』、『義經記』、『曾我物語』、『古今著聞集』の如き、さては『辨内侍日記』、『十六夜日記』等孰れも其の名後世までも聞こえたり。

予輩は此の期の散文を評するに當りては例の如く其の内容及び外形の性質、体裁の上より左の如く分類標示し其の作爲せられたる年代によりつゝ順次にものせんとす。即ち此の期の散文をば

物語

隨筆

雜史

日記及び紀行

の四種に分かつ。以上の外序跋、記録、消息、註疏等の文ありといへども是等は殆ど取り出で、評闡すべき程のものにあらず。故に是等は或は便宜に従ひて録する事あるべきも大方は省略すべし。例へば序跋の文の單に前代に見えたる諸歌集のを模倣したるに過ぎざる如き又は記録、註疏の殆ど文學趣味を欠けるが如きは寧ろ省略するの遺般の略史に適するを想ふに依る。

第貳節 物語

小説的物語の衰微

『秋夜長物語』

『鳴門中將物語』

歴史小説

『義經記』

『曾我物語』

平安朝にありて繁盛を極めたる小説的物語は其の期の末葉よりやうやく衰運に向ひしが此の時代に入りては只、わづかに一縷の命脈を詞壇の一隅に維持せるのみ。蓋し當代の初つ方は干戈に寧日なくて讀書の餘暇だにあるべくもあらねば新たに此の物語類の世に出づべき機會なかりし所以も明瞭なるへし。其の後世の中稍、治まるに及びても一般の人情樸實質素をよるこび文弱柔儒を厭ひ尙武の氣象のみ旺盛なりしかば浮華なる小説物語は世の嗜好を惹くこと能はず遂に此の種の物語をして益、衰微に赴かしめたるなり。是かのみならず當代の初つ方に於ける轉變無常の世態はさなからに其の現實の變遷を叙述せんも既に小説

的たる趣ありて讀者の興味を促すに足りしかばわざ／＼世の嗜好に反して小説的物語を作為すべき必要なかりしなり。故に此の間にありて僅に出でたる物語は前代のに比すれば一小話めくもの數種あるのみ。『鳴門中將物語』『秋夜長物語』『義經記』『曾我物語』等是れなり。是等の物語は孰れも其の作者詳かならず、作為せられたる年月はた不明なり。

さて『鳴門中將物語』は殊に其の結構單簡にして嚴密には殆ど小説の名を附すべきものにおらず。其の筋の大略はいづれの年の春とかや彌生の花盛りに花徳門院の御つぼにて二條前關白、大宮大納言(公相)、刑部卿、三位頭中將などまゐり給ひて御鞠侍りしに女ども許多まゐりて見物しけるを其の中に帝のいたく御心よせ給ふありて召さんとまけるに女煩はしくて一旦は其の姿を隠しけるが後つひに尋ね出だされてもとの住家に住まはせつゝ時々忍びて召されければ女のもとの男其の蔭によりて中將となるといふ小話なり。伏線照應はさて排き波瀾變化の妙あるにあらざ文章さへも前代のに比すれば覺に下れり。『秋夜長物語』は『鳴門中將物語』よりは多少優りて趣向も複雑なる點なきにあらぬと是れはた一小話たるを

免れず。後堀河院の御宇に西山の隱西上人とて道學兼備の人、元の名を桂海といひしが壯年の頃花園左大臣の御子梅若君といふ童の三井寺の坊に居給ひしを見そめて深き契りをつ結ばれけるが或日梅若君桂海を尋ねて叡山に赴く途次其の山の山伏の拐かすところとなりしより事起りて叡山と三井寺との戦鬪となり叡山の衆徒國城寺を焼き拂ふ此の時若君は石の牢に幽閉せられてありけるが天狗どもの戦鬪のさまを物語るを聞き給ひ悲み給ふに大蛇老翁と化して遂に若君を助け出だすされど若君はあそれの身より事起りしをあさましく覺えて勢多の橋より身を投げ給ひしが桂海は若君が詠みおくり給ひし歌によりて世にながらへ西山の岩藏に菴室を結び修行をつみ後に東山に雲居寺といふ御堂を創立すといふ筋を一篇の骨子とす。其の間日吉山王、新羅大明神を點出し此の亂をもて桂海を發心せしめ若干の化導をなさしめんがための結縁となす。全篇を通讀すれば他奇なしと雖も其の中おのづから神明佛陀の利徳無量なるを説きて諷諭教戒し以て衆生を濟度せんとするものゝ如し。篇中の人物には人間の通性をば認むるを得るも勿論個人の特性判然たるものなく剩へ事變の因果更に一貫せず頗る奇怪

にして不自然なり。只、文章の一點のみは流石に見るべきものなきにあらず國語漢語若くは佛語の調和既に見えたり。

その袖のうつり香も身にふるばかりより添ひて、うちかたぶきたれば輝妍たる秋の蟬の初元結ひ宛轉たる娥眉のまゆずみのにほひ、花にも妬まれ月にもそねまれぬべき百のかほばせ千々の聲繪に書くとも筆に及びかたく、語るに言葉なかるべし。涙と共に枕をかはしまの水の流れる、絶えず猶契るべきむつとともまだ盡きなくに、闇寒くして紫蘭の夢さめ、連理の花分かれて止めがたければ、篠の小笹の一ふしに明けぬと告ぐる鳥の音もうちめしく、おのがきぬぎぬ冷かになりて立ちわかれなどするに、明方の月の窓の西より隈なくもさし入りたれば、寐みだれ髪のはらくと、かゝりたるはづれより眉のにはひ、ほけやかに、ほのかなる顔の俤色ふかく見ゆるさま、別れて後の俤に又逢ふまでを待つほどの命あるべしともおぼえず。

其の措辭、句を對せんとする形迹見えて稍繁冗なる弊を免れずと雖も斯の如く漢語國語を併用せるは未だ曾てあらざるところ、物語文の上にはまさしく一生面を

開きたるものといふべし。

『義經記』と『曾我物語』とは前二者に比すれば其の結構著るく勝りたるのみならず其の作の性質さへも大に異なるものあり。吾曾に前二者に異なるのみならず前代の諸作とも異なるどころあり。從來の諸作は専ら篇中の人物を假設しひたすら想像を以て作の全部を構成したるものなりしが此の『義經記』と『曾我物語』とは全く然らず篇中の人物は勿論一篇の骨子を概ね歴史上の事實に採り之れに血肉を添へ服裝を加へ潤色して構成したるものなり。故に短簡に云へば彼等は世話を小説にして是等は歴史小説なるの差異あるなり。これまた當代の人情浮華を厭ひ實際を尙びしより小説の骨子も全く假設に成るに比すれば歴史上の事實に據るの興味多きを認めて此處に出でたりと覺ゆ。

『義經記』は就中此の歴史小説の祖なるべし『曾我物語』に比すれば文章幾何か古雅の風あり。源義朝都落に筆を起こして判官(義經)自害するまでの顛末を叙す。義朝の妾常盤の腹に三男あり季を牛若といふ九死の中に一生を助けられ鞍馬に入りて其の弟子となり、ま、や、な、わ、うと號す。十六の年吉次といふ金あき人に従ひ

て奥州に下り途次名を改めて自ら九郎判官義經と名乗る。其の後舎兄頼朝伊豆に兵を擧ぐるに及びて初めて黄瀬河の陣に見參し其の一方の大將軍を承りて上洛し平氏を討ち木曾義仲を破り大勝を奏して鎌倉に歸る。此の時判官の心には其の莫大の勳功を思へば少くとも己れは關西を支配するほどの任を得べしと思ひしが梶原景時の佞辯は早く頼朝を籠絡して兄弟の友義を破らしめしかば遂に見參だに協はずして腰越驛より京に歸るの止むべからざるに至らしむ。かくて判官は堀河の第におはしけるが頼朝の差むけたる土佐坊が夜討に兄弟の中愈破れて判官は京を遁れ住吉大物の浦などにさすらひ吉野に入り幾程もなく北國路をたどりて奥州に下り秀衡に據る。さらに秀衡歿後其の子泰衡の謀叛に依りて事かなはず判官遂に自殺し泰衡また頼朝の爲に亡ぼさる。これを本書の梗概とす。されば本書の材料は全然正史の事實に典據したるものなるを知るべし。此處に義經の一生を考ふるに其の閱歷全く悲劇の素をなすものあり否ひとり義經のみならず其の所從の士何れも皆悲慘の閱歷を有せざるはなし。而して是等悲慘なる閱歷は能く讀者の同情を促すに足る。作者が其の材を義經の一代記に採

りたるは從來の講作が漫然筆を執りて事を叙したるに比すれば大に見るべきものあるを覺ゆ。材に於いて既に然り。其の材を鹽梅せる布陳の方法また見るべきものなきにあらず。例へば梶原景時の辯佞利口なる佐藤忠信の勇猛義烈なる若くは貞操なる靜が愁傷忠勇なる秀衡か臨終等孰れも讀者を感動するに足るものありて存す。されども全躰より云へば未だ描いて細微に入らざる觀あるは論なし。すなはち由來讀者の同情を買ふべき素材もいまだ充分之れを喚起すべき力を缺く。按ずるにこれ個人の特性判明ならず破綻を起さすべき因縁顯然ならざるに由るべし。而して斯かる所以のもの作者の主意こゝにあらずして單に事を叙述するにあればなりけり。

次に『曾我物語』も事を叙するを主とする點については『義經記』と異なるどころなし。伊豆國の住人宇佐美宮藤次郎助經といふもの京に上りて小松内大臣重盛に奉公まける程叔父伊藤次郎助親のために世襲の莊園を押領せられたるを遺恨に思ひ密に其の郎等大見小藤太並に入幡三郎といふものに命じて助親を狙はしむ。一日二人の郎等助親等の狩せるを偵察し其の歸途を要し射て助親の子河津三郎

助通を殺す。助通に男子二人あり兄を一萬とて五歳弟を箱王とて三歳になりけるが父の死後母の相模國の住人曾我太郎助信に嫁したるについて其の許に養育せらる。二子長ずるに及び兄は曾我十郎助成弟は曾我五郎時致と名を改む不俱戴天の仇敵助經を撃たんとして千辛万苦の末源頼朝富士野の裾野に狩せるに立ち交り夜陰に乗じて遂に素懷を果し兄は戦死し弟は捕はれて處刑せらる。其の後助成在世の砌に契りを結びたる大磯の遊女虎といふもの悲歎に堪へずして尼となりて兄弟の菩提を吊ふ。これを此の物語に於ける趣向の大略とす。かゝれば是れ後世に所謂仇討小説の嚆矢なりといふべし。前に云ふ如く此の物語も一篇の結構事件の面白きを主とするからに人物の性情見るべからずといへども曾我兄弟の性質稍判然たるものあるが如し。兄十郎は温厚沈着物の哀を知る風雅の心あり弟五郎は剛強一徹時に奔馬峻坂を下る概あるを見る。例へば

湯坂峠にて十郎跡の方を顧み曾我の朝またき烟もいまだ暗れやらぬ佐川古宇津高札寺の山の方を見やりては別かれし大磯宿の事思ひ出でられければあれ見給へ時致あゝの烟の見ゆるこそ住みなれし所なれ唯今此の山越えなん後いつれの世に又見るべきと涙を流しければ五郎聞いて「殿は古里をも新里をも誅め給へ時致は親の敵より外は

心にかゝる事も候はず弓矢取るものは餘り物を案ずれば心細くなりて思ひ切られぬ習ひなり京鎌倉の旅人の見んも耻かし又下人の習ひなれば我等死なん後何人ぞか暗り出で扱ても兄弟は命や惜かりけん此の山にては泣き給ひし彼の峯にては歎き給ひしと云はれん事こそ耻かしけれと馬引を駈けて通る。十郎申しけるは「和殿助成も其の儀を知らぬにはあらす生あるもの古里を戀ふる事胡馬北風に嘶き越鳥南枝に其かくさいふ詞もあらすや」とて打過ぐる

十郎の此の性質は時に或は其行をして優柔不斷ならしむる事あり。而して五郎の行爲は飽くまで果斷なり。

十郎申しけるは「侍共音するものもなし能きあひだに一歩も遅れて今一度母をも見奉りて後猶も延ひつゞくものならば如何なる野山の奥へも引籠り閑に念佛申し自害をせんと云ひければ五郎聞いて「恐れ入つて候ものかな如何なればかやうに云ひかひなき事を御計ひ候や先づ御思召しても御覽候へ爰を遅れて何國までか延び候ふべきぞ云々

故に十郎は時としては又其の行ひに怯懦なるかと疑はるゝ事なきにあらず。されど其の逡巡躊躇するはひたすらに身命を惜むが爲めにあらず母を憶ひ弟を思ひさては汎く物の哀をおもふが故なり。

其の間も十郎思ひけるは扱ても安からぬものかな年來の親の敵此の君共の思ふ所日

本國の侍共の見聞くところもあれ、取つて引きよせ一刀刺すまいに自害せばやと思ひ
 けれども又打返し心を静め、またあばし、兄弟と云ひながら五郎は殊に契深し、兄弟敵を
 討つて兎も角も一所にならんこそ夜も寝も甲斐なく、敷中し契りしに所々に伏せん
 こそ口惜けれ、後世までも五郎に恨みられん事も餘儀なく如何に口をきくとも今二時
 三時の内ぞかしと様々に思ひつゝ、け盃を急ぐ。

此の故に十郎は事愈決し他事の又顧るものなきに至りては、猛然として、萬事は皆
 去たしめぬ、去すまじたり、いざや打つて入らん、の氣概見ゆ。五郎は剛強一徹のも
 のなりと雖も理のあるところ義の命ずる邊能く相譲りて決して圭角を持たること
 となし。蓋し十郎の温厚沈着は五郎の剛強一徹の性質と相依り相賛けて事を成
 就するを得しめたるものゝ如し。而して兄弟の性質かくの如く異なりと雖も彼
 等の動作をして一致結合せしむる綱索は別に炳然たるものありて一貫す。曰は
 く孝義。是れ素より此の物語ある以上はかくあるべき筈なり更に喋々するは贅
 言に屬すべし。只をしむ此の物語元來事を叙するを主とするを以て其の特性を
 して充分發動するを企圖せざりしを。殊に全篇の結構甚だ不完全にして副主人
 公ともいふべき助經の行動に飽かぬふし多きは遺憾なり。是れを『義經記』に比

較するに讀者の同情を惹くこと寧ろ彼れは是れに勝るところあるべし。神明佛
 陀の靈驗を説くは二者相同じ。文章は是れと彼れとは太く異なる趣あるに拘は
 らず、則ち彼れは稍古雅にして是れは卑俗なるに拘はらず、さまで軒輊あるを見ず。
 若しそれ此の物語に東國武士の言語を關東訛りに物またるは能く此の篇に適し
 たるものなり。

『義經記』は別に『判官物語』此の書寫本に在りてといふものありてそを増補潤色したるものなるべしといふ説あり如何にや。『曾我物語』には眞字本、異本、假名本の三種あり。通常世に流布せる假名本は眞字本を假字に譯して潤色敷衍したるもの、實に後世の作なること疑ふべくもあらず。

要するに當代の小説的物語は材料を歴史に採りたるものゝ多少見るべきものあり、外古物語の體裁たるは全く衰微の極に達したるものといふべし。而して小説の材料を歴史の事實に採るに至りしは斯界の境域を擴めたる者、一進歩とも謂ふべきならん。此の外また此の時代の始に専ら上流の間に行はれし繪巻物といふものあり、其の詞書は古物語の一變せし者なるべし。今傳はれる者に『小柴垣草子』

『地獄草子』の類あり。是等は後世の草、双子の起源をなすものならめども此の頃は繪巻を主として其の趣向は甚だ簡短に文章はた零碎なるものなれば、未だ文學書として見るべきものにあらず。

消息文は物語に見えたと然らざるとを問はず概しては次第に文學的趣味を減少せる風あり。されども猶當代に於ける感想文致の一大變革はこゝにも多少認むべきものなきにあらず。就中漢文の消息は平安朝に於いて既に邦語ながらの文體を混交して稍、不醇の文格となりしが當朝に入りては殊に日記記錄の文體が破格の漢文となりしが如く全く一種異様なる和漢混交の文體を成すに至れり。而して是等漢文の消息は率ね公事儀禮のをりに用ひられたること平安朝に於けるが如し。予輩はこゝに藤原攝政良經公(一八〇八—一八六六)のものせる『新十二月往來』より一章を抄録して其の異様なる文例を示さんとす。

兩稱、悅以給候勢。未見來候之は、令思食寄給之條、御志之至不可申盛候。委細之旨期見參之次候。謹言。

五月四日

右衛門少志

其の文體全く漢文ならず又國文ならず兩者を混用して破格極まる漢文の體を成すものなり。是れ漢學の攻究衰微して其の弊を襲用せる結果こゝに至れるものか。後世の候文はちもふに其の濫觴を是等の文體に歸すべし。當代の消息文を集録せるもの此の『新十二月往來』の外其の前に猶中山内府忠親公の著せる『貴嶺問答』作者未詳の『十二月往來』あり、其の後に僧玄惠(一一〇一)の著せる『庭訓往來』遊學往來『喫茶往來』及び僧虎關(一九三八—二〇〇六)の錄せる『異制庭訓往來』等あり。是等は孰れも當代に於ける和漢混交體消息文の模範として世を指導するところありたるや論なし。ことに『庭訓往來』は當時に太く珍重せられたるのみならず永く後世にまで行はれたり。

こゝにまた假名の消息文にも少からぬ變革進歩ありしことは一般の假名文の變遷ありしに徴しても知るべし。すなはち假名の消息文は其の用語文體前朝の比して著るく異なる點あるを見る。例へば『定家卿消息』一名『毎月鈔』に

毎月の御百首能々拜見せしめ候ゆ。凡此度の御歌まことに有難う見申候へば年來を
るかなる心に忝き仰のいなみかたさばかりなかへりみ候とて僅に先人申をき候し庭

剛のかたはしを申候き。定て後世の笑はれ草もまげりぞ候らむなれども(中略)左道の事どもあるし付候。相擗て不可及外見候。大徳愚者が年來の修理の道たゞこの條々の外はまたく他の用意なく候。随分心底を殖さす書つけ侍り必ずこの道の眼目と覺召て御覽せられ候べく候。あながしこく

とあるに就いて檢するも漢語を挿み漢文の格法を混用し送假名を省略せるのみならず從來の假名文には侍りといひしを候といふなど全く珍らかなる文牒にて今日の候、文の素は亦其の一分をこゝに成せりといふも詛言にあらじ。按するに今日の候、文牒の消息文は當時の和漢混交牒のと此の假名文牒のと相依り相和して一體と成れりしものなるべし。阿佛尼のものせる『乳母の文』一名『庭のをし』は之れと稍々其の文牒を異にして優美に古風を帯びたるものあり。

なにはの、このよしあしなも、おぼしめしわき候はんまで、うきなもまのびすぐして御身をさらぬまもりにごこそ思ひまわらせ候つるに、をのが世々にも成りぬべく候事の、さやは契しと、おきふしなげかれ候に御ふみ見候へば、いさめしものさ、見えさふらふこそ、あはれにおほえ候へ(中略)。わるき心は進み近づきたがらふものにて候を、我心ながら、常にさんげして、心をなしへ行候へば、まだいに立て直さるゝものにて候。我心のまゝに振舞候はんには、いたづらごにて候。かゝることばりとはまりて、人毎に迷

ふことにて候。よくく御心え候て御れ、うけん下され候。あながしこ

きの内侍ごのへ

雲かほるかにへだつる

まわらせ候

かたより

されど漢語及び俗語を交へたる若しくは侍りを候となせりしなどまた時勢の傾向につれて他の假名文と共に同様の變遷ありしを知る。而も之れを『定家卿消息』に比較すれば一層今日の女用文に接遇せるものなり。故に予輩は平安朝に見えたる假名文牒の消息文は此の時代より早くも二途の發達を爲し一は和漢混交牒と共に後世の男子用文牒の素と成り一は専ら今日の女用文牒の方向を採りたりと云はんどす。『乳母の文』に就いては爾後に日記及び紀行の文を論ずる條下に於て阿佛尼の性行を記述するに當りて詳説することあるべし。

第三節 隨筆

鴨長明 其の閱歷性行及び著作 『方丈記』 『發心集』

と『撰集抄』と 佛教思想並びに厭世的觀念 『沙石集』

平安朝に『枕草子』ありて以來隨筆と呼べるべきもの久しく跡を絶ちたりき。此の

期に入りても純粹に隨筆といはるべきもの絶えてあることなし。『方丈記』『無名抄』の如きは只多少の類似を以て此の條下に攝すべきものなるべし。『發心集』と『撰集抄』とは後の『沙石集』と共に隨筆の下に攝せんは稍附會の嫌ありと雖もさまで異目を立つべきものにもあらねば評論の便宜を謀りて同じくこゝに掲ぐべし。かの『古今著聞集』『十訓抄』『宇治拾遺物語』等の書も亦隨筆めける點なきにあらねども是等はむしろ歴史の参考になりぬべきものあれば其の條に載せんとす。さて此の隨筆の條下に攝すべき著作を以上の如く定むればこゝに其の作者として記載すべきは只、鴨長明、西行法師並びに無住法師の三人あるのみ。

鴨長明は俗稱を菊太夫といひ山城國愛宕郡加茂の社の祠官の子なり。或は近衛天皇の久壽元年(一一八四)に生まれて順徳天皇の建保四年六月八日に六十三歳の齡にて逝りきといひ或は後白河天皇の保元の頃より順徳天皇の御世に至るまでの人なりきと云へれど正確なる年月は毫も知るに由なし。されども長明の在世は後白河、二條、六條、高倉、安徳、後鳥羽、土御門、順徳など申し奉る御世を経て源平の盛衰を目撃せる人なるは明瞭なる事實なり。幼時は父方の祖母の家に養はれて宮

中に奉仕し二條天皇の應保元年從五位下に叙せられしが其の後源平の亂烈しくて又仕ふるを得ざりしかば加茂の社に仕へて氏人となれり。然るに長明は父祖の業を紹ぎて社司たらん志あり安元治承の頃素願を果さんとして公に請ひしも其の事叶はざりしかば爾來居常鬱々として樂まざ終日門を杜ぢ客を謝して味氣なき星霜を送りぬ。長明嘗て和歌の道を源俊賴卿及び俊惠法師に學びて得るところあり兼ねて絲竹管絃の秘曲をさへ極めしかば後鳥羽上皇常に其の才學を愛したり。故に土御門天皇の御世建仁元年上皇和歌所を宮中に設けらるゝに及びて長明をも其の寄人の官に擧げ給ひき。されども長明の意は元來此處にあらねば久しく留まるを欲せず幾程もなく遂に辭して名を遺胤と改め落髮して大原山に隠れき。上皇痛く之れを惜しみ給ひて今一度擧げて寄人の職に補せんと院宣ありしも更に應せず是れより世上のいとなみを厭うて深く唯識止觀の旨を喜び老莊の道を究め只管閑寂に處りて性を養ひ心に任せて諸の勝地を探りぬ。建永承元の頃更に幽居を日野の奥なる外山に移し其處に環堵の室を結びぬ。其の著『方丈記』に當時の住居の様を記すること詳かなり。

其の家の有様世の常ならず廣きは僅に方丈高きは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に地を占めて作りす土居を組み打ちおほひを葺きて椀目毎にかけがれを掛けたり。若し心に協はぬことあらば易く外に移さんが爲なり。其の改めつくる時幾何の煩ひがある。積むところ僅に二輛なり。車の力を報ゆる外は更に用途いらす。

平素藏するところのもの佛像の外唯歌集管絃『往生要集』に琴琵琶各一張あるのみ。建暦元年源將軍實朝の招きに應じて鎌倉に下り將軍のために歌道を談ずること數度。再び外山の里に歸るに及びては愈世の状態を憤慨して復出せず専ら泉石の間に餘生を送りたりき。論本講義録なる和文評
釋方丈記を参照すべし

其の著作に『方丈記』『四季物語』『發心集』『無名抄』等最も其の名後世に著はる。『登玉集』『文字鏤』また長明の撰録するところなり。

『方丈記』は卷末に自記せる如く長明が鎌倉より京に歸りたる翌年建暦二年三月外山の草庵において誌せるものなり。まづ其の發端に流水泡沫の比喻をもて諸行無常の理を説き進みて安元の大火治承の辻風、養和の饑饉、元暦の地震等年來の事變を掲げ終に著者が人生に對する感想を叙べたり。之れを閱するに著者が觀念の之れに依りて知了せらるゝのみならず併せて當代に於ける思想界の或一部を

代表するものあるを覺ゆ。彼れすなはち人生の無常なることさながら泡沫に似たる所以を説き更に進みて曰へらく

すべて世のありにくきこと我が身と住家とのはかなくあだなるさま、かくの如し。いはんや、所により身の程に従ひて、心をなやますこと、擧げてかどふべからず。もし、おのづから、身かなはずして權門のかたはらに居るものはふかくよろこぶ事はあれども、大にたのまぶにあたはず、歎なる時も聲をあげて泣くことなし、進退やすからず、立居につけておそれをのゝくさま、たとへば雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし貧くして富みたる家のごなりに居るものは朝夕すばき姿を耻ぢてへつらひつゝ、出で入る、妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々にうごきて時として安からず。もし、せばき地に居れば近く炎上する時其の害をのがるゝことなし。もし、邊地にあれば往反わづらひおほく盜賊の難はなれがたし。いきほひあるものは貪欲ふかく、ひとり身なるものは、人にかるしめらる。寶あればおそれ多く、まづしければなげき切なり。人をたのめば、身、他のやつこ

となり、人をはごくめば、心、恩愛につかはる。世に従へば身くるし、又、またがはねば狂へるに似たり。いづれの處を志め、いかなるわざをしてか、まばしり此の身を宿し、たまゆらも心を慰むべき」

と。是に於いて彼れは世を遁れ、獨り山林に交はるをもて處世の法を得たるものとなしぬ。曰はく、もし念佛ものうく讀經まめならざる時は、みづからやすみ、みづからあこたるに妨ぐる人もなく、また耻づべき友もなし。殊更に無言をせされども獨り居れば口業をさめつべし、かならず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてかやぶらん。山中の景色はをりにつけて盡くることなし。いはんや、ふかく思ひ深く知れらん人のためには是れにしも限るべからず。「二期のたのしびはうたゝぬの枕の上にきはまり、生涯の望はをりくゝの美景に残れり」と。而して彼が「五十の春を迎へて家を出で世を背けり」しも其の理由全くこゝにあり。彼れ云へらく「大方世を遁れ身を捨てしより恨もなく恐もなし」と。之れを要するに彼れは人生を以て無常なるものとなし厭惡すべきものとなし而して此の濁惡無常の世に處して心身を勞するは無益の業なり須らく人烟稀なる山林に隱遁忌

避して自然の行動を樂むに若かずとなすものなり。換言すれば現世は只、逆旅のみ宜しく無爲恬淡にして終るべし吾人の希望は一に佛果を得るにあり吾人の満足は獨り彼岸に達する時にありとなすものなり。故に彼れの觀念は現世に對しては一の希望なく満足なしとするもの全く厭世的なり。彼れが此の觀念の由來は蓋し佛教と道教との二者に歸す。人生を以て畢竟空なるものと觀じ現身を以て諸種の罪業の根源となす、是れ佛者の常に唱道するところ、藜藿、布衾以て世に處すべしとする、はた然り。されば彼れが「草の庵を愛するも科とす、閑寂に着するも障りなるべし、いかい用なき樂をのべて空しくわたら時を過ぐさん」と叙したるは佛教に所謂一切盡捨の旨意にしてまた彼れが遁世の極意を表白せるものと謂ふべし。

それ長明の言ふところ期するところ此の如し而して是れを彼れの實行に徴するに略、相合ふものありしが如し。雲烟交はる外山のほとり方丈の草庵に起臥して悠然として閑居の妙味を會せしが如きは眞に天地の間名利の外に彷彿として名利よりも一層高尚なるあるものを認識したるに似たり。すなはち一道の光明は

常に隙黽として彼れの心眼に映じ以て彼れをして名利の念を忘却しむるところありしに似たり。されど彼れが此の怡樂の靈域に逍遙するを得たるは單に山林の閑居に於ける時のみ都に出で、乞食となるをだに耻づといへり。彼れみづからは草の庵を愛するも科とす、閑寂に着するも障りなるべしといふと雖も其の實行は未だ此の境に到らず尙山林の獨居を以て諸縁を閑却する其好無二の適地と爲せりしものなり。彼れが一切の行爲の常に消極的に出でたるも此の故にこそ。山林の獨居を以て諸縁を閑却遺忘する無二の適地となすは全く名利を超越すること能はざるもの、物我の差別に彷徨するもの、いまだ所謂悟道徹底せざるものと謂ふべきなり。是に於いてか予輩は思ふ長明は物我無差別の靈域を認めて彼處に到るべきを知らなからいまだ到ること能はざりしものなるを。蓋し長明は人生の空なる所以を佛教の旨意と老莊の所説とに據り、かねておのれが閑歴に驗して知りぬ。然りおのが閑歴の不如意なるに驗して知りぬ。故を以て彼れの説くところは人生の源始に溯りて其の成立を拒非厭忘するよりも當世の濁惡澆季を離ずるかた勝れり。『方丈記』の一篇其の記事叙説多端にして或は人生の空なるを

説き或は當世の澆季を歎じ、或は處世の困難を叙し或は閑居の妙味を示す如しと雖も讀み來れば予輩は終に筆者が人世の名利を棄てんとしていまだ棄てやらず一進一退頗る苦慮煩悶する状あるを見ずばあらざるなり。

故に長明が『方丈記』の文は熱涙の筆端に迸出する概あり。彼の章句を修飾するところ行文稍繁冗に失する嫌はあるも尙何處となく其の感慨を露出する趣なくばあらず。其の章句の大方佛書若しくは漢唐の文に典據すること多きは猶其の所説の彼等に據るところ多きが如し。中には往々『白氏文集』『文選』さては『維摩經』等の文字を其のまま轉載するものもあるを見る。

『發心集』は其の題名の既に表明する如く諸宗の僧俗が發心せる因縁由來を録して佛縁を希ふ媒助とするものなり。すなはち賢を見ては及びかたくとも希ふ縁とし愚なるを見ては自ら改むる媒とせんといへるが如し。かるが故に其の書中の事實は『方丈記』とは全く異なり僧俗の發心せる因縁由來を見聞せるまゝに記載せる者なりと雖も全篇に涉れる感想は毫も彼の記と異なるなく一に現世をはかむむ佛教的觀念に外ならず。多武峰増賀上人遁世往生事と題する條に附記して

「此の人のふるまひ世の末には物くるひとも云ひつべけれども境界離れんため
の思ひばかりなれば其につけても有かたきためしに云置けり。人に交る
ならひ高に随ひ下れるを哀むに付ても身は他人の物となり心は恩愛のため
につかはる。是此世の苦のみに非ず出離の大なるさわりなり。境界を離れ
んより外には如何にして加亂れやすき心を去づめむ」

といへる、其の他「資財を恐厭すべし」といひ「百千年あらんために材木をえらひ檜皮
葺瓦を玉かきみどみがき立てんも何のせんかある」といへるなど孰れも『方丈記』を
通じて彼れが列叙せし感想にあらざや。其の文章の雄健貞率なるは自ら『方丈記』
に優るべし。

此の『發心集』と其の類を同じうせるを西行法師の『撰集抄』とす。其の序文に此の書を
撰集せる所以を陳じて曰はく

生死の長き眠いまた醒やらで夢にのみほたされつゝ水の面の月を實とおもひ鏡の内
の影をげにさふかく思入てあけくれは只妄念の心のみうちつゞきて生死の船をよそ
へずして居所の羊の歩は我身の外にもてはなれ鳥部船岡のけふりをよそに見て過に
し方四十餘年の霜を頂き行末まらず今日しもやあるらむまければ同夢のうちの遊に

も新語の跋跡を撰求けるもの業を撰集め撰集抄と名付て座の右に置て一筋に知識に
頼まんとなり巻は九品の淨土に思宛十に一をもらし事は八十隨好思ひよそへて百に
廿を残せり抑凡夫の習明眼しぬて眞月を見ず心老て断妄の利劍おこたらざる物なり
されば偏に冥助を仰き奉らんか爲に巻毎に神明の御事をまゐし職せ奉り侍り

ど。かゝれば此の書の撰集せられたる主意全く長明の『發心集』と異なるなきを見
るべし。次ぎに掲ぐる文は花村院永玄僧正の事と題する條なり咀嚼して其の感
想文致の如何を知了せよ。

凡人の習世を背くまでも骨をばうづむとも名をば埋むまじと思ふめる。殊
に(此の僧正の)よしなき色に耽りて寺を離るよしのいつはりをのべられけん
心中思ひやられてわくかたなく哀に侍り。止觀の文かどよ實を隠し狂を顯
せと侍るは是ならんと思えて侍る。まかればもろこしにも此の國にもげに
げにしく世を通るゝ人は皆箇様侍るとかや。げに人には拙きものと思ひ
くだされて心一に思ひすまして侍らんはいみじくすみ渡りてぞ侍るべき。
さて又あちこちさそらへゆかんに心にかなはぬどころあらば思ひはなるゝ
ぞかしなんと、すゝろに床敷侍り。世をすつと、ならばかくこそあらまほしく

て身のちからもいたくつかれ侍らざりし頃廣く國々を經まはりてやん事なき寺々面白き所々徘徊し侍りしが指當りて身の愛も忘れ侍しかばかくて一期を過したらんも罪深からじと覺侍き。况や發心堅固にして心もかしこく、さざりあらん人のなじかは心もすまで侍べき。越の白山雪積りて老曾の森のはゝきい風になびきやすく佐野の野原のほやのすゝきをよめきて同心の末葉の露は風に亂てまどろなる有様木曾のかけ橋佐野の舟橋など見侍りしに心もといまるべき程なり逢坂の關のせき守どめかねし秋こし山のくすもみぢ見過しかたく濱千鳥の跡ふみつくるなるみがた富士の山邊は時あらぬかのこまたらの雪のこり浮島が原清見が關大磯小磯の浦々は過がたく侍るぞや

長明と西行とは殆ど同時代に生存せし一人は山林に著し一人は江湖に放浪せしものなりと雖も人世の無常を見て俗塵に沈淪するを欲せざる心根共に同じかりしかば其の著作の偶々相似たる奇なるが如くにして而も當然なり。此の二人は按するに當代の人々が懷抱せる感想を最も能く發表せるものとす。其の後無住

法師の『沙石集』といふもの亦世に出でたりしが其の體裁はた前の二書に同じ。作者無住法師は梶原景時の姪なりといへれども其の實名及び閱歷等大方詳ならず。『沙石集』は弘安二年夏稿を起こして同六年中秋に至りて完成せるものなり。其の序にいふところ次の如し。

夫龜背軟脚の第一義に歸し治生産業をかきながら實相にそむかず然レば狂言綺語のあだなる戯を繰りして佛乘の妙なる道に入れ世間淺近の賤き事を譬して勝義の深き理を知しめんと思ふ。是故に老の眼をままし徒なる手すさみに見し事開し事思出るに隨て難波江のよしあしをもみらばす藻鹽草手にまかせてかきあつめ侍り。かゝる老法師は無常の念々におかす事を覺り冥途の歩々にちかづく事を驚て黄泉の遠き路の根をつみみ苦海の深き流れの船をよそふべきに徒なる與言をあつめ虚き世事を注す。時にあたつては光陰をなします後におよびては賢哲をばおす山なきに似たれども愚なる人の佛法の大なる益をもささらず和光の深き心をもまらず賢愚のしなこなるをもわきまへず因果の理さだまれるをも信ぜぬために或は經論の明なる文を引き或は先賢の殘せる誠をのす。夫道に入る方便一つにあらず悟をひらく因縁をこれ多し。其大なる意知れば諸教をここならず修すれば萬行の旨をみな同き者をや。是故に雜談の次に教門をひき戲論の中に解行を示す。此を見人拙き語をあざむかずして法をのささりうかれたる事をたいさずして因果をわきまへ生死の郷をいづる媒とし涅槃の

都にいたるまゝるべきせよとなり。是則愚者の志耳。彼金を求者は沙をみつめてこれをとり玉を脱ぶ類は石をひろひて是を鑿く。仍て沙石集と名く、卷は十にみち事は百にあまれり。于時弘安第二之曆三伏之夏之天集之。林下貧士無佳。

此の書編纂の主意かくの如くなれば其の體裁大方前二書に類似せるは勿論なりと雖も予輩は此の集を前二書に比較すれば其の文章といひ其の内容といひ共に拙からぬ軒輊あるを見る。すなはち其の文章は前二書の流暢真率にして妙味の掬すべきものあるに似ず無味繁冗に其の内容は多少奇怪不可思議の事實を含めり。例へば「藥師利益事」とて説くを見れば

常陸國中郡と云所に草堂有藥師如來を安置す。其の堂ちかき家に十二三ばかりなる小童有けり、わろき病をして息絶にけり近き野へすてつ。一兩日鳥獸もくはず、此の藥師童子を負て家へ具して御坐すと思てよみかへりけり。藥師をば地頭家鎌倉へ迎奉て堂造りなどしてあがめ奉り彼の童子は既に法師に成て承仕して侍となん。當時の事なり末代なればとて感應のむなしき事は不可有。文永の頃にや一説に彌陀と云り。尾張の國熱田社頭に若き下手男今年十一月十五日俄に兩目共に盲てけり。心うく覺ければ神宮寺に

參籠して藥師如來に祈念す。次の年三月十五日の夜夢に一人の僧來て汝おきて目あげよと被仰ければ目は盲て候と申せばたいみあげよと仰らるゝと思て見あげんとする程にやがて開てけり。盲目に成て主人退すてたりけるを目あきて後又つかはんとしけるを僻事なりければ社司きゝてゆるしてけり。まのあたり見たる人の説なり。文永年中の事。

の如き單に佛の奇怪不思議なる功力を叙べて衆生を歸依せしめんするもの前二書の主として僧俗の發心せる由來を録したるとは差異あり。彼等に記載せるところは一面道理を以て律すべきものありしに是れは道理を絶して怪力を語る傾向見ゆ。彼等には猶衆生を開發して佛に導かんとし是れは凡庸を驅りて彼の效に盲從せしめんとす。學者須らく當時代に起こりし諸宗派の順序次第に比照して是等同種類の書におのづからかゝる差異の生ぜし所以を察すべき也。

第四節 雜史

雜史の變遷

擬古體雜史

軍記物語の流行

『保元』『平治』『平家』等の物語並びに『源平盛衰記』

平安朝に於いて雜史と名づくるものに既に『大鏡』『榮花物語』等の數種ありて孰れも小説的物辭の體裁に倣ひ史的事實に多少の粉飾を施して讀者の嗜好に投せしことありしは學者の夙に知悉するところなるべし。此の期に至りては一層當時の人心浮華を厭ひしかば架空の小説衰微せしに反して此の種の雜史世に出でたりき。殊に源平二氏の合戦以後は人々皆文弱を排し只管勇武を事とせしかば事實も勇ましく文勢も強健なる軍記物語世上に持囃さるゝこととなりき。雜史の目的は由來讀者の興味を促がすを主とせしものなれば真正の史的事實には稍遠かり中には黑白を轉倒せるさへ尠からぬは勿論なるが猶當時の嗜好を得るに重きを措きしかば是れによりて當代の感想は充分察知すべきこと論なし。就中荒唐無稽の譬喻怪談さへ時にとりて當代を映寫せること云ふまでもなからん。况や事件を叙説せるかたはらには佛教若しくは儒學の準細をもて評定批判するもの往々散見するをや。予輩は此の故に是等雜史を以て當期文學の最要なるものと信す。而して是等軍記物語或者は之を琵琶に合はして聽衆の前に語りきといふに至りては當時如何ばかり世人の嗜好に投せしかを推知すべきなり。

こゝに軍記物語と名づくるは『保元物語』『平治物語』『平家物語』『源平盛衰記』等をいふなり。是等は孰れも多少の事實に根據して潤色演義せしものなれば或程度までは史として見るを得べきこと云ふを要せず、就中武具兵器を寫せる如きは以て當時の風を窺ふべき須要なる好資料なりとも謂ひつべきなり。『古今著聞集』と『十訓抄』とは其の體裁より云へば隨筆めけるものなれど是等はた當代の人情風俗等を知るべきもの、歴史の資料とならんこと勿論なるべし。

是等の文章は前朝の雜史體のに比すれば進歩の跡頗る著明なり。語勢遒勁にして變化自在なるに加へて章句簡潔、行文快暢、巧に和漢雅俗の言語さては梵語をまて調和したる前古其の比を見ず。かくて文詞豊富なるからに或は莊重急激或は細緻哀切、漢文の語勢をとり國語の脈を追ひ波瀾頓挫意にまかせ讀者の間おのづから聲をきゝ色を見る趣あり。若しそれ軍記文に一種の聲調具はりて普通の散文と稍異なるどころあるが如きは是等獨特の風格として標致すべものか。之れを要するに鎌倉時代に於ける文章の精粹は蓋し是等の上に来まるとやいはまし。當代の軍記物語には上に挙げたる如く四種ありしものから『保元』『平治』の兩物語

は自餘の物語の模範となりける趣あり。故に予輩もこゝに是等軍記物語を論評するに當たりては其の模範たる『保元』『平治』の兩物語に就きて稍、精細なる研究を爲さんと欲す。『保元』『平治』共に其の作者詳かならず或はいふ葉室大納言時長の作なりと。但し『保元物語』には二説あり、醍醐報恩院所藏の舊記には葉室時長の作といひ、大外記中原師香が手書して此物語奉れる狀には故師梁が鈔せしものなりといへる、是れ也。今日孰れを是と定めんに由なけれども舊説は『平治物語』と共に此の『物語』を葉室時長の作とするを以て其の眞に近きものとせるが如し。時長、姓は藤原氏、中納言顯時の孫にして修理大夫時光の子なり。其の閱歴詳かならずと雖、伯父出羽守盛方の母は刑部卿平忠盛の女にして大納言時忠の室と建春門院の女房帥とは彼れが伯母なりきといへれば保元平治の事蹟は幼時より委しく彼れの耳に馴れて是等の物語を著作する遠因となりしなるべし。兩物語共に異本數種ありて章段の順序、字句の次第等同じからず。是れ後世普く流布する際誤寫謄傳せりしものか、其の體裁の異なるによりて畢竟一人の手にならぬものとせる説あれど探らず。其の記事大方現實の事態を叙せしものから著作の主意一面娛樂に供せんとするにありしが故に文章に多少の修飾添はりて幾分か小説めきたるところあるや論なし。

『保元物語』に載せし事實は保元年間に於ける兵亂の顛末にして『平治物語』に記せし事件は平治年間に起こりし騷擾の首尾なり。『保元物語』が鳥羽法皇の薨去に筆をつけて保元の亂の顛末を叙し、『平治物語』が信西と信賴との不和に稿を起こして平治の騷擾の首尾を寫すところ、事件相連続し筆また相似たるが故に二書題名を異にして而も壹部正續二卷なるかの觀あり。さて『保元物語』二篇の主人公とも云ふべきは藤原頼長と源爲義とにして、『平治物語』には藤原信賴と源義朝と篇中の主人公たり。『保元』に鎮西八郎爲朝を精叙せしと同じく、『平治』には源頼朝の事に力を盡されたるが如し。其の外『保元』に於いて頼長に對するに爲朝の謀計を以てせしは『平治』にありて信賴にむかへて義平の策略を以てせしにも似たり。篇中に於ける重要な人物に勇怯剛愎善惡正邪等の性情の幾分か各自に顯はれたる、二書共に異同あるなく孰れも事件を叙するを主とするに拘はらず多少活動する趣見えたり。只見る一個の勇士馬を敵陣間近く押寄せて

かく申すは桓武天皇十代の御末、刑部卿忠盛が孫、安藝守清盛が次男、安藝判官基盛生年十七歳とぞ名乗りたる。大將さおほしき者、褐の直垂に藍白地を黄に返したる鎧着て、黒羽の矢貫ひ、塗籠腰の弓を持ち、黄河原毛なる馬に、具鞍匿きて乗りたるけるが進み出で、身不肯に候へども、形の如く系圖なきにしも候はず。清和天皇九代の御末、六孫王七代の末孫、攝津守頼光、舍弟大和守頼信の四代の後胤、中務丞頼治が孫、下野權守親弘が子に、宇野七郎源親治とて大和國奥郡に住して、いまだ武勇の名を落さず

と應へたる、さながら血統の貴賤を以て榮辱とせし當代勇士の状貌を窺ふべし。

『保元物語』に爲義降参の事を叙したるは殊に作者意を注ぎたりと覺しくて哀絶の光景まのあたりに髣髴たり。

義法房爲義受戒子共に向ひて宣ひけるは我が身が合期きたらばこそ各引具して山林にも立隠れめ。我れは只、義朝をたのみて都へ出でんと思ふなり。

さても今度の勳功に申し替へても命ばかりは助けこそせんずらめ、但し恣に院方の大將軍承りたれば勅命重くして助かりがたからんが、それ又力なき事なり。齡既に七旬に及び惜しむべき身にあらざ。万一甲斐なき命助かりたらば如何にもして汝等をも助くべし、而々は先づ如何ならん木の陰、岩の間に

も隠れ居て事鎮らん程を待つべしと宣へば爲朝聞きもあへず、此の義然るべからず候、縦令下野守殿こそ親子の間なれば助け申さんと志給ふとも天氣よも御免候はじ。其の故は新院は正しく主上の御兄にて渡らせ給はずや、左府亦關白殿の御弟ぞかし、豈に親とて罪科なからんや、義朝いかに申さるゝとも立ちかたくこそ覺え侍れ。御所勞なほりあわしまさば只、何ともして關東に赴き今度の合戦に上り合はぬ三浦介義明、畠山莊司重能、小山田別當有重等を相語らひて東八箇國を管領して暫しもあはしますべし。若し京都より討手下らば爲朝一方承りて思ふまゝに合戦して叶はずば其時打死すべし、などか暫く支へざらんと申しければ、それも東國へ下りつきての事ぞかし、落人となりぬれば何事も思ふに叶はぬものなれば降参せんと宣ひて既に山より出で給へば子供泣くく供しつゝ、西坂本下松サカノマツを下りしかば篠目漸く明け行きて鳥の聲々告げわたり、峯の横雲晴れば入道疾々何方へも落行くべしと宣ひて都の方へ赴き給ふを暫く御待ち候へ、申すべき事候ふと聲々に申せば、何事にやとて立歸り給へば前後左右に立圍みて泣くより外の事ぞなき。誠に

只今をかざりにて又逢ふべき事ならねば餘波を惜しむも理なり。入道今度老の頭に兜を戴きて合戦を致す事全く我身の榮花を期するにあらず若し打勝ちて運を開かば汝等を世にあらせんと思ふためなり。今義朝を頼みて出づるも我若し安穩ならば其の蔭にて各をも助けばやと思ふ故なり。汝等を捨て、我れ一人助からんとや思ふらん。齡既に致仕に餘れば身後榮何をか期せん、如何ならん處にも深く隠れて待つべし。疾々として下られけるが、かくて心強くは宣ひしかども、さすが餘波や惜しかりけん、又立歸りて、頼賢よ頼仲よいふべき事あり、歸れと宣へば各呼ばれて立ちかへる。誠には異なる事なけれどもあかねわかれの悲しさに又呼び下し給ひける恩愛の程こそ哀れなれ。如此互に別を慕へどもさてあるべきにあらずれば面々は散々にこそ別かれ行く。落つる涙に道昏れて行先更に冥々なり。悲しきかな人界に生を受けながら鳥にあらねども四鳥のわかれを致し、あはれなるかな廣劫の契り空しくして魚にはなけれども釣魚のうらみを含む。涙欄干として魂飛揚すと見えて哀れなりし有様なり。

筆端人情の蒸徹に觸れて讀むもの爲に泣かんとする。同「物語」の「新院御出家の事」左府義朝並大和國忠實御歎の事爲義最期の事、義朝幼少の弟悉く誅せらるゝ事爲の北方入水の事さては「平治物語」に義朝敗北の事、義朝野間下向並忠致心替の事、頼朝生捕らる附常盤落つる事と題する條など皆又一様に細叙したる筆法轉、讀者の同情を買ふに足る。和漢の先蹤、古聖人の言行を引用して書中の人物事件を評論するところはた能く當を得るもの多きを見る。「保元物語」に其の兵亂の源を論じて

脱履を既に申すうへは古き履の足に懸りて捨てまほしきを捨つる如くに思しめすべきに結句新帝に譲り給ひて後、また重祚の御望あり、それ叶はれば院中にて御政務ある事都て道理にも背き王者の法にも違へり。かやうに朝儀廢るれば斯かる亂も出で來るなり。都て今度の合戦は前代未聞と申すにや主上皇御連枝なり、關白左府も御兄弟、武士の矢將爲義朝父子なり。此の兵亂の源も只故院后の御勅に依りて不義の御受禪共ありし故なり。

とらひ、ん

史記には此朝朝する時は其の里必ず亡ぶといへり。此朝の時を作るは處の怪異にて其の那亡ぶる如く婦人政をいふ事あれば國亂るさいへり。然るを鳥羽院美福門院

の御計ひに任せて御座りましまさぬ新院を押し下だし通らせて近衛院を御位に即け奉り嫡孫を開きて第四宮當今御受禪ありし故に此の亂出來せり。嫡々を開きおはしますは故院の御殿りにや。然れども天津日嗣は掛けまくも忝く天照太神より始めて今に絶えざる御事なれば昔より此の御望ありし君一人も御本望を送げられたるこそなし。されども御計ひ違ふ故にや是れより世亂れそめて公家忽に衰へ朝儀愈々廢れたり。洛中の兵亂は是れを始と申すなり

といひぬ。論意明晰一篇の史論として見んも其の價值少からずと信ず。こゝに掲げたる『保元物語』の一節なりと雖も『平治物語』に於ける亦然り。若しそれ人意をもて測度しがたきに逢ひて急ち不可思議なる神佛の功力を説き現世の盛衰を見て過去の業報に歸するが如き宗教的信念の全部に一貫したるは前に當代の他の作者について説明したるに同じと知るべきなり。

文章は二書共に質樸にして稍古雅の風具はること前に掲げたるにても既に明かなるべし。然れども此の二書の評論を終了するに當つて尙特に記載すべき事あり。後世に所謂道行と唱ふる一節の是等の物語に早く見えたる事是れなり。『保元物語』に曰はく

子供は小原、靜原、芹生の里、鞍馬の奥、貴船の方さまへ思ひくりに落ち行けば深山かくれの秋の空露も時雨も争ひて我袖の涙も更に眞柴さる山路の奥を辿りつゝ、人里遠く分け入れば峯の巴嶽一度叫ひ、行人の装を潤せば谷の牡鹿の妻戀ひに旅客の夢も覺めぬべし

と。『平治物語』に見えたるは作者の筆更に熟せたるにや『保元』に比すれば遙に巧妙を加へたり。

かくて近江をも過ぎ行かば如何に鳴海の潮干潟、二村山、宮路山、たかし山、瀧名の橋を打渡り、小夜の中山、宇津の山をも見て行かば、都にて名にのみ聞きしものを、それに心を慰めて、富士の高嶺を打眺め、足利山をも越えぬれば、いづくを限りとも知らぬ武蔵野や、ほりがれの井をも尋ね見て行かば下野國府に着きて、我が住むべかんなる室の八島まで見遣り給へば、烟り心ほそく上りて、折りから感涙止め難く思はれしかば、泣々かくぞ聞こえける

我がためにありけるものを下野や室の八島に絶えぬおもひは
爰をば夢にだも見んさは思はざりしかども今は住家と跡を占め、習はぬ草の應、響へん方も更になし

後世の軍記又は戯曲等の誓に「海道くだり若しは道行きぶりなど」と題して句拍子ある文の往々散見せるは全く是等の文體を踏襲模倣したるものなりと覺ゆ。學

者いかに此の兩物語の結構と文辭とが其の影響を後來に及ぼし、かを見るべし。』
 『平家物語』と『源平盛衰記』とは共に是等『保元』『平治』の體裁を學びつゝ、文辭は一層
 優美艶麗に、結構は一段高大幽遠の域に進めるものなり。故に『平家』『盛衰記』の載
 するところは彼の二書と其の性質を同じうせるや勿論なり。此の二書また其の
 作者詳かならず、世に出でたる前後につきても古來未だ正確なる定説あるなし。

『平家』は『公卿補任』なる葉室系圖には勘修寺良門十三代の孫葉室時長『平家物語』作
 者の隨一なりといひ、『臥雲日伴錄』には菅爲長の作と見え或は吉田資經、源光行、願
 教法師といへるなど異説さまざまなりといへども今は吉田兼好が『徒然草』に

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の譽れありけるが樂麻の御論議の番に召されて七
 徳の舞をふたつ忘れたりければ五徳の冠者（ついで）と異名をつきにけるを心うき事にして學
 者をすて、運世したりけるを慈願和尚、一藝あるものをば下部までも召しおきて不便
 にさせ給ひければ此の信濃入道（ついで）を扶持し給ひけり。此の行長入道『平家物語』を作り
 て生佛といひける盲目に教へて暗らせけり。さて山門の事をゆゑしく書けり、九那判
 官の事は委しく知りて書きのせたり、蒲冠者の事はよく知らざりけるにや多くの事ど
 もをふるしもらせり。武士の事弓馬のわざは生佛東國のものにて武士にとひ聞き
 て書かせけり

とあるを眞として信濃前司行長の作なりとせり。『源平盛衰記』の作者また葉室時
 長なりといふ説あれど之れを『保元』『平治』に比ぶるに文辭太だ異なれば恐らく彼
 れの作ならじ。また『平家』及び『盛衰記』の世に出でたる前後につきては『盛衰記』前
 に出で、『平家』後に出でたりとする説と『平家』先づ出で、『盛衰記』後に出でたりと
 する説あり。二書殆ど同一の記事にして祇園精舎に筆を起し六道物語に之れ
 を收めつゝ、以て平源二氏盛衰の件を載す。故に『盛衰記』を後に出でたりとするも
 のは之を以て『平家』を敷衍増訂せるものとなし、『平家』を後に出でたりとするもの
 は之を以て『盛衰記』を抄録改刷せるものとなすなり。實際には孰れ當たれるかは
 審かならずと雖も其の行文及び結構の比較上古雅簡潔なるによりて『平家』先なり
 とするに至當の堆測なりとす。

『平家物語』及び『源平盛衰記』に載するところ比較上簡潔繁冗の別はあれど其の記事
 の略、同一なるが如く古今東西の故事先蹤に典據し儒佛の教理によりて案を斷ず
 る趣は二書また相似たり。就中全篇を通じて無常なる世相を示さんと務むる次
 第の明瞭なる二書各、相如けり。さて二書巻首に、祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響

あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す、驕れる者久しからず、只、春の夜の夢の如し、猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じと筆をつけたるは孰れも作者が其の篇を物せし主意なるべしと覺ゆるが實に予輩は此の二書を閱了して回想すればさながらに無常の響を聽き盛者必衰の理を感ずるが如き心地す。それ斯くの如きもの元來此の二書に於ける記事の然らしむるや必せりと雖も亦其の文章紆餘典折或は優美に或は激切に情に隨ひ意に應じ而して往々人生の弱點を穿ち以て讀者の感を惹くことあるに因らずばあらず。之れを『保元』『平治』の二書に比較するに時に華に流れ織巧に失したる弊はあるも精神快暢特に『平家物語』の一種の律呂を具へたる風あるは彼等の遠く及ばざる點なるべし。試に『平家』なる海道くだりの一節につきても見よ

四の宮河原になりぬれば爰は昔延喜第四の皇子蟬丸の關の嵐に心をすまし琵琶を彈き給ひしに博雅の三位といひし人、風の吹く日も吹かぬ日も、雨の降る夜も降らぬ夜も、三年が間歩を運び、立ち聞きて、彼の三曲を傳へけん、わら屋の床のいにしへも、思ひやられて哀れなり。相坂山をうち越へて勢多の唐橋

駒もといふと踏み鳴らし雲雀上れる野路の里、志賀の浦浪春かけて霞にくもる鏡山、比良の高嶺を北にして、伊吹の岳も近きぬ。心をとむとしなければども荒れてなかくやさしをは不破の關屋の板廂かか鳴海の沙干潟、涙に袖は志ほれつゝ、かの在原の何某の、唐衣きつゝ馴れにしと詠めけん、三河の國の八橋にもなりぬれば蜘蛛手に物をとあはれなり。濱名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて、入江にさわぐ波の音、さらでも旅は物憂きに、心をつくす夕まぐれ、池田の宿にも着き給ひぬ。彼の宿の長者熊野が女侍従が許に其の夜は宿せられけり。

『盛衰記』に見えたるを取出でんも亦之れに譲るべからず。學者須らく此の文を前に掲げたる『保元』『平治』の比べて幾何の進歩ありしかを知らんと共に又此の他の文の如何をも推測すべきなり。

『平家物語』及び『源平盛衰記』の結構文辭大體以上記載せるが如し。然らば二書の優劣は如何にあるべきぞ。全體の結構と文辭と詩情を帯びたる點に於いて元より『平家』の優りたること古人が既に云へりしが如し。况や『平家』は語らんとために

作りたる事として行文の間に一種の句拍子具はりて多少詩形をさへ有するをや。

因に云ふ。句拍子の件に關して僧惠空の云へるは『平家』を解するに参考となるべきものあり。曰はく「行長入道慈鎮和尚に扶持せられし故にや『平家』のふしも多くは台家の聲明のこゝみに似たる所あり。六道講義のはかせ及び叡山大台の時など讀みあぐる聲のふし今の座頭のかたる、よくうつりのまがふ所多し」と

されども是はこれ此の二書の詩情に關する大體の觀察なり『盛衰記』の行文の細密にして意匠の周匝なる却りて『平家』に優ることもなくばあらず。其の一例を示さば横笛といふ女房の瀧口時頼入道を嵯峨の往生院に訪へる條に『盛衰記』の

準嚴經の文をくり返し二二三邊をぞ唱へたる、聞けば尋ねる瀧口入道が聲なりけり。思ひ呼聲は聞こゆるなるためしも誠なる心地して暫く之れを立聞けば瀧口入道申しけるは「我親世に有りしかば何不足さと思はざりしかども横笛がこゝ心に叶はぬ憂世の中も思ひ知られて様をかへ斯く行きて候へば悲しき女は還つて菩提の音知識を覺えたり。人は心弱くては佛道は遂ぐまどきにてありけるぞ後世はさりとも助かりな人もものをなん」ぞ口説きたる。横笛は是れを聞き得つ、軒近く立寄りて竹の編戸を叩きけり。内より「誰ぞ」と問ひければ「横笛ぞ」と答へける。瀧口入道是れを聞き誠ならぬ事哉と胸うちさはぎ障子の間より是れを見れば實に横笛にぞありける。色々の小袖に薄衣引纏ひそやうの耳踏みきりて袖は涙すそは露にぞまほたれける。終夜

尋ねわびたる氣色は堅固なる道心者も心よわくぞ覺えける。無厭やな誰れ是れにぞは教へけん、何さてこれまで來たりけん、出でて物語せばや、見えて心をも慰めばや、思ひければ、主の見るも耻かしく、云ひつる、こゝも耻かしく、さては、佛道成りなんや、思ひきる。人を出だして是れにはさる事候はず、人違へにておはする瀧口は誰人ぞと事の外に云ひければ横笛強ひて申すやうげに入道の聲のま給ひつる者をや、様をこそ替へたはんからに心さへ強面なり給ひける恨めしさよ。させる妨にも成るまじ。われ故に姿をやつし給へるさ承れば今一度黒染の姿をも見奉り又便あらば自らも苦の袂に纏りかへて花を求め香を焼き共に後生を助からんと思ひてこそ遙々尋れまゐりたれ。それまで誠には叶はずは只、出で給ひて今一度見え給へし云ひければ入道千度百度出でばやと思へども云ひつる事も耻かしく、出で、由なき事もや、思ひつ、い、遂にかくれて遂はざりけり。比は十月中の六日の事なれば嵐に伴ふ曉の鐘今夜も明けぬと打響く月に纏く紅葉も幾重軒端に積もらん落つる涙に時雨つ、横笛をぞ絞りける。たま／＼有りき聞得つ、聲をたよりに尋ねれば主の僮のはしたなく無しと答へて出だされば腰身の程もあらはれて今は人を恨むに及ばず有樂明け行く空なれば人のためつゝましと思ひつゝ

山ふかみ思ひ入りぬる柴の戸のまことの道に我れをみちびけ
と讀みすて此の世の見參は叶はずとも朽ちせぬ契りにて後の世には必ずささらば暇申して入道殿とて女そこより歸りけり。時頼入道も心強くは出でれども悪しからぬ

中なれば、庵室の隆いり、うしろ姿を見送りて、忍びの袖を、ぞ絞りける
 とあるを『平家』の

住み荒らしたる僧坊に、念珠まけるを、瀬口入道が聲を聞きすまして、御様のかはりてお
 はすらんをも見もし、見え参らせんが、ために妾こそ是れまで参りて、候へ」と、具したる女
 には、せければ、瀬口入道胸打さわざ、あさましさに障子の障よりのぞきて見れば、裾は
 塵袖は涙にうちまほれつ、少し面疲せたる顔ば、せ賊に尋ねられたる有様、如何なる大道
 心者も心弱くなりぬべし。瀬口入道人を出だして、全くこゝにはさる人なし、若し門遠
 へにても候ふらん」といはせたりければ、横笛なさけなく、怨めしけれども力及ばず、涙を
 おさへて歸りけり。その後、瀬口入道同宿の僧に語りけるは、「是れも世は静かにて、念佛
 のせうげは候はれども、飽かてわかれし女に、此の住居を見えて、假令ひ一度は心強くさ
 も、又も遊ふことあらば、心も働き候ひなんす、暇申すまで、嵯峨をば出で、高野へ上り、まや
 うとく、まん院に行ひすまして居たりける

とあるに、對比せば、如何に『盛衰記』の筆致情を得て、人を助かす力あるかを判するを
 得べし。『盛衰記』の文常に、冗漫繁縟なることありとするも、時に情を得て、神に入る
 こと、『平家』に優る、豈に此の書全く彼れの下にありとせん。況や此の歴史たる、價値
 は到底『平家』の企及せざるることなるをや。

さて、軍記物語の外、雑史に、尙『十訓抄』及び『古今著聞集』といふ書ありしこと、既に述
 べり。『十訓抄』は何人の著なるか、分明ならず、或説に爲長卿の作かといへれど、いか
 があらん。自序には、建長四年の冬、神無月半の頃、ちのづから暇あり、心静かなるを
 りふしに、あたりつゝ、草の庵を、東山の麓に、まめて、蓮の臺を、西土の雲にのぞむ翁、念
 佛のひまに、これを、まゐるしを、はると見えたり。書中に載せたることは、専ら著者が
 見聞せる事につきて、十目を立て、教訓となるべきものを、集録せるなり。即ち此
 の如く、本書は、教訓となるべき事を、集録せるものなれども、史料となるべきことま
 た、少なからず、文章は、た平易にして、樸實讀むに足る。『古今著聞集』も見聞せる事柄
 を、集録せる點は、『十訓抄』に同じけれど、是れは、教訓にせんとて、ものせるに、あらず、
 『宇治大納言物語』さては、『江談抄』の體に倣ひて、神祇より、始め、禽獸、魚蟲に至るまで、類を
 分かちて、集録せり。文章質樸にして、虚飾なく、事實は、た信憑すべくして、史學上よ
 りいは、遙に『十訓抄』の上にあり。著者は、橘成季といひて、後深草天皇の御宇の人
 なり。建長六年之れを著はす。成季の傳例の、審かならず。卷の數、凡べて二十卷。
 『十訓抄』は、著者自ら言ふごとく、釋教の流を、汲むものなれば、云ふまでもなければ、
 『古今著聞集』は、た其の作者の、腦裏を、支配せるものは、鎌倉時代一般に、普遍せる、老佛

孔孟の思想に外ならざるなり。

第五節 日記及び紀行

『辨内侍日記』並に『中務内侍日記』 源光行の『海道記』と
其の子親行の『東關紀行』と 阿佛尼の『十六夜日記』と

鎌倉時代に日記と稱すべきものは唯、僅に『辨内侍日記』と『中務内侍日記』との二書ありしのみ。源光行の『海道記』其の子親行の『東關紀行』並に阿佛尼の『十六夜日記』などは云ふまでもなく紀行の文に属す。此の中『辨内侍日記』『中務内侍日記』及び『十六夜日記』は女子の手に成りしことゝて優美なること大方平安朝のに近く『海道記』と『東關紀行』とは男子の手に成りしことゝて勁拔なること當代の隨筆さては雜史等の風趣に似たり。但し平安朝のに近き日記の文も其の用語と文脈とは共に稍、當代の風を具へ着想はたさのみ古風のものにあらず。

辨内侍は中務大輔藤原信實の息女なり歌文に妙を得たりし事其の日記を見ても知らるべし。其の日記一本に『後深草院辨内侍家集』と稱せり。こは其の書の日記といふものから文は寧ろ歌の序詞めきたるものにて家集に類したるよりの名に

てもあるらん。後嵯峨院寛元四年正月廿九日富小路殿にて御讓位ありし事より書きはじめ建長四年十月まで殆ど七年間に渉る記事あり。文章平淡にして他奇なしと雖も禁中に奉仕せる緝紳宮女の狀態歴々として察するを得べし。歌もまた平板にして歌情稍、欠乏せる觀あるも風姿暢達誦するに足る。さて此の日記の作者に就きては其の奥書に

「此集後深草院辨内侍歌多見之仍號彼集此辨内侍者閑院冬嗣公一男中納言長良卿之末葉中務大輔信實息女也」

とあるに依りて古來辨内侍の筆なりといひ傳ふれども書中辨内侍の歌の多きが故にて別に然るべき證ありしにあらず。故に其の作者を辨内侍とするにつきては疑ふべきふしもまた少からずと見ゆ。例へば

五月五日あさかれひにかつみを参らせたるを歌をそへて取りてまわらせし仰言あり
しに菖蒲と思ひて侍れば、ひきたがへたるもおもしろくて辨内侍
かつみ生ふるあさかの沼もまだ知らで深くあやめと思ひけるかな

の如しものものがものせる日記なるに一々我が名を記載したりけん事如何にあるべき疑點は即ちこゝにあるなり。されば予證が此の日記を辨内侍の筆なりとせる

ものは只、便宜のため姑く舊説に依りたるのみ。此の日記の今日に傳はるもの巻末に至るに隨ひ紙魚の害を受けたるところ多くして全文の明確ならざるは惜しむべし。

『中務内侍日記』は宮内卿永經といへりし人の女にて中務内侍たりし婦人の手に成りしものなり。中務内侍の閱歴は詳ならねど龜山後宇多の兩朝より伏見天皇の御代にかけて奉仕したる人なりしが如し。書中記するところ、

徒に明かし暮らす春秋はたゞ羊の歩みなる心地して末の露本の甲に後れ先だつ例のはかなき世を且思ひながらも得達の縁には進まず皆生々世々に迷ひぬべき人間の八苦なるぞあさましき。唯、かゝる世のそいろごとのみ心に老みて忘れがたき中にも弘安三年伏見殿の御織法とて院の御方はかなくなりしに十五夜の月も雪打ち散りて風も冷やかなる枯野の庭の景色物あはれなれど同じ心に見る人もなし。獨眺めんも好きくしかりぬべければ入りて伏しぬるに春宮御方釣殿に出でさせおはします

とて故後深草院を忍び奉ることより書きはじめて伏見天皇の正應五年までの間ものが禁中にありて見聞せる事など載録せり。故に當時の御幸のさまさては伏見天皇御即位の次第、大嘗會の儀式等朝廷式微の間にありても尙大禮として辛く執行せられけるやう一々窺ふを得べし。文章は前段に見えたるにても明なる如く古風ながらも著るく當代の語勢顯はれ思想はた例の佛教思想の支配の下にあるを見る。これを『辨内侍日記』に對するに彼れは稍、豁然たる太平の和氣あるかの如く是れは聊か陰鬱なる厭世的傾向あるに似たり。彼れは端を祝賀に發き是れは卷を悲哀に開きたるに依れるか、作者の性質おのづから然るものありしに基づくべし。

『海道記』及び『東關紀行』は題名の既に表明する如く京都より東海道を経て鎌倉に至れる紀行の文なり。其の作者源光行と親行とは父子たりと雖も其の傳共に詳かならず。されども光行は其の記の卷首に、貞應二年卯月の上旬五更に都を出で一朝に旅立つと見えれば後堀河天皇の頃なるべく、其の子親行は『東關紀行』の中に「仁治三年の秋八月十日あまりの頃都をいで東へ赴くことありと記したれば四條天皇の頃の人なるべし。『東關紀行』は一説に長明の著はすところとすれど仁治三

年は長明死後の年號なれば執行の作とする古説こそ眞實なるべけれど覺ゆ。『海道記』の文は措辭六朝の體を帯び句を對する趣見えて稍煩瑣の風あれど和漢梵の典故を自在に引用するところ以て作者が富贍の學藻を窺ふに足る。『東關紀行』は『海道記』に比すれば寧ろ本朝の故事に典據し文體はた稍平易にして明快なり。されども若しこれをとりて次ぎに出でたる紀行の文『十六夜日記』に對するに尙行文も着想も前に云ひし如く勁拔にして其の作者の異性たる示をすこと勿論なりとす。

『十六夜日記』は阿佛尼の著はしたるものなり。阿佛尼は法名をまた北林禪尼と稱せり。從五位下佐渡守平度繁の女にして四條とも右衛門佐ともいひき。其の初は順徳天皇の皇后安嘉門院邦子の方につかへて侍女なりしが、のち大納言藤原爲家に嫁して爲相爲守等を生めり。阿佛尼の歌道に通じたるは其の著『夜の鶴』といへるに歴代の歌集を論評したるにても明らかなるが又當時の歌集中其の歌の入りぬものなきにても知らるべし。其の子爲相の生長して三代相傳の家學を繼承せしは其の母阿佛尼の力與りて功多かりきとぞ。『十六夜日記』は爲家死後爲相に

譲るべき播磨國細川の莊を異母兄なる爲氏の押領せしかば後宇多天皇の建治三年阿佛尼之れを鎌倉の執權に訴へんとして東下せし時の道の記なり。かるが故に此の記は管に行旅中に見聞せる山川若しくは事物を冷然漫録せるとは甚だ異なりて阿佛尼が子を想ひ道を思ふ熱情篇中に充滿横溢せり。すなはち此の壯舉は元來阿佛尼子を思ふ心の闇は尙忍びがたく道をかへりみる恨はやらん方なくとといへる如く數百里の旅行をも意とせざる母子の愛情より出でたるなれば聞睹せる事一として斷腸の思ひあらしめざるはなく或は道を思うて今の世を慨き或を子を想うて亡夫を傷むなど轉讀者をして涙あらしめざるなし。蓋し阿佛尼は慈愛貞節の淑徳は勿論分別あり學才ある婦人なりしなり。故に『十六夜日記』の文は情藻高潔にして野卑猥雜なるところなく全篇教訓となすとも毫末の支障なきを見る。行文簡にして意長く優美なるうちに何となく毅然たる精神の貫通せるは此の書の特徴とも謂ふべきなり阿佛尼の著作は此の『十六夜日記』の外尙『夜の鶴』として代々の歌集を評論せるものと『乳母の文』(川上引)『阿佛口傳』等あり或は彼れが歌道の意見を見るべく或は彼れの徳高きを窺ふべし。弘安六年鎌倉に於

いて残りぬ享年詳ならず。

第五期 室町時代の文學

第一章 總論

年代の範圍 室町時代に於ける文學の概況 言語文章

こゝに室町時代の文學とは後醍醐天皇の延元元年(一九九六)足利尊氏北朝の天子を擁立し自ら征夷大將軍の職に居りて幕府を京都室町に開きし頃より後陽成天皇の慶長七年(二二六二)徳川家康公征夷大將軍となりし頃まで凡そ二百六十餘年間に於ける文學を云ふ。此の間政治上の變革より云へば其の末造の三十餘年間を割きて別に織豊二氏の時代を設くるを一層精細なる分類といふべしと雖も文學上にはさる異目を置くべき程の特色なきを以て予輩は併せてこゝに之れを室町時代の下に攝す。

此の時代の文學は其の初に當りてはさまで鎌倉時代の風を距ること遠からざりき。即ち其の文學が厭世的思想を帯びたる或は雄偉瑰麗なる或は材料の斬新にして通俗的傾向を有せるなど予輩が之れを鎌倉時代に見たるに似たり。されども南北朝の頃は云はずもあれ天下一統に歸しての後も此の時代は外觀太平なる

かの如くにして内常に争亂絶えざりしかば其の文學は次第に衰微の姿を呈したり。况や嘉吉應仁さては其の以降の頃をや。英雄四方に割據して中原に鹿を逐ふ世の中には社會の上流に立つものと否らざるものとを問はず文學に従事するもの少く又稀に従事するものあるも専心之れが研鑽に身を委ねるものなければ當時の文學の微々として振はざりも當然の事なりかし。文學は太平の花なりと知らば誰れかは風吹き荒める當時に偉大高崇の文學あるべしと思はんや。然れどもかゝる時代にありても文學は尙ある自由なる方向をとりて進みたり。すなはち兵亂打ちづゝき人々干戈に忙しきがために規律の煩瑣なる文學こそは或少数者の手に委せられたれ其の自由なるものひとり世に出で較著なる進歩をなせり。俳諧歌の如き平安時代の文學に既にこれありしが此の時代にありては歌界に重要な地位を占め連歌はた急激の發達をなして暗に江戸時代なる文學の素をなしぬ。諸種の歌曲一層進歩して謠曲の出でたる、さては滑稽を主とせる狂言の起りたる、これのみにては此の時代を文學史中に紹介する價值あるべし。况や御伽草子といふもの出で、後世に於ける小説の種子たりし趣ありしをや。是

等の文學其のまゝにしては未だ偉大高崇の稱を冠しがたきはさる事ながら偉大高崇なる文學の萌芽たる價值は少くともこれあり。故に此の時代の文學を物に喩ふれば野分吹きわたりし冬枯の野邊にも似たりけり、古風なる文學漸く搖落して新文學の萌芽既に發生の兆ありき。さて是等の文學は細流の手に出でたるもの多かりしがために大方は佛教的趣味を帯びたること、また注意すべき要件なるべし。

此の時代の作者は文學既に以上の如き有様りしかば其の十の八九は其名を逸して不明なるものに屬せり。卜部兼好、頓阿、北畠顯房、宗良親王、今川貞世、一條兼良、太田資持、東常縁、宗祇、宵栢、三條實隆、山崎宗鑑等只、僅に其名を傳へて世に高きのみ。著書には『徒然草』、『草庵集』、『神皇正統記』、『新葉集』、『太平記』、『吉野拾遺』、『公事根源』、『權談治要』、『増鏡』、『幕景集』、『徹書記』、『三玉集』、『犬筑波集』等最も其の名あらはれたり。言語は古風の文學衰微すると共に舊來の格法ますます崩れて自由なるものとなり。鎌倉時代にありても漢學の講究衰へたるがために措辭用語や、蕪雜なるものあるに至りしが當代の言語は決して其の比にあらざるなり。即ち漢語梵語

武者詞などの交れるは勿論今日使用せる極めて杜撰なる言語も多くは此時代より始まれるが如し。例へば從來あるまじといひしをあるまいといひ、何々なりといひしを何々ぢやといふが如き即ち是れなり。語格假名遣のみだれには係結の辭の一定せざる又は自他の動詞の順逆を失せる又は覺ゆといふべきを覺ふとせざる如き大方の誤謬錯亂は此の時代に至りて其の極に達したり。是れ戦國の世の中とて一は文學に従事するもの古文の格を知らず一は當時諸地方の武士の交通いよく頻繁なりしにつれて不醇なる方言のますく多く混交せしに依るべし。それ當時の言語はかくの如く雅俗不醇なるものなりしかば此等の言語をもて綴りたる文章は冗漫粗笨のもの多かりしこと云ふまでもあらじ。されども此の時代の初期に出でたる隨筆又は雜史の文詞と中葉以後に見えたる謡曲のとは莊重なるもの絢爛なるもの尠なからず。故に此の時代の文章には典雅なるものと卑俗なるものと雅俗混交せるものと相錯綜せり。之れを要するに室町時代の文學は思想も言語も文章も一様に舊慣を破却して不羈自由なる新天地に入らんとするものなり。江戸時代新文學の發生は此の時代

の文學ありてこそ始めて見らるべきものなれば學者宜しく之れが研究に意を留むべきなり。

第二章 社會の概況

南北朝の兩立 應仁の亂 戰國 將軍及び諸侯の奢靡

士民の困弊 武士道 宗教及び教育

後醍醐天皇元弘三年北條氏を亡させ給ひてのち中興の業一たび成りしかども諸卿徒らに愉安を謀り天皇もまた政事に倦ませ給ひ内奏頻りに行はれ政令常に定まらず將士の行實はた多く偏頗に流れしかば世やうやく武門の昔を慕ふものあるに至れり。然るに此の間に在りて足利尊氏は累世の名望を有し併せて將士の心を收攬せしかば政道の不正を憤るもの次第に歸伏して威權ますく隆盛なりき。かゝれば心あるものは戦亂の必ず避くべからざるを憂へざるはなかりけり。建武二年尊氏遂に叛き自ら征夷大將軍と稱し延元元年京師を陥れてこゝに持明院の流なる皇統を擁立し幕府を室町に開くに至りて世はいよく亂麻の姿を呈しぬ。此の時後醍醐天皇は亂を遁れて吉野にふはせしが楠新田等諸勤王の將士

之れに随ひ奉りて恢復を圖りつ。是れより五十餘年の間戰亂止む時なく僻陬の地なほ其の禍を蒙らざるはなかりき。世に之れを南北朝の亂といふ。此の間南朝の社稷日に衰微して北朝のみ月に盛なりき。かくて尊氏の孫義満將軍の時に至り北朝の天子後小松天皇正位を踐むことに定まりて兩朝の和議やうやく成り天下の政道甫めて一に出でたり。されども天皇は素と足利氏の擁立に繋かるを以て多くは垂拱して成を仰ぎしかば幕府の威權獨りますく加はれり。

天下はかくして一時靜謐の觀を呈するを得たり。されども其は實に表面上の假裝なりしのみ。かゝる間にありても諸地方には尙小戰私闘の如き殆ど間斷なき有様なりけり。鎌倉の管領職は其の初尊氏關東を鎮護し併せて將軍を補佐せしめんとの趣意より其の子基氏を遣はししものなるが數世を歴るに及びては皆に往々其の管領の將軍と相拮抗せしのみならず君臣の間は尤常に親睦を缺き延いて嘉吉の戰爭を醸成せり。應仁の亂に至りては尙是れより甚しきものあり此の亂もと細川勝元と山名宗全との軋轢に基くといへども天下の諸豪大方其の孰れにか黨與せしかば數十方の軍兵東西に對陣して京師の地を戰場とせしこと前後

十一年の長日月に亘りぬ。されば之れが爲には京師大半兵燹にかゝりて灰燼となりたるのみか公卿百官は其のよるべを失うて四方に流寓し古來諸家に傳はりし肥録珍寶の類また略焼亡散逸しぬ。かくて兩軍解散の後も諸國の豪族孰れも其の城地を固うし道を塞ぎて各地に割據せしかば六十餘州到る處干戈の響絶ゆる時なくて弱肉強食の世となれり。かゝれば室町將軍の威令寸毫も行はるゝ所なく天皇の詔勅まして顧るものだになかりけり。勢あるものは譜代の臣下も鋒を逆にして其の君を陥れ力乏しき時は侯伯も其の威を保つに由なし。守護代地頭代の如き其の職非違を檢断する役にありながら今は却りて非違を逞うし其の主を追うて獨立するもの比々相連れり。永祿の頃織田信長尾張に起ころに及び始めて四方に號令せんとする志あり先づ近畿の地を制定し遂に當時の將軍足利義昭を奉じて京師に入りぬ。而して其の京師に入るや皇室を擁護し幕府を翼贊し以て衆望を收むることを務めたり。然るに義昭は信長の威望日に隆盛なるを猜みて除かんと謀りしかば却つて信長のために敗られて自家の滅亡を招きぬ。さる程に信長足利氏の後を承けて諸國を平定し其の領地の如き殆ど全國の半に

及びしが未だ全く其の成功を見るに至らずして逆臣の毒手に斃れぬ。其の臣豊臣秀吉偉略あり織田氏の偉業を繼續して遂に全國を戡定し城を大坂に築きて以て天下の政務に參せり。我が邦こゝに始めて天下一統に歸するを得たりしかども政權は未だ皇室に復せず且秀吉大志を抱きて征韓の師を起志しかば文物尙興隆の運に至らざりき。殊に秀吉の薨後は其の子秀頼幼稚にして諸侯を制すること能はざりしが故に將士各其の權を争ひ互に猜忌して騷擾を極めたり。元和元年徳川家康大坂城を陥れ豊臣氏を亡すに及びて天下全く平和の緒を開きぬ。かゝれば此の時代に於ける庶民困弊の狀は大方想像するを得べし。南北朝の頃は干戈寧日なく到る處戰場となりしかば庶民其の堵に安んずること能はず公卿百官の流落するもの亦尠からざりしは云ふも更なり。南北合一の後となりては天下稍小康の觀ありしかども將軍義滿驕奢極まりなく平素の行動或は上皇に擬し無用の土木を興して苛税を收めしかば民愈々窮乏せり。義滿が室町に花の御所を作り北山に鹿苑院を營み三層の樓閣を起し壁柱戸牖悉く金を塗りしが如きは如何に民力を消耗するところありしかを窺ふべし。其の孫義政に至りては奢侈

義滿にも超えたり義政が作りし高倉御所の腰障子は一間の價二萬錢なりきとや。義政財用究する毎に或は賦税を重くし或は徳政を布き或は又錢を明國に乞ひなどして以て一時を彌縫せり。さるに在京の諸侯また之れに倣うて盛に第宅を造營し頗りに奢靡を競ひしかば士民の困究日に月に甚しかりき。况や此の頃は天災地妖連年打續き物價また騰貴して餓季既に途に委するものありしをや。されば應仁以降に於ける士民の狀態は最早云ふを要せじ。志かるに此の間皇室を始めまゐらせて公卿百官の困弊はをさく士民の狀態にも譲らざりき。諸國の豪族跋扈するにつれて朝廷の所領いよ横奪せられ公卿の領地はた武人の横領する所となりぬ。應仁亂後には此の弊ますます甚しく公卿孰れも衣食に安ざる能はず或は縁を求めて諸國に流落するも多かりき。管領大内義興の職を辭して周防に歸るや諸司の之れに従ひて下りしもの引きもきらざりきとぞ。かくて朝廷の恒例の廢せるもの擧げて數ふべからず。明應九年に後土御門天皇崩御ましませし時には大葬の費用給せざりしを以て靈柩を黒戸の御所に納め奉りしこと四十日に及びぬ。後奈良天皇御在位の頃となりては朝廷の衰微いよく究

まり宮殿の如き頽破してさながら邊土の民屋に異ならず築地毀れて内侍所の御燈の光も見ゆるばかりの御有様なりきといふ。信長出で、朝廷の典禮稍古に復するを得たり。

かくの如く此の時代は僅に小康の時こそあれ前後大方紛亂の世なりしものから彼の武士道の如きは鎌倉時代にもまして著るく發揮せられたり。されば當時の武士は皆廉直を重んじ信義を尙び死を鴻毛に比して只管ら父祖の名譽を汚さばらんを士の本分なりと思惟したりき。これ將軍義滿の頃管領細川頼元等率先して斯道の奨励を務めたるに依ると雖も一部は當時の武士が多く參禪したる結果、人生を無常なるものと觀ぜしかば同じくは果敢なき命も義のために死なんと期せしにあるべし。而して此の生命を輕んずる觀念はまた當時戰亂の世の中とて剛強を貴ぶ風と一致結合して卑怯未練の舉動を無上の耻辱として厭惡したり。故に其の死につくや從容として苦痛を感ぜざる如く或は腹を一文、八文、十文字に掻き割き刺へ自ら臍腑を掴み出だして辭世の句を詠ずるもありけり。かくて此の氣象は單に武士の間にもみ存したるにあらず公卿殿上人の如き若しくは

婦女の如き又之れを尙びたり。公卿殿上人の尙武の氣風に移らんとする傾向は嘗て述べたる如く鎌倉時代の末葉に於て既に之れありしが此の時代の初には是等の人々も時としては自ら兵器を執りて戰場に立つことありしより一層著るく此の氣風を發達せしめたりと覺ゆ。但し此の反對に諸侯が公卿等の優柔なる氣風に感化せられて其の家を亡ぼしたる例も稀に無かりしにあらず。

婦女子の義に勇み貞操を重んじたるは一般に社會の表面に立つ男子の氣風と、に在りしかば其の自然の感化に依りたるなるべし。然れども社會の人の多かる中には武士道の眞意義を誤認したるものも往々にして之れありしは勿論なり。就中世漸く降り應仁亂後となりては此の如きもの却りて多數を占めたりしが如し。道義地に墜ち法令其の効を失ひ吞噬搏撃たゞ事とする世の中に廉直を尙び信義を重んずる風の聊かたりとも残るべき筈なければ武士道の眞意義失はれたるは當然の事ぞかし。すなはち此の時代の中葉以後には人々剛強を尙び然諾を重んじ卑怯未練を耻づるものから後世の所謂任俠の如く理の是非事の善惡を問はざる傾向生じたり。故に武人にして一朝の然諾のために身を粉に碎くものあ

るも信義のために生命を棄つるは少し。剛強一邊を重んずる輩には大功は細瑣を顧みずとて斬り取り強盜をなすも武士の面目に關するとなしと思惟するもありき。此の頃我が狼慾の犠牲としては最愛の兒女を敵に嫁せしめ山海の恩ある父母をも人質となすを躊躇せざりきと聞かば誰れか之れを武士道の眞意義失はれずとせん。

かく當代の人士は上下を通じて一般に殺伐剛強を尙びしかば其の遊戯の如きも多くは之れに合ふ流鏑馬、笠懸、犬追物、狩獵等の雄壯活潑なるを愛したり。志かれども又京都縉紳の風を承けて武士等が軍陣の間に閑雅瀟灑なる茶の湯を弄び田樂猿樂白拍子等を招きて遊ぶことも尠からざりき。南北合一し天下稍小康の觀を呈せし將軍義滿又義政の頃は地方の士民の困弊せるに拘はらず上下遊惰驕奢に流しかば時人の嗜好も勢ひ殺伐なる事を餘所にして優美閑散なる娛樂に傾きたり。茶の湯今を盛りと行はれ聞香挿花の遊び又時を得顔に持囃されたり。猿樂の専ら世上に流行せしも義滿將軍の頃にして世阿彌と稱せる者が猿樂、田樂、曲舞等の諸曲を折衷して謠曲を作りしも又狂言の出でたりしも此の頃の事なりと

ぞ聞えし。其の他連歌蹴鞠は更なり園藝の法はた精巧を極めぬ。かゝれば義滿義政の頃に於ける諸藝術の發達流行の優美なるはなか／＼に平安時代の昔の姿にも譲らざるべしとこそ思はるれ。而して是等諸種の遊戯技術は嘉吉應仁の後に至りても廢絶することなくて織田豊臣二氏の世にも尙一般に行はれたり。此の時代の武人が美少年を愛嬖したりし一事は特に記載すべき價值あるべし。元來僧侶が美少年を嬖せしは佛戒に女犯を禁絶せしがためなりしが武人も戰場にありては婦女を携帶せんことかたく遊妓を聘せんことはた意に任せねば軍旅の鬱悶を散ずるがために男子相契りて互に慰藉すること古くよりも稀に之れありき。此の時代に及びては其の風ます／＼盛行し美少年の眉を剃り齒を涅め鉛粉を粧ひ女装して只管ら媚を賣るものもありけり。義滿將軍を始め歴代の將軍の美少年を寵し男色を愛したるためし尠からず。戰國の世に在りては殊に此の風盛なりき。

此の時代に於ける宗教の狀態は鎌倉時代に比較すれば稍沈靜の觀あり。鎌倉時代に在りては殆ど佛教革新の時期ともいふべく日本の佛教の創始せられたるも

しかば秀吉之れがために國家の亂れんことを憂ひ遂に其の傳道を禁じ宣教師の徒を海外に放逐せり。まかれども世人の耶蘇教に對する信仰は決して之れがために一時に消滅するものにあらず是れより永く我邦人の心に佛教の信仰と共に銘記せられつ。さもあれ耶蘇教の渡來は此の時代の末造に屬せしを以て重もに當代の人心を支配せし信仰は佛教にありきと知るべし。彼の古來我が邦人の精神どもせし敬神の念は此の時代に入りて佛教と同じく一の宗教として唱說せしものありしかど其はさまで人心に影響を及ぼすことあらざりき。

漢學の攻究につきては殆ど地に墜ちたりと云はれ足るほどなり。鎌倉時代は四海概ね靜謐なりしを以て尙多少は漢學に志す徒もありしかども此の時代に至りては只僅に一縷の命脈を維持せるあるのみ。此の時代に於いては文筆の權は大方便侶の手に委せられしが漢學の攻究を維持せしも全く僧侶に過ぎざりき。武人は既に戰陣の馳驅に忙しく庶民は連年の紛亂凶荒に疲るれば如何で漢學の攻究に身を委ねることの出來べきぞ。後醍醐天皇の如き將軍義尙の如き當代に在りては珍らしくも學に志志し方なれども尙一般に普及せしめんことは到底能く

すべきにあらざりき。まかるに此の間下野に足利學校といふものあり京都に五山の僧徒のありて僅かに有志の士の就いて學修するを得たりしは幸なり。足利學校は其の創設詳かならず或は國學の遺跡ならんといひ或は小野篁の建設なるべしともいへり從來久しく頽破に屬せしを北朝の貞和年中足利基氏之れを再興したるなり。永享十一年上杉憲實また之れを再建し多く書籍を入れ學田を寄附し禪僧快元をして教授したらしめき。當時海内唯一の學校なれば學徒東西より集まり憲實の功を賞せざるものなかりきといふ。さて此頃京都五山の僧徒が専ら修めしは朱子の註疏にして古註は早く彼等の排斥せるところなりき。されば徳川時代に朱子學の隆盛を極むるに至らしも一は此の時代の餘波なりとす。尙此の時代に杜撰なる漢語の行はれそめしも偏に斯學の攻究普からざりしに依れりと知るべきなり。

以上叙述せしところ室町時代に於ける社會の狀態を觀察し來れば此の期の文學が細流の手に残りて只僅かに一縷の命脈をやう／＼にしてつなぎ止むるに至りし所以も明瞭なるべく隨うて佛教的思想の鎌倉時代にも超過して遍在したり

し理由も推測せらるべし。况や古風なる文學衰殘して思想も言語も文章も一樣に古今未曾有の變革を詞壇の上に見るの當然なりし理由をや。要するに此の時代の變亂は論なく文學の發生をして一時衰殘の非運に陥らしめたりと雖も再び其の萌芽を不羈自由なる新天地に移らしめたり。就中從來文學の中心たりし京師の騷擾は文學をして朝紳宮嬪の手を離れて一層平民的なる邊に向はしめたると共に併せて其の中心をも他に轉ぜしめ且其の産地を擴張せしむべき端緒を開きたり。

第三章 歌謠

第壹節 歌界の概況

歴代の勅撰歌集 和歌の衰微 連歌の發達並びに
流行 謠曲の創製

上に述べたる如く此の時代の初つ方は南北朝の兵亂に到るところ修羅の街となりて庶民其の堵に安んずるは稀なりしかども和歌のみは流石に鎌倉時代の餘勢を承けてさまでの非運に到らず故に若し其の頃の歌人の數と詠歌の量とにつま

ていはゞ決して前代の末葉に譲らざるべし。花園上皇をはじめ奉り吉田兼好、冷泉爲之、二條爲定、全爲明、足利義詮、頼阿、二條爲遠、宗良親王、慶雲、淨辨等は當時の最も名高きもの其の外歌集に載れるものに至りては殆ど枚舉に遑あらず。されは勅撰の歌集の如きも俄に廢滅するに至らず數十年の間に尙能く數種の撰進ありし程なり。即ち此の時代に入りて先づ世に公にせられたるは北朝の光明天皇の貞和二年南期にては後村上天皇の正平元年に當るに花園上皇の親しく撰録せさせ給ひし『風雅集』を以て始めとす。上皇の此の集を撰び給ふや當時の風調おしなべて姿詞の艶麗ならんを希ひ徒に虚飾摸倣を事とするあまり往々にして卑野に流るゝものあるを慨かせ給ひて姿情共に『新古今』の雄偉瑰麗なる古跡に復せんとするにありき。

其の序文に曰はく「近き世となりて四方のこまわざすたれ誠すくなく儻りおほくなりたれば偏に飾れる姿たくみななる心ばせを旨として古の風は殘らす或は古きことばなぬすみいつはれるさまにつくるひなして更に其のものにまさふ又心をさきとすこのみ知りてひなびたる姿、だみたる言の葉にて思ひみだる心をばかりをいひあらはす。正しき心すなほなることばは古の道なりまことに之れをさるべしこはいへどもこと

わり迷ひて強ひて學はやすなほち卑きすがたさなりなん體なる体巧なる心優ならざるにあらす若し本意を忘れて妄りに好まば此の道ひさへに廢れぬべし。かれもこれも互に迷ひて古の道にはあらす或は姿にかゝらんさすれば其の心たらす言葉こまやかなれば其のさまいやし難なるはたはれすぎ強きはなつかしからす凡べてこれをおほよそ出雲八雲の色に志を染め和歌の浦波に名をかくる人々流れての世に絶えずしておのゝ思ひの露ひかりを磨き玉をつられ言葉の花匂ひを添へて錦を織るさのみ思ひあへるうちに賊の心を得て歌の道を知れる人は猶數すくなくなんありける。
(中略) 萬の道の衰へよものこそわざすたるゝを歎く。これによりて元久の昔の跡を尋れて古き新しき言葉目につき心になふを辨ひ集めて廿卷とせり名つけて『風雅集』といふ。これ色にうみ情に引かれて目の前の興をのみ思ふにあらす正しき風古への道末の世に絶えずして人の感ひを救はんがためなり」と。

然れども上皇の宣言し給ひたる慮慮は實際に之れを『風雅集』の上に見るを得ず彼の集は強ひて奇僻に流れたる觀あり。當時の歌人は先に藤原爲兼の撰進したる『玉葉和歌集』と共に之れを排斥したりとぞ。おもふに是れ一には當時の歌人何れ

も二條家の流派ならざれば冷泉家の歌風を奉ずるものゝみにて毘沙門堂の風に類する歌躰を厭忌せし偏見にも依るべしと雖も亦一には此の集の慮慮に添はざりしにも基くところ多かるべし。例へば

春の歌の中に

正三位知家

たがためぞ殿機山のながき日にこそゑのあや織る春のうぐひす

春の歌の中に

後京極攝政太政大臣

はるの色は花ともいはじかすみよりこぼれて匂ふうぐひすの聲

戀の歌の中に

權大納言公蔭

契りありてかゝる思ひやつくばねのみねども人のやがて戀ひしき

の如きを見ても明瞭なり。予輩は是等の歌につきては單に縁語を用ひて姿詞を修飾したる外歌情に其の斬新なるものをも亦雄偉幽玄なるものをも認むる能はざるなり。さて此の集が上の如き慮慮を以て撰進せられ其の中に散見する歌人も柿本人麻呂紀貫之等を始め歴代の名あるかぎり、さては當代の名手を網羅せられたるにも拘はらず其の膚淺軟弱なることかくの如しとすれば其の他の不用意

なりし勅撰の如何なるものなるかは類推すべきなり。此の集巻の数は廿巻歌の数は二千二百十首之れを春夏秋冬、旅戀、雜、釋教、神祇、賀の十部門に類つ等すべて從來の勅撰歌集の體裁に似たり。此の『風雅集』につきて世に出でたるを『新千載集』(廿巻二千三百五十九首)といふ。『新千載集』は又北朝の後光嚴天皇の御宇延文四年(南朝後村上天皇)に二條爲定の撰進せるものなり。三光院此の集を評して曰はく『新千載集』は歌よりも詞ちもしろしと、さもあるべし『風雅集』と同じく上代の歌をも載録せりといへども歌情の賞揚するに足るものあるを見ず。次ぎに此の『新千載集』出で、僅かに四年にして、同天皇の貞和二年(同後村上天皇)に『新拾遺集』(廿巻千七百五十八首)といふもの亦撰進せらる、撰者は二條爲明にして順阿之れを助成したりき。『新拾遺集』につぐを『新後拾遺集』(廿巻一千五百五十四首)といふ。此の集は北朝後圓融天皇の御時永和元年二條爲遠勅を奉じて撰録に従事せしものなるが未だ篇を終らざして薨去せしかば二條爲重其の後を襲ひ後小松天皇の至徳元年に及びて漸く完成せたりき『新拾遺集』の撰進を距ること二十一年なり。其の後『新後拾遺集』より五十五年を経て後花園天皇の永享十二年(二〇九八)に至り飛鳥井雅

世『新續古今集』を奉りぬ之れ勅撰和歌集の終りとす。其の昔延喜の時紀貫之が『古今集』を撰びしより此の『新續古今集』の成りしまで其の數總じて二十一世に是れを二十一代集といふ其の間の年月凡そ五百三十年に亘りぬ。此の外に尙ほ『新葉集』(廿巻千四百十五首)といふものあり南朝なる後龜山天皇の弘和元年(二〇四一)北朝の永徳元年に宗良親王の撰び給ひて奉りたるを勅撰に准ぜられたるものなり。此の集は元弘以後五十餘年間に於ける南朝の人々の歌を集録せり。其の序文に曰はらく

「秋津島の中、浪の音まづかならず春日野のほざりさぶ火の影まばく見えしかど程なく亂れたるを治めて正しきにかへされしよりは雲の上の政事更にふるきにかへり(中略)一度は治まり一度は亂る、世の中なればにや終に又むかし唐土に江をわたりけん世のためしにさへなりにたれど千早振る神代より國を傳ふるまるとなれる三種の寶なもうけつたへまま(中略)に吳竹のその人数に列りても三代の御門につかへ和歌の浦の道にたづさはりては七十のまほにみちぬるうへ勝事を千さきの外にさだめしむかしは野邊の草こまげきにも紛れき。心を三の衣の色にそめぬる今は藍間の船さばるべきふしなればかつは老のこゝろをも慰め且は末の世までも残さんためかみ元弘のはじめよりまも弘和の今に至るまで世は三つぎ年はいそさせの間假

りの宮に従ひつかうまつりて折りにふれ時につけつゝ言ひあらはせる言葉どもを玉の臺ウツタ金の殿より瓦の窓トボツの扉の内に至るまで人をもちて言コトを捨てず損びさだむることろ千歌四もチチちあまり廿卷ニジマキ名つけて『新葉和歌集』といへり云々。

されば『新葉集』の歌は大率南朝の社稷を回復せんと計りし人々の作歌なるを以て他の勅撰歌集の軟弱膚淺なりしに似ず雄壯の調多く讀者をして悲憤の情に堪へざらしむるものあり。宗良親王が「歸雁を」

かへる鴈カなにいそぐらんおもひでもなきふるさとの山と志らずや

と詠ませ給へるが如き又は後醍醐天皇が「月前の霞といふ事を詠ませ給ひける」に

かげやどす月さへ今は馴れにけり都にかはるそでの志らつゆ

と製らせ給ひしが如き其の他後村上天皇が

百首歌よませ給ひける中に豊明節會の心を

豊明天つをとめのそでまでも代々の跡をばかへしてぞみん

と製らせ給ひ法眼湛助が

後醍醐天皇吉野の行宮におはまましける頃歌めされけるに

月前雁を

あくがるゝ心を月にさきだてゝみやこにかへるみちいそぐなり

と詠めりしなど孰れも其の歌情當時の勅撰歌集と異なるを見る。蓋し其の歌の雄壯卓抜なるは勿論詠者直ちに其の肺肝を發いて真情を吐露する趣あること此の集の特色なりとす。彼の聲調稀に整はざるものありて流麗典雅の致之れがために稍乏しと雖も予輩は此の集を以て『新古今集』以來の傑作とするに躊躇せず。

『新葉集』は實に我が近古の歌界に於いて掉尾の觀を呈せしものなりと謂ふべし。かゝれば當代に入りて續出せる諸勅撰歌集は上代のにはいふに及ばず鎌倉時代のに比してだに其の歌情劣れるところ多かりしことは推しても知らるべし。況や勅撰歌集の撰進全く世に絶えはてたる以後の状態をや。『新續古今集』の撰進せられし頃には撰者雅世の外今川貞世了俊、宗朝、正徹、一條兼良、心敬、宗純一休等あり稍下りては太田持資、道灌、足利義尙、東常縁、宗祇、宵柏、西三條實隆、宗牧、荒木田守武、三條公條の如き多少其の名世に存するも遠く古人に及ばず只僅かに餘光の滅せざるありしのみ。蓋し其の頃如何に秘事口傳の弊歌人の間に流傳せしかを知らば

斯道の陵夷するの止むべからざりしを解するに難からざるべし。

そもく歌學師傳の一事は其の濫觴遠く平安朝の季世に於いて既に之れありしよしは嘗つて記載したるが如し。然るに此の時代に入りて歌學師傳の一事は遂に秘事口傳の法となりて漸次其の弊害を増長するに至りぬ。さて秘事口傳とは歌道を指南するもの、古今集の秘事といふものを設けて容易に人に許さざりし如きをいふなり。すなはち古今集の中なる相生の松をが玉の木めどのけづり花を三木といひ、喚子鳥いなおほせ鳥みやこ鳥を三鳥といひて大切なる秘事とせしが如し。此の時代の中葉以後には殊に之れを重んじ世に古今傳授と稱して其の皆傳を得るを以て一生の面目と爲したりき。是れ其の起源は彼の斯道の師範家二條冷泉及び毘沙門堂の三家に分かれてより各自其の正統を主張し自ら貫うせんがために虚構せしものなるべきか。然れども之れを傳ふるものは是れ紀貫之が其の昔宇佐の宮に祈り夢想によりて授かりたるものも基俊に傳へ基俊又之れを俊成に傳へ俊成より定家に授けたるものなりといへり。平安朝の末葉より行はれたる歌學さへ歌謡の原理を教ふるにあらで單に些末なる修辭の一端を消極

的に指示するか或は撰集の趣歌の書模墨の濃淡など諸の儀式を傳ふるに止まりしかば偶以て詠歌の自由を制限する外利益するところあるべしとも覺えざりしに古今傳授若しくは之れに類する口傳の如きは之れにもまして無益の業たりしや論ずるまでもなし。

吉田令世曰はく『古今集』は延喜五年に貫之などが詔を承りて撰りしものへたる昔今の歌の集にこそあれ玄妙不思議の深き理こもれる物にはかつてあらず秘事とてかくしも傳へしすべき事はいづこにはあるべき只讀み見るまゝの古今の歌集なるをや。若し今世にある古今の傳授といふもの、如くなるすぢならば「あひおひの松」をが玉の木めどのけづり花これを三木といひ「喚子鳥いなおほせ鳥」都鳥これを三鳥と云ひていみじき秘事とすなるは愚痴なるたは言といふべし。凡そ草木鳥獸の名などは昔有りて今無きもあり今有りて昔無きもあり又一つものながら昔と今と名のかはりたるもありて其れを考へ明らかめんとはたはやすかられども三鳥三木などは貫之が撰ばん時は皆當時世にありて人も能く知りたるから歌にもよむわざにて今の如くかくし物する事にもあらざりければ貫之それが秘事口傳を作るべきかは。よしや其の秘事にあらめども三鳥三木などを知り得たりとも歌よむうへの心得には木より用なきわざなれば道の傳授さなすに足らず。又七首の秘事七個の大事といふことあり其の歌つばきして棄つべき事どもなり。たとは貫之が袖ひぢて結びし水のといふ歌を此

の歌は三國和合の理侍るなりとて法華經梵網經などを事々しく引きていへる如何で
 ざる事のあらん。貫之いかにみづから誇ることも我が詠める歌にかゝる傳授を作りお
 くべきにあらず。又基俊俊成定家いかに文盲至愚の人なりともさすがに聞こえたる
 此道の上手たものかゝるはらあしき事を構へ出で古今の秘事なりといふべしやは云
 々々。

古今傳授は此の時代の季に東常縁本第第三節といふもの宗祇に傳へ宗祇之れを西
 三條實隆に傳へ實隆之れを其の子公條に傳へ公條より實澄公國を経て細川幽齋
 に傳へたるを二條家傳といひ宗祇より牡丹花宵柏に傳へたるを堺傳授といひ宵
 柏より奈良の饅頭屋林宗に傳へたるを奈良傳授といひ。されば無益なる傳授
 も當時如何に世に重きを爲し、かを知るべく隨うて又之れがため如何に多く和
 歌の精神を解するもの、尠かりしかを知るに足るべし。和歌の精神を看過抛擲
 して一意無益の詮索に従ふ是れぞ即ち斯道の陵夷を早からしめ、一大原因なる
 べき。

さて和歌は斯くの如くにして遂に全く地に委するまでに陵夷せしかども歌界は
 此の時代に入りて所謂和歌とは其の精神と方式とを異にせる連歌の上に未曾有
 の發達進歩を見たりき。今や此處に其の概要を叙述せんと欲せば勢ひ從來の連
 歌が如何なる地位を騷壇に占有せたりしかを略記せざるべからず。

そも、連歌の起源は日本武尊が東夷を征せられしころ既に之れありしことは
 曾つて記載せたるが如し。其の後此のもの隆盛といはんほどの流行をば見ざり
 しかども尙代々に其の跡たゆるとなくして『拾遺』『金葉』の如き勅撰の歌集にさへ
 一時は短歌に並べて採録せられたりき。さもあらばあれ當時の歌人が連歌を遇
 することは決して短歌の比にあらず只、諸の會合に餘興として機智滑稽を弄して
 一時の娛樂に供するに過ぎざりき。故に其の頃の連歌には後世の如く一定の方
 式などいふものあることなく單に一首の短歌を上下の二句に分ち二人して詠
 ぎたるなり。すなはち當時に於ける短歌と連歌との差異は只、一首の短歌を一人
 にて讀むと二人して詠ずるの別ありしのみ。されば通常の短歌も連歌も其の一
 首を成するのちに之れを唱すれば思想の上にも形式の上にも些の特異なる點だ
 にも絶えてあることなかりき。かくてのち鎌倉時代に入り後鳥羽天皇の頃とな
 り藤原定家卿同家隆卿等の出づるに及び稍、其の形式を異にし始めて五十韻或は

百韻などと稱して短歌の上下の句を五十句又は百句と連接すること行はれき。これ從來支那の詩賦に聯句と唱ふるものゝ行はれたるを見て模倣たるものならんといふ。其の思想上の連鎖をもて展轉推移し五十句百句を結合するところ以前の連歌に比すれば其の形體の延長によりて歌情の上にも幾多の妙趣加はりたるや論なし。殊に其の連歌を詠せるものは『八雲御抄』に連歌をばあらぬやうに引きなし引きなし付くるなり春にて久しく秋にて久しきは連歌せぬものゝ集まりたる折の事なりといへる如く努めて同工一體に陥らざらんことに注意せしかば一篇の首尾變化に富みて多趣なるものとなれり。されども當時の連歌も未だ尙ほ全然舊套を脱すること能はず後世に所謂一面見渡しの去嫌打越し景物の指合等に意を留むるはなく多くは長短二句の間の關係に注意するまでなりき。而して其が二句の關係も全く以前の連歌に異ならず單に短歌の上の句、下の句といふが如きものにて未だ獨立に各句が二個の思想を表示するものにはあらざりしなり。かゝれば當時にありて連歌を詠ぜしものは大率通常の歌人に過ぎず隨うて連歌の騷壇に於ける位置は遂に和歌の下にありたりき。

當時また連歌には其の格調に二様あり一は上代の連歌の如く機智滑稽を主とし他は常の歌の如く専ら優美瑰麗なるを貴びぬ。而して其の優美瑰麗なるを柿本と名づけてよき連歌とし滑稽を主とするをば栗本と呼びてゐるき連歌となし是等を別座に分かちて或は又有心の座、無心の座ともいへり。されども前にも記載したりし如く當時連歌を詠ぜしものは大率和歌の名手として世に聞こえたる定家卿、家隆卿を始めとし土御門院、順徳院、爲家卿、爲氏朝臣、辨内侍等なりしかば偶、光親朝臣、宗行朝臣等の如く専ら滑稽的なるを詠せるものなきにあらざりしも幾程なくて優美なるもの勝を占め滑稽的なるは一時其の跡を潜むるに至れり。此の頃連歌が尙ほ單に歌人社會の玩弄としてのみ行はれ未だ獨立の位置を騷壇に有つこと能はざりしは其の昔にかはることあるなし。予輩が鎌倉時代の篇において連歌の行はれしことをいひながら特に之れを詳述せざりしも一に此の故なり。」さる程に鎌倉時代の末葉に至りては和歌がやう／＼諸の秘論の中に鎖されて其の道ならざるものゝ容易に窺ふこと能ざるものとなりしにつれて所謂地下の輩の文學に志あるもの多くは連歌道に其の身を投ぜしより其の流行一時稍盛なり

けり。南北朝の初の方は天下多事の秋にして所謂月卿雲客も遂に文學に心を委ぬること能はざりしが連歌も亦おなじき運命の下に地下の隠士若しくは僧侶の輩にのみ其の餘命を維ぐに至りき。其の頃の連歌師にして其の名の後世に残れるはわづかに善阿法師といふものひとりありしのみなるにても如何ばかり斯の道の衰微せしかを推測するを得べし。其の後南朝の勢威次第に衰へ室町幕府の權力やうやく加はれる義満將軍の頃に及びて諸般の藝術再興すると共に連歌も亦空前の流行をなせり。殊に其の頃より短歌は前代にまして秘事口傳といふ事盛行せしかば詞人は之れがためにますく連歌道に心を傾くるもの多く其の勢滔々として一瀟千里遂に短歌を壓倒するに至りぬ。されば從來久しく地下の隠士若しくは僧侶の輩にのみ弄はれしものも今はまた殿上の間にも之れに意を注ぐものあり否當時連歌再興の機會に乗じて之れが基礎の鞏固を計畫せしものは其の身和歌道の師範たる二條家に生まれ位攝關の榮を極めたる二條太閤良基公となんいへる人なりし。實に良基公の手に成れる『菟玖波集』と『筑波問答』と『應安新式』とは方に連歌をして懸壇に一個最好の位置を占有せしめたるものなり。す

なはち『菟玖波集』はやがて勅撰の歌集に准ぜられて世の視聽をして連歌の上に注がしめ『筑波問答』は其が智識を世人に扶植しておのづから斯道の手引草となり『應安新式』は最も正確に其の形式を規定して既に斯の道に入れるものにもまで裨益あらしめたり。されば連歌界は茲に一大革新をなして愈々繁榮の緒につきぬ。其の後の状態を叙するに先だち當時に於ける連歌の大躰の形式を説明するはさのみ贅言にあらざるべしと信ず。

およそ連歌は五七五の長句と七七の短句と交互連接して百句より成立するを通常例とす之れを百韻といふなり。百韻を二分したるを五十韻といひ百韻を十倍して千句と稱す共に百韻につぎて世に行はれたり。百韻の連歌を記載するには通常懷紙四枚を以てし其の第一枚目の表面に八句を記して之れを表といひ其の裏面に十四句を書して之れを裏と稱し第二枚目第三枚目の表裏は各十四句を記して之れを二の表、二の裏、三の表、三の裏といふなり。また第四枚目の表は名残の表と稱して第二枚目第三枚目の表裏とおなじく十四句を記載し其の裏面をば名残の裏と唱へて八句を記すること第一枚目の表面の如し。かくて其の懷紙の

裏と二の表と、二の裏と三の表と、三の裏と名残の表と各二面を合して之れを見渡し、といひ各懷紙の表裏二面を合したるをば同懷紙と稱せり。其の最初の第一句を發句と呼び次なる句を脇又は入韻といひ脇の次なるを第三と稱し最終の句を舉句といひぬ。又一卷の各長短句を連接するにはそれの規定ありて妄りに助かすべからず『應安新式』に記載するところに従へば輪廻、遠輪廻、本歌取、或は一、座一句物、一、座二句物、一、座三句物、一、座四句物、一、座五句物、可、嫌、打、越、物、可、隔、三、句、物、可、隔、五、句、物、可、隔、七、句、物、可、分、別、物、等諸種の指合、去嫌さては賦物の法などを其の大要とす。而して特に當代の連歌をして以前のに異ならしめしものは長短二句の關係が從來の如く二句連接して初めて一個の意味を完成すること短歌の上の句と下の句といへるが如き地位に立てるにあらで一句一句に各獨立の思想を表示するもの、前後思想の連絡によりて相集合せしこと是れなり。それ當時連歌を詠ぜしもの大方皆是等の規定に遵はざるべからずとせば之れ秘事口傳の究屈なる拘束ある和歌に代ふるに煩瑣なる法則ある連歌を以てするものなれば到底和歌の覆轍を踏襲するに至るべきは豫期するを得べし。されども

是等の規定は短歌の秘事口傳とは其の趣異なりて只、大やうに一卷の首尾をして變化多からしめ隨うて多趣ならしめんと企圖せしものなれば或は之れがために時としては同工に流るゝ弊はあるべきも能く其の煩瑣に堪へて完成せんには其のものの大率思想の流轉究極なき觀ありき。况や其の思想上及び修辭上の工夫は遂に梵灯庵をして此の道に醉はずしては我が心より出来る連歌あるべからずとさへいはしむるまでに發達せしかば斯かる輩に取りては未だ尙ほ是等の規定はさまで其の思想の發展を拘束することなかりしをや。

其の頃斯道の達人として世に最も名聲ありしは善阿の弟子救濟なり良基の如きも之れに師事たりきといひ傳へたり。其の他周阿、梵灯、心敬、宗砌、兼載、智縕等救濟と殆ど時を同じうして世に出で名もまた相若けり。是等の人々に次ぎて一時連歌道の主權を掌握せるを宗祇とす時の天子より花の本の號を賜はりき。宗祇の弟子に牡丹花宵柏あり宗收、宗長又之れに次ぎて其の名世に高かり。然るに是等の詠出せる連歌は何れも本歌調の流派に屬し殊に和歌の師範家たる良基の奨励によりて興隆せしかば一旦陳套に歸きたる歌人的思想も再び新奇なる觀あり

しが是れ却りて遂に此の種の連歌をして衰微せしむる原因となりぬ剩へ宵柏等の頃より以後世の降ると共に形式上の規定いよく煩瑣なるものとなりしかば是れはた其の衰微を早からしむる原因となりけり。

宗祇が集録せる『新菟玖波集』には其の昔栗本が主張せし俳諧調の連歌は全然排斥せられて隻句ども載ることなかりしに荒木田守武山崎宗鑑といふもの出づるに及びて詞壇は再び俳諧調の連歌のために風靡せらるゝの止むを得ざるに至りぬ。守武と宗鑑とが俳諧調の連歌を主張するに至りし所以は全く右に云へるが如く本歌調の連歌に於ける規定の煩瑣に赴けるを厭ひしに依るべし。守武の著に『飛梅千句』あり宗鑑に『犬筑波集』あり是等の主とせる點は思想上の滑稽にあらざして單に縁語を用ひて修辭上のをかしみを企圖せしに過ぎずといへども亦見るべきものあり。徳川文學をして異彩あらしめたる俳諧は松永貞徳を待ちて始めて大成せしものなりと雖も其の先驅の功は此の二人に歸せざるべからざるなり。是れより彼の本歌調の連歌は次第に衰へ其の後紹巴といふもの僅に微光を明滅の間に取りとめしむるも一時的のわざにして程なく嘉例等の場所に儀式として稀に行はるゝ事ありしのみ。

連歌の外なほ當室町時代の文學をして異彩あらしめたるを謡曲とす。謡曲とは猿樂の能に用ふる歌曲の謂なり。此の時代の初めには鎌倉時代に引續きて田樂猿樂共に世上に行はしが後には猿樂のみ獨り盛なりき。當時大社の神事に従ひたる猿樂の諸座には伊勢に和屋勝田、主門の三座ありて大神宮の神事に従事し近江には山階下阪、比叡の三座ありて日吉の神事に従事し丹波に本座河内に新座攝津に法成寺座ありて加茂住吉の神事に従ひ大和に外山後の保生、結崎後の觀世、坂戸(後の金剛)圓満井(後の金春)の四座ありて春日の神事に奉仕せり。蓋し右の如き大社にては其の神祭の時神樂の外に田樂猿樂の技を行ふを當時の式例とせしかども田樂稍廢るゝに及びて猿樂のみ隆盛を極めたるなり。かくて應永の頃大和に結崎次郎清次といふものあり猿樂の巧者なりしかば足利三代の將軍義滿これを寵し同朋となして觀阿彌と呼びき。其の子に左衛門太夫清といふもの、また世阿彌と稱せしが子孫終に觀世の名を唱ふるに至りぬ此の父子從來の猿樂の能に田樂曲舞等種々の舞曲を折衷して古作を改竄し新曲を創作して只管之れが進

歩を計りしかば之れより節調大に整ひ世上の流行一層其の度を高め遂に將軍家の式樂となりて恰も朝廷に於ける彼の神樂、催馬樂などの如くなりき。此の頃の謠曲には初めの如く管に神の功德を讃する神事能のみにあらずして稍人事の複雑する現象を詩的想像をもて寫せるもあり。是れ其の模範は支那元朝の雜劇、傳奇に取りしこと新井白石が嘗て其の著『俳優考』に云へるが如し。

『俳優考』曰はく鎌倉の世の末、室町殿の代の始めに當たりて傳奇雜劇なといふこと元朝に盛に行はれき。其の代には我が國の人も彼の國へ行き彼の國の人も我が國に來り彼れこれ行きかよひしかば彼の國にするなる雜劇を我が國の人も見もし聞きも傳へしを田樂、猿樂を榮せざる輩やがて彼の國の傳奇なといふことこに倣ひて古にありし事の悦ふべく恐るべく樂むべく驚くべきことなどを歌ひもの、詞に作りなして歌ひ舞ひけるなり』云々

是に至りて從來の専ら痴態を裝うて滑稽なるをば特に狂言と引離して通常に所謂猿樂の能と區別せり。其の新曲の出でしこと亦此の頃を以て最とす。其の曲の數既に三百番の以上に及びきとなり。

是等謠曲は『謠曲作者考』などには元清、信光等の作と傳へたれども其は甚だ稀なることにして多くは單に其の節辭舞容を一定したるものなりき。されば其の作者は何れも他にあるべしと思はるれども今は湮滅して之れを知るに由なし。或はいふ、江口、山姥等は一休和尚の作といひ源氏供養は河上神主、高砂兼平は僧正徹、卒塔婆小町は寶性院宥快の作なりと、是れ併しながら正確なる徵證ありていふにあらず。されど當時文筆の業は一般に僧侶の間にのみ遺存せる頃なれば要するに釋氏の手に成れるものなること炳然たり。之れを其の思想若しくは言詞に就いて釐査するも亦當に彼等の作に係かゝりしものたるを知るべき證あり。

謠曲の趣向は大抵一樣の脚色にして或は巷談俗説を基とし或は歴史傳記の一事件若しくは一人物を礎として以て盛衰流轉の理を説かんとするものなり。されば諸種の謠曲を通じて渾然として貫流せる思想は一に佛教の以外に出づることあるなし。即ち現世は穢土にして未來は淨土なり然るに萬物は皆過去の罪業によりて此の穢土に執着し迷惑して長へに當來の苦を受く故に能く此の境を出でんと欲するものは偏に佛教の加護によらざるべからずといふにあり。此の故に

此の謠曲にありては男女僧俗を問はず禽獸草木に至るまで過去の罪業によりて迷執一方ならざるに能く旅僧が一編の回向に得度成佛し畢る類ならざるもの少し。其の大軀の趣向の往々にして千篇一律に傾く弊の見ゆるは此の如き思想を索として結構たたるに基くところ多かるべし。謠曲の結構評裁の支那の雜劇傳奇に類せるところあるは其の摸範の彼れより出でたるものあるに歸するや論なし。

文章は幾百篇の謠曲皆一様に論ずべからずと雖も幽婉悽愴なるもの其の常にして時に崇高なるものなきにあらざ。縁語の用法稍杜撰なることは煩はしと雖も能く莊重なる漢文體と典雅なる國文體の二要素に剩へ佛語を混用して自在に調和たたるは謠曲の文詞こそ其の上乗なるものなるべけれ。殊に其の最も麗しきは叙景の文と道行の文となり。されども是等華麗なる句の多くは之れを『白氏文集』『朗詠集』『源氏物語』『源平盛衰記』『平家物語』さては『萬葉』『古今』『新古今』等の成語成句を其のまゝに轉用し巧に綴合たたるに過ぎず。一篇の中には語るべき部分と語ふべき部分とありて語るべきは大抵當時の流行語を以てし語ふべきは大

方七五の調を用ふると多し是れまた謠曲を見んものゝ注意すべき點なるべし。さて謠曲は室町時代の文學をして異彩あらしめたる程の價值あるものなれば出來得るだけ詳細に研究せんこと必要なるべしと雖も予輩は他日別に徳川時代に發達たたる戯曲及び小説と共に委しく講述せんとする意なるを以てこゝには大方之れを略しぬ。讀者尙ほ親しく次に換ぐる「高砂」の曲に就き予輩が前に略述せるごとゝ比照して其の如何なるものなるかを推知すべきなり。

高砂

ヲキ次第今をはじめの旅衣、日もゆくすゑぞ久しき詞、そもくは是は九州肥後の國、阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり、われいまだ都を見ず候ふほどに、此度おもひたち都に上り候ふ、又よき次なれば播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候ふ、道行「旅衣、未はるく」の都路を、けふ思ひたつ浦の波、舟路のどけき春風も、いく日來ぬらん跡、未もいさ白雲のはるく、と、さしも思ひし播磨がた、高砂の浦に着きにけり。

シテツレ一壺、高砂の松の春風、ふき暮れて、尾上の鐘もひしくなり、ツレ「波は霞の

磯がくれ。二人「昔こそしはの。蒲干なれ。シテサシ」誰れをかも知る人にせん高砂乃。松も昔の友ならで過ぎ來し世々は白雪の積りくくして老の鶴のねぐらに殘る有明の春の霜夜の超き居にも。松風をのみ聞き馴れて。心を友と菅菟の思ひを述ぶるばかりなり。二人歌「おどづれは松に事問ふ蒲風の落葉衣の袖はへて。木陰の塵を搔かうよ。所は高砂の尾上の松も年ふりて。老の波もよりくるや。木の下陰の落葉かく。なるまで命なからへて。猶いつまでか生の松。それも久しき名所かな。ソキ岡里人をあひ待つところ。に老人夫婦來れり。いかに是なる老人に尋ねべき事の候ふ。シテ詞「こなたの事にて候ふか何事にて候ぞ。ソキ高砂の松とはいづれの木を申し候ふぞ。シテ唯今木陰を清め候ふこそ高砂の松にて候へ。ソキ高砂住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國をへだてたるに何とて相生の松とは申し候ふぞ。シテ仰せの如く古今の序に。高砂住の江の松も相生のやうに覺えとありさりなから。此尉は津の國住吉のもの。是なる姓こそ當所の人なれ。知る事あれば申させ給へ。ソキふしぎや見れば老人の夫婦一所にありなから。遠き住の江高砂の。蒲山國を隔て。住むと。云はいかなる事や

らん。ソレうたての仰せ候ふや山川万里を隔つれば。たかひに通ふ心づかひの妹背の道は遠からず。シテ「まづ案じても御覽せよ。シテソレ高砂住の江の松は非情のものだにも。相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として。年久しくも住吉より通ひ馴れたる尉と姪は。松もろとも。に此年まで。相生の夫婦となるものを。ソキいはれを聞けば。あもしろや。さてくさきに聞えつる。相生の松の物語を。所にいひおくいはれはなきか。シテ昔の人の申しは。是はめでたき世のためしなり。ソレ高砂といふは上代の萬葉集のいにしへのき。シテ住吉と申すは。いま此御代に住み給ふ延喜の御事。ソレ松とは盡きぬ言の葉の。シテ榮えは古今あひ同じと。シテソレ御代をあかむるたどへなり。ソキよくく聞けばありかたや。今こそ不審春の日の。シテ光やはらぐ西の海の。ソキかしこは住の江。シテこゝは高砂。ソキ松も色そひ。シテ春もソキのどかに。地四海波しづかに。國も治まる時つ風。枝を鳴らさぬ御代なれや。あひに相生の。松こそめでたかりければ。にや仰きでも。言もあるかや。斯かる世に住める民とて。ゆたかなる。君のめぐみぞありがたき。

「マキ岡」なほく高砂の松のめでたきいはれくはしく御ものがたり候へ地クリ
 「それ草木こゝろなしとは申せども花實の時をたがはず陽春の徳をそなへて。
 南枝花はじめて開くシテサシ然れども此松はそのけしきとこしなへにして。
 花葉時を分かず地四つの時至りても一千年のいろ雪のうち深く又は松花
 のいろ十かへりとも云へりシテかゝるたよりを松が枝の地言の葉草の露の
 玉心をみかく種となりてシテ生きとし生けるもの毎に地敷島のかげによる
 とかやクセしかるに長能が言葉にも有情非情のその聲みな歌にもるゝ事な
 し草木土砂風聲水音まで萬物のこもる心あり春の林の東風にうごき秋の出
 の北露になくもみな和歌の姿ならずや中にも此松は萬木にすぐれて十八公
 のよそほひ千秋の緑をなして古今の色を見ず始皇の御爵にあづかるほどの
 木なりとて異國にも本朝にも萬民これを賞翫すシテ高砂の尾上の鐘の音す
 なり地曉かけて霜はちけども松が枝の葉色は同じ深みどり立ちよる陰の朝
 夕にかけども落葉の盡きせぬはまことなり松の葉の散りうせずして色は尙
 ほ正木のかづら長き世のたとへなりける常磐木の中にも名は高砂の末代の

ためしにも相生の松ぞめでたき。

ロンギ地「げに名を得たる松が枝の老木の昔あらはしてその名を名のり給へ
 やシテツレ今は何をかつゝむべき。是は高砂住の江の相生の松の精地夫婦と
 現じ來りたり地ふしきやさては名どころの松の奇特をあらはしてシテツレ
 「草木こゝろなければども地かしこき世とてシテツレ草木も木も地わが大君の國
 なればいつまでも君が代に住吉にまづ行きてあれにて待ち申さんと夕波の
 みきはなる海人の小舟にうち乗りて追風にまかせつゝ沖の方に出でにけり
 や沖の方に出でにけりマキ歌「高砂や此浦舟に帆をあげて月もろどもに出で
 しほの波の淡路の島陰や遠くなるをの沖すきてはや住の江に着きにけり。
 後シテ「われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよ經ぬらんむつまじと
 君は知らずや瑞籬の久しき世々の神かぐら夜の鼓の拍子を揃へてすゝしめ
 給へ宮つこたち地西の海あをきが原の波間よりシテ「あらはれ出でし神松の
 春なれやのこんの雪の朝香がた地玉藻とるなる岸陰のシテ「松根によつて腰
 をすれば地千年の緑手に満てりシテ「梅花を折つて頭にさせば地「二月の雪こ

るもに落つ。

ロギン地「ありがたの影向や。月すみよしの神遊御影を拜むあらたさよ。シテ」げにさま／＼の舞姫の聲もすむなり住の江の松影もうつるなる。青海波とはこれやらん。地「神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。シテ」それぞ還城樂の舞。地「さて萬歳の。シテ」小忌衣。地「さすかひには悪魔を拂ひ。をさむる手には壽福をいただき。千秋樂は民を撫で。萬歳樂にはいのちを延ぶ。相生の松風。颯々の聲ぞたのしむ。

第二節 重要なる歌人

順阿法師

和歌の四天王

宗良親王

東常縁

當室町時代の和歌は大體よりいへば衰微の趣ありきと雖も既に本章第壹節においていへるが如く勅撰の歌集又は其の他の集に歌人の名を列らねたるもの其の數少からざりき。就中吉田兼好、冷泉爲之、二條爲定、全爲明、足利義詮、二條爲遠、宗良親王、慶運、淨辨、今川了俊、飛鳥井雅世、常光院堯孝、太田道灌、足利義尙、僧正徹、東常縁、西三條實隆等其の名最も世に聞こえたり。されども是等の歌人も大體既に衰微の

趣ありたる歌界の事なれば一々取りいでし評議すべき程顯著なる特色ありしにわらず。故に此處に只、順阿法師、宗良親王及び東常縁の三人に當代の歌人を代表せしめて聊か之れが略評を試みんとす。

順阿は下野守光貞の子にして後伏見天皇の御宇正安三年に生まれ俗名を二階堂貞宗と呼びき。二十四歳の頃叡山に入りて佛學を修め又高野に登りて感空と號せり。其の後京師に歸り四條の金蓮寺に住し更に順阿と改めき。順阿性來和歌を好みて藤原爲世に従ひ其の蘊奧を究めしが爲世歿するに及び其の己れを知るものなきを歎きて復歌を作らざりきといふ。其の頃兼好、慶運、淨辨と共に和歌の四天王の名ありき。順阿嘗て歌會に臨みけるに慶運また其の坐にあり題多くして詠者少かりしかば順阿慶運共に堪能者たる故を以て各六首の題を探りて詠することとなりぬ。志かるに順阿たま／＼所用あり題を分かちてのち其の坐を起ちて他に往きければ慶運戯れに其の題を取りて己が得たる題と相替へ己れは則ち順阿の得たる題六首を詠じて筆者に交附せり。暫くして順阿歸り來たり將にちのが題を探つて詠まんとするに疊に得たるものに異なれり。順阿驚くものか

ら徐に筆を執りて拙嗟の間に六首を詠じて之れを筆者に附しぬ。其の詠せしところを見れば巧麗能く尋常人の企及すべきにあらざ慶運すなはち之れを稱し且其の戯謔を謝しきといふ。彼れの歌は爲世を師としたる程ありて想の邊には斬新なるは少く只一首の聲調流麗にして繊細なる一方に傾けるもの多し。例へば

稀戀と云事を

わけわたる雲間の星のさのみなどまれになりゆく契りなるらん

千五百番

朝日かけにほへる山の櫻花つれなくきえぬ雪がとぞおもふ

といへるは頼阿みづからいかなる病中にも此の歌を吟ずれば心のはればれとなるといひける歌なるが其れだに思の上には指して賞揚すべき點あるとなし。其の他なほ

入道二品親王家五十首歌に、雉

月はなほかすみてのこるかた岡のあしたの原に雉子鳴くなり

といへるを見ても知らるゝ如く艶麗巧緻畫圖に似たる趣致はあるも奇抜なると

ころは更に認むること能はずされども當時以後は二條家の風一世を靡かし歌人大方かゝる風體を以て絶好の標準と爲せしかば頼阿の歌は草庵體と呼ばれて一派をなすに至れり今川丁俊の『落書露顯』に曰はく

「又近代は歌の聖の如くに頼阿法師をば人々存して草庵さかいふ家集のみ或はへつらひ或は盗みよむさもがらも侍るにや」

と。光嚴天皇いたく頼阿の歌體を愛して輒近の歌風衰へたるを回復せんとし貞治二年攝政二條良基と共に問答數篇を著はさしめ以て後世の龜鑑たらしめき。之れを『愚問賢註』といふ。頼阿また足利尊氏の招きに應ぜしとも度々に及びきとなり。後龜山天皇の元中元年三月十三日雙林寺において逝りぬ。齡正に八十四。其の家集を『草庵集』といふ其の歌體を草庵體といへるも之れに依るなるべし。其の外に『井蛙抄』といふものあり専ら詠歌の式例等を雜録す。また藤原爲明が『新拾遺集』を撰録せし時未だ果さずして薨せしかば頼阿繼ぎて戀の部以下を集成せりし由は既に大略記載したるが如し。四天王の中に慶運と淨辨とは稍々頼阿に劣るところあるべきか兼好は敢て頼阿に譲らずといへども彼れは寧ろ散文家と

して高名の人なれば今は略しつ。其の他の歌人は推して知るべし。

然るに其の頃順阿と稱、時を同じうして而も多少の特色を具へて一方に屹立せるものあり之れを宗良親王とす。宗良親王は後醍醐天皇の皇子にして母は藤原爲子といふ親王は花園天皇の正和元年に生まれしが年十歳にして僧となり尊澄と號し妙法院に住して三品に叙せられ天台の座主となりぬ。元弘元年八月帝笠置に幸するに及び尊澄御兄尊雲護王と與に僧兵を糾衆して佐々木時信と幸崎の濱に戦ひて之れを走らせしが門徒中敵に内應するものありて遂に捕へられ長井高廣の家に拘せらるゝと二年に及びぬ。其の後讃岐の託間に遷りしが四海一時平定に歸せしかば尊澄四國の兵を率ゐて京師に歸り再び座主となり建武二年二品に叙せられき。延元元年足利尊氏叛して京師に迫るに及び父帝延曆寺に幸し尊澄を一品に叙し以て僧徒を督勵せしめつ。座主の一品に叙せらるゝは此の時を始めとす。されども是れより南朝常に利あらず父帝憂憤の中に崩御ましまさしかば尊澄遺憾やる方なく遂に髮を蓄へて名を宗良と改め上野親王或は信濃宮と稱し以て宗廟を回復せんことを謀りぬ。後村上天皇即ち親王に勅して中務卿を征

東將軍となし四方の賊を討せしめつ。親王即ち遠江に駿河に甲斐にさては信濃美濃越中越後に轉戦して只管ら平定を努むといへども時我れに利ならず流離窟遁備に艱苦を嘗めき。さる程に後龜山天皇の末年に至りては南朝愈々衰微し詔勅も次第に行はれずなりしかば親王は文中三年吉野に詣り天授三年遂に長谷寺に入りて復僧と爲り尋いで信濃に往き後また河内の山田に寓しき。弘和元年十二月新葉和歌集を奉りぬ之れ嘗て撰選しけるを後龜山天皇聞こしめして勅撰に准ずる由仰せ下されしかば重訂して奉れるなり。此の時御年七十と聞こえしが其の終る所を知らず隨うて終焉の年月また知るに由なし。其の家集を『李花集』といふ。かゝれば親王の歌は

春毎にかはらぬ花を見るにもいとわうつろひ果てたる身のを
しき思ひしられて

老木まで花は咲きけりうたてなど我が世の春のすくなかるらん

住みあらしたる前裁の中に撫子の一むら花さきて見えけるに

今さらに塵をもたれか拂ふべき荒れにしゃどのとこ夏の花

の如き又は

萩の風の吹きける比よみ侍りし

もの思ふ人のこゝろぞ萩の葉に風も吹きあへぬ秋を知りける

の如く見るもの聞くものにつけて其の悲憤の胸中を露らざるもの稀なり。故に表面には悲憤の見えざる歌にても

中院准后歌よみて吉野より見せ侍りし中に九重の御階の櫻さ

ぞなげに昔にかへる春を侍つらんとありしそばに書き加へけ

る

きみすめばこれもみはしのさくら花むかしの春にかはらざるらん

の如きなほ裡面には明らかに哀切なる情感の迸るを見る。親王の詠には措辭婉曲纖巧なるもの絶えてなく言々句々直ちに其肺腑を吐露して物に寄する概あり。されば一見したるところは平語めきたる趣ありて膚淺なるが如く思はるゝとあるも反覆吟誦するにつれて同感の情を衝動せざる者少し。此點においては所謂二條家の風の一讀趣味津津たるが如く覺えて漸次に膚淺に赴くとは方に反對の

地位に立てるものといふべし。蓋し親王の境遇彼の如く其の精神はた常に勤王の一途にありけるを以て其の詠歌の此の如く北朝の祿を食みて優遊せる歌人輩のとは其の趣の異なるどころありしも自然の數なりとす。親王の詠歌は以て『新葉和歌集』を代表せしむべく、やがて又南朝に於ける歌人の詠を代表せしむるに足るべき也。

其の後今川了俊(二九八五—二〇八〇)飛鳥井雅世(二〇五〇—二一〇五)常光院堯孝(二〇五一—二一一五)僧正徹(二〇四一—二一一八)等輩出して其の名世に聞こえたりと雖もさしたる特色の評すべきものありしにあらざ將軍義尙(二一三三—二一四七)の如き亦然り。太田持資(法名は道灌)(二一〇五—二一四六)出づるに及び其の聲調

朝花

あらし吹く高嶺は雲の色かへて花より明るるあさくまの宮

の如き又は

勝元朝臣短慮不成功といふ昌黎の作りし詞など消息のはしに書

きつけて此の心ばへを問ひ給ひしかば

いそがずばぬれざらましを旅人のあどよりはるゝ野路の村雨

といふが如き或は雄壯或は清新當時に卓越するものありきと雖も其の身武人なりしかばこれはた未だ親しく歌界に馳逐して一世を動かすに足らざりき。其の集を『暮景集』といふ後世其の歌躰を慕ふもの激賞して措かず遙に將軍實朝の風骨を得たるものとなせり。

太田道灌と時代殆ど相前後して東常縁(二〇六一—二一五四)出で籍を武人に列せるなど亦頗る道灌に類するところあり然るに常縁が歌界に及ぼせる影響は遙に道灌に超えたるものありけり。常縁は美濃の人父を益之といふ母は藤原氏常縁は其の三男なりき。祖先は千葉介常胤の六男胤頼といへり。胤頼嘗て其の食邑下總の國香取郡東莊に住せしより東氏を稱するに至れりとぞ。東氏の家は世々和歌を嗜みき。即ち胤頼の子重胤は藤原定家に就いて和歌を學び重胤の子胤行は承久二年初めて美濃國郡上郡篠目城を築き藤原爲家の女を娶り古今傳授を受けて後に素退と號せり。素退の曾孫益之は則ち常縁の父なるが當時の歌人今

川了俊、飛鳥井雅世、常光院堯孝領阿の僧正徹書肥と號す招善説等と相交り素明又は平田或は格物鐵壁など號し和歌を以て其名世上に聞こえたり。されば常縁は父の教訓と又父の交友等より傳習せる事柄とが如何に其の身をして益せしめたるどころ多かりしかは容易に推測するを得べし。其作『東野州聞書』を唱ふるものを見るに招月庵へ参りてといひ或は常光院云ひけるはなど書けるところの多きは明らかに此の推測を立證するものなりと信ず。常縁兄の後を承けて家を繼ぎ下野守に任じ幕府に昵近せり。康正元年千葉氏分かれて兩流となり下總國之れがために擾亂に及びしかば常縁即ち足利將軍義政の命を奉じて之れを鎮め以て東莊に居りぬ。さる程に應仁二年京師大に亂れ山名宗全兵を遣はして郡國を侵掠し郡上城を抜き齋藤妙椿常縁集には念念ありをして之れに據らしめしかば常縁遙に變を聞きて憂憤措く能はず父素明のために冥福を修め僧を供養し和歌一首を詠じて之れを上りぬ。曰はく

あるが中にかゝる世をしも見たりけん人の昔のなほも戀ひしき

と。妙椿も亦當時和歌を以て世に聞こえしものなりければ偶々此の歌を聞くに及

ひ感吟之れを久うし曰はくこれ我が和歌の友なり今山東に漂居し城邑を失ふ憤
 懣察すべし信義を友に失ふべからず願はくは常縁和歌を詠じて吾れに贈らば即
 ちわれ彼の邑を復すべしと。常縁之れを聞き濁世亂邦といへども猶此の人あり
 と乃ち和歌十首を詠じて贈りぬ。かくて明年の春に至りしに和歌贈答の事幕府
 に聞こえしかば將軍令を常縁に傳へて其の子を下總に止めて京に歸らしめ五月
 更に妙椿をして常縁の舊邑を復せしめき。常縁の名是れよりますます世に聞こ
 ゆるに至りぬ。文明三年十二月古今和歌傳授を宗祇に傳へき。初め宗祇歌道を
 常縁に問ふや常縁和歌を以て之れに答へき。

いまさらしに身のをこたりぞ知られける問はずばいかに敷島の道

後土御門天皇常に常縁の名を聞召しけるが詔を下だして常縁を美濃より召して
 和歌再興の道を説かしめ給ひぬ。常縁乃ち京師に朝して留まること三年歌道を
 諸家に傳へて其の邑に還りき。准后藤原政家右大臣藤原公敏將軍足利義尙等皆
 常縁の教ふるところたり。明應三年(一一五四)逝りぬ年九十四。法名を素傳と號
 す。常縁が宗祇と贈答せるところ『東野州消息』あり又歌集あり世に傳ふ之れを『常

縁集』といふ。前に引用せる『東野州聞書』と唱ふるは歌道に關する雜錄なり。

それ常縁が武人の身にして歌界に重きを致し、こと斯くの如し。されども其の
 詠歌はさまで俊秀なるところありとも見えす前に掲げたるにても既に知らるゝ
 如く多少真情の流動するものある外、聲調平板にして着想はた常套なるを免れざ
 る觀あり。例へば尙ほ

夏月

いりあひの鐘聞きすて、見るほどもあかずかたふく夏の夜の月

島雪

すみよしの松のあらしの音さえて淡路の島に雪を見るかな

の如きを見ても知るべし。されば常縁の斯界に尊重せられたる所以は主として
 彼れが古今傳授の如き歌道の舊儀典例に通ぜりしによるか、其は兎もあれ之れに
 よりても當時如何ばかり歌界の衰微せしかを知るに足るべし。

常縁より少しく後れて冷泉政爲(一一〇七—一一八三)後柏原天皇(一一二四—一一
 八六)西三條實隆(一一一五—一一九三)等最も世に知られたり。政爲に『碧玉集』後柏

原天皇に『柏玉集』實隆に『雪玉集』といふ家集あり世に三玉集と呼ばれて珍重せられき。就中『雪玉集』最も行はれぬ。實隆は内大臣公保の次男にして其の家世々公卿の班に列りき。長祿二年從五位下侍從に任ぜられ遂に正二位内大臣に至りぬ。永正十三年薨髮して僧照全刺斗に就いて佛戒を受け號を曉空と呼び又耕隱刺斗ともいひき。之れより常に緇衣を着て諸國の勝地を探り遂に高野に至りぬ。此の行『高野參詣日記』の著あり。當時坊間書籍に乏しかりしかば實隆自ら司馬遷か『史記』を謄寫せりきとぞ其の精勵思ふべし。實隆嘗に和歌を能くせしのみならず又詩賦にも巧なり。其の歌の風姿多くは纖麗能く當時の風を代表するに足る。家集及び『高野參詣日記』の外『源氏細流抄』の著あり。其の子公條二一四七―二二二三にはた歌文に長じたりき。其の著書に『石山紀行』『吉野詣記』『源氏明星抄』等の名稱高し。

第三節 重要なる連歌師

當時高名なる連歌師

二條關白良基

宗祇法師

荒木田守武及び山崎宗鑑

當代に於ける連歌は文學史上前後無比の流行を極めたりし事とて單に連歌のみを以て其名聲の世上に噴々たりしもの殆ど枚擧するに遑あらず。今其の中の最も盛名ありしものゝみを取り出でんも之れを始めにしては善阿、順覺、救濟、信照、良阿、二條關白良基公等あり是れと大方時代を同じうしては周阿、梵灯、心敬、宗砌、兼載、智蘊等あり稍下りては宗祇、肖柏、宗長、宗收、荒木田守武、山崎宗鑑、里村紹巴、全昌此の徒前後相繼出せりき。されども是等多數の連歌師を擧げて悉く評論せんは、かゝる略史の到底能くすべきにあらず且は又精密なる批評にあらざるかぎりは其の特質を指示せんことも頗る難事なるを以て予輩は其の中に就いて唯四人のみを掲げて之れが略評を物せんとす。連歌の改革主唱者若しくは獎勵者として二條關白良基公之れが大成者として宗祇法師、俳諧調の唱道者として荒木田守武及び山崎宗鑑即ち是れなり。

二條良基公は藤原師輔公の後裔にして關白左大臣道平公の子なり。後醍醐天皇の御宇、元應二年に生まれき嘉曆二年八歳にして元服を加へて禁色を聽され正五位下に叙せられ權中納言に累遷せり。後醍醐天皇西國に遷幸せさせ給ふに及び

公は前任のまゝ北朝の光嚴天皇に仕へまゐらせしが後醍醐天皇御歸洛あらせられてのち又仕へ奉り建武二年權大納言に榮轉したりき。かくて後醍醐天皇再び吉野に遷らせ給ひ皇統愈南北兩朝に分かるゝに至り公は猶都に止まりて遂に光明、崇光、後光嚴、後圓融の四天皇に歴事し内大臣、左右大臣を経て氏の長者と爲り牛車兵仗を聽され太政大臣從一位に至りぬ。天授二年更に三宮に准ぜられ弘和二年四月攝政となり元中四年職を辭し五年四月また攝政となり六月攝政を罷めて關白を拜し即日之れを辭し奉り尋いで逝りぬ。年六十九。諡號を普光園院といふ。

公は博覽強記にして文才あり『扶桑拾葉集』を披けば其の十四の卷上下貳冊は悉く此の公の著作なるを見ても其の程知らるべし。和歌また二條家の流を繼承して其の蘊奥を究極せり。されども其の歌既に二條家の流派なれば今更めて其の如何なる風躰なりしかは云はずとも讀者の既に推測するところならん。歌學に關する著に『近來風躰抄』あり『愚問賢註』あり『筑波問答』ありき。『近來風躰抄』は近世に於ける和歌の風躰を批判せるもの、『愚問賢註』は頓阿法師と歌道の奥義を論議して

記録せるもの既に云へるが如し。『筑波問答』は全く連歌に關する公の意見を知るべき唯一の好材料にしてまた斯界の好指針たりき。別に古來の連歌を集めたる書に『菟玖波集』といふもの二十卷あり、これまた當時斯界の好摸範として世に稱へられたるのみならず勅撰和歌集に準ずべき勅命を賜はりき。其の外著書に『御稷記』『百寮訓要鈔』『柳葉日記』小島の口ずさみ『貞治御鞠記』『諒閣記』『大嘗會記』『雲井御法』『白鷹記』『山鳥の慰』『魚鳥平家』『小夜のぬさめ』等あり。其の祖先師輔公以來世々攝關たりしを以て其の家もと舊記に富めるが上に公汎く諸家の秘書を借覽して謄寫せしめしかば奇書珍籍の秘して世に傳はらざるもの多く之れを藏しき。其の家世々に藏するどころの家記を世に『二條殿日次記』と稱せり。故に朝廷の儀式武家の禮法等人皆其の家に就いて之れを質したりとぞ。其の著作の公事儀禮に關するもの多かるもまた之れに依るなるべし。また公常に好みて庭園を修め池を龍躍といひ橋を縁場といひ又御榻藏春亭、洗暑、聽松の諸閣、觀魚臺、古靈泉、梅香、水明等の樓榭を營み邸宅頗る風致を盡くしりたといふ。

其基が其の『筑波問答』に述べたる説は從來の歌學書に云へるとは稍、其の趣を異に

して多少連歌道に於ける當時の意見を代表するものがあるが如し。彼れは先づ連歌の由来を説き更に其の効用を擧げんとして「連歌は國の政事セツゴノカミの助けなどに侍るべきなど申す人のあるはあまりの事にや」といふ問に答へて

かへすぐも事あたらしきおん尋れかな

とて論なき旨を明言し次に「連歌は善事にてあれば此の世一ならず菩薩の因縁に侍るべしなど申すはあまりの事にや」といふ問には

おほかた過去現在の諸佛も歌をさなへ給はずさいふ事なし。ありゆる神佛いにしへの聖たちも歌にも多く群るをみちびき給へば今更申すにも及ばず。連歌は殊に心ありん人もひ入りてし給ふべきにや

と答へて其の然るべき由を明らかにしぬ。連歌を以て國政を補佐する効ありとし又は菩薩の因縁に協へりとするは一切の萬物を擧げて厚生利用の目的ありとするにおなじく共に拘泥附會の説たるを免れずと雖も當時の人の斯道に關する信仰は全く此處にありて連歌の位地もこれがために高められし事あるは忘るべからざる事實なりとす。其甚更に一篇の變化に着目して

おほかた秀逸の體は定まれる事なればいつもうらはしき姿をこそすべけれ其時の好士によりてちかかはる事もあるべき也。千句のはじめの一二百句などをばちかおもせてし侍る可にや、當座の百句は如何程もうきくさきめかして面白きやうにすべし。千句になりぬれば發句よりたけたかく疵もなき連歌まことしきをしきくさし侍るなり。又たゞの連歌にも一の懷紙の面の程はしきやかの連歌すべしにてにわはもうきたる様なる事をばせぬ事なり。二懷紙よりさきめき句をして三四の懷紙をば殊に逸興あるやうにし侍る事なり。樂にも序破急のあるにや。連歌も一の懷紙は序、二の懷紙は破、三四の懷紙は急にてあるべく胸にもかやうに侍るとぞ其の道の先達は申されし

といひ發句の特に肝要なる所以を説きては

當道の至極の大事發句にて侍る也發句わろければ一塵皆けがる。されば堪能宿老にゆづりて末座は斟酌あるべき也。よき發句は皆同類をのがれてあたらしき又侍りがたし、かへすぐ道の至極にて侍る也忽せにし給ふべからず。先發句のよきと申すは深き心のこもり、詞やさしく、けだかく、あたらしく、當座の儀に叶ひたるを上品と申す也一も欠けたらんはうらはしき秀逸にてはあるべからず

といひ脇句に付いては

脇句は發句をうけてする事なればさのみ心こもる事はあるまじけれど是れもあまり

に平韻ならんはわろく只するく、と詞やさしく心あらん事をし給ふべき也、わづらはしきやうなる脇句はかへすく、わろき事なり。たとへば『万葉』などの長歌に後に反歌さて長歌の心をうけて三十一字の歌を心よみ添へ侍るにや、それは長歌の心をうけて而もついでまやかにする事也。脇句もさやうにや侍らん。但發句のおなじ心なる様なる事にわろく侍る也別の事をのかわやうにすべきにやとぞ古人申し侍りし

と説きぬ。その他、連歌は前念後念をつがず又盛衰憂喜のさかひをならべて移りもてゆくさま浮世のありさまに異ならず昨日と思へば今日にすぎ春と思へば秋になり花と思へば紅葉にうつろふさまなどは飛花落葉の觀念もなからんやといへるは連歌の體さながら宇宙の万象に似類するところあるより下だしたる見解にしてやがて一篇の變化各句の推移を貴ぶを見るべし。されども其基の期望したる一篇の變化は森羅せる自然の物象千變萬化しておのづから統一あるとは異なりて早く既に連歌の鑄型を與ふるが如き弊あるを見る。一の懐紙の而の程はまどやかの連歌をすべく二の懐紙よりさしめき句して三四の懐紙をば殊に逸興あるやうすべしと云へるは樂に序破急あるが如く連歌をして最も趣味あらしむべき最要の結構なるべしと雖も其基のいへるところは唯一の結構と思惟する傾向あるにあらずや。縦令ひ其基の意はこれを唯一の結構と見做せるにあざりしも後世の連歌は全く此の鑄型によりて結構せられ遂にまた見るべきものなきに至りき。况や連歌の稽古は天才あるものも尙忽諾に附すべからずと説きながら其の思想の範圍を『万葉』『日本紀』『風土記』さては『源氏』『伊勢』等の物語『古今』以來の撰集にのみ限りて普く詩材を天地間の萬象に求むべき所以に説き及ばざりしをや。予輩は實に其基の『筑波問答』に云へる説は斯道に於ける後世の證言となりしを認識すると同時に來者をして多少誤解せしめしどころあり是れがために連歌をして遂に短歌と同じく持法のものとならしむるに至りしを信ず。

『菟玖波集』は後光嚴天皇の御宇文和五年に撰集せる者にして、やがて勅撰に准せられき。卷の數すべて二十卷。此集は日本武尊の筑波の詠より代々はじめの連歌を網羅して當時の世に至りぬ。世の連歌に志せるもの彼の『筑波問答』と共に重寶とせるのみならず予輩が代々の連歌の變遷を推究するとを得るも全く此集のあるに因るなり。されども其の集録せる連歌は其の古今の結構に差異ありしに拘はらず即ち上古の連歌は單に長短二句を連接し鎌倉時代以後のは百韵五十韵等

を一篇の首尾とせるもの多かりしに關せず共に只長短二句のみを録して百韻五十韻等一篇の關係を示さざりしは遺憾なり。それ連歌の集は百韻五十韻等一篇の關係に著意せずして只長短二句を録せるもの此の集のみに限らずと雖も此の集が後世の模範となりしだけ予輩は此の集に對して是れを惜まざばならず。されば既に云へるが如く連歌の趣致は主として一篇の變化打越去嫌等の如何にありと雖も世々の連歌の後世に殘留せるもの大方只長短二句の關係のみに限るとすれば讀者もこゝには此の關係を推究するを以て姑く満足せざるべからず。而して此の『菟玖波集』に見えたる連歌の風姿風情は集録せる旨意單に古今の連歌を後世に傳へんとするにありて傑作を撰擇せるにあらざるが故に玉石同架の觀あるは云ふまでもなき事なりとす。別菴「應安新式」と唱ふるは良基が其の師救濟等と議して連歌の法式を規定したるもの其の旨意はた一篇の變化を企圖するにありき。後世連歌の法式は多少追補改竄するところありきと雖も大方其の標準のこゝに出でざりしは稀れなり。

良基の連歌は其身もと和歌の師範家たる二條の流派を承けしかば長短二句の關係も自然短歌の上下句の關係を有するを免れざりき。例へば

家の千句の中に旅のたもとのつゆとこそなれといへるに

ふるさとに思ひもきたるひとありて

と附くるが如き又は

文和二年六月世の中志づかならぬ事ありて美濃國小島と

いふ所へ行宮にて侍りけるに同月彼處にて連歌し侍りし

にをしまの里はたい松の風と侍るに

旅にゐるみのゝをよまのうき秋に

と附けたる如き共に其の一斑を知了するに足るべし。されば其の風體も大方二條流の短歌の如く優美瑰麗を主とせしのみにて思想は平凡なるものなりき。故に予輩は彼の連歌就中長短二句の關係を記せるものを見たるのみにては彼が何故に斯道に於ける中興の祖と仰慕せらるゝに至りしかに就いて疑訝の念なくばあらず。蓋し彼れの『筑波問答』と『菟玖波集』と『應安新式』とは能く彼をして後世の欽慕を博せしむるに足るべかりきと雖も彼れの詠はた一篇の變化打越去嫌等の工

夫に妙なるところありしにあらざるなきを知らんや。

其基の薨後には宗祇(一一二二)心敬(二〇六七—二一三六)猪苗代兼裁(二一三〇—二一五八)等の諸名家續出地を騷擾益繁榮の運に會せしが宗祇法師出づるに及びて空前絶後の偉觀を呈したりき。宗祇は紀伊人^{或は近江の}在田郡藤並村の人、俗姓を飯尾と稱しき。稱光天皇の御宇應永二十八年(二〇八一)に生れつ。幼にして律僧となりしが性甚だ和歌を好みしかば當時心敬の佳名ありしを聞き京師に出で就いて之れに學びぬ。齡稍壯なるに及びて猪苗代兼裁に従ひ連歌の風韻を問はんと欲して其の門下に到りぬ。兼裁其の年齢を問ふ曰はく三十歳と。兼裁曰はく惜いかな子の齡己に闌けたりもし子にして弱冠ならば則ち我れ能く斯道の妙手たらしめんものを連歌は一紀の功を積まされば其の奥に到ること能はざるなりと。宗祇曰はくさらば我れ能く之れを成じ得ん勉勵十年日に夜をつがば豈に一紀の晩學は之れを償ふを得るにあらざやと。兼裁嘆じて宗祇の器必ず名を成すあらん我が及ぶところにあらざといひしが果して其の藹奥に達し大名を専らにするを得たり。但し宵柏の傳ふ

る説によれば宗祇の成功は宗祇に負ふところ多しといへり。或は緋紳の筈に列り或は同志の需に應ずるに一座宗祇に及ぶものなく皆推して宗匠と爲せしが朝廷また花の本の號を賜ひて之れを稱しき。花の本の號蓋しこゝに始まりぬ。さて宗祇が嘗て東常縁に就いて和歌を學び古今の傳授を許されし由は既に記載したることあれば讀者の知らるゝところならんが彼れは又卜部某に従ひて神道の旨をも究めき。平素旅行を好みて四方に漂遊し曾て定居することなし。或時比叡山に上りて一室を結び號して種玉庵とも又自然齋とも呼びぬ。されども又程なく一笠一杖の向ふところに任じ連歌の會あるを聞くときは則ち飄然として來たり又飄然として去りきといふ。文明十二年三月武藏國隅田川の邊に寓して終夜人と連歌の道を語りし事あり其の記を號して『吾妻問答』といふ。古今に於ける連歌の風體の變遷異同を論じ或は本歌のとり様源氏の付様など其の他種々の心得を採録せり。其のいふところ委曲周匝を盡くすと雖も其基の『筑波問答』に比較すれば稍末に流れて法に拘はる弊あり。此の年六月また筑紫に遊びぬ其の紀行を『筑紫の道の記』と呼べり。宗祇東は金華の嶺を攀ぢ西は紫塞の遠きを窮め北は

越嶺の雪を踏むなど足跡殆ど天下の名區にして印せざるはなかりき。文龜二年信濃より關東に趣き鎌倉に滞留しまた駿河に到りぬ。其の弟子に宗長二一〇八一二一九二といふものあり駿河國志太郡島田驛の産なり宗祇の老いて且遠僻の地にあるを想ひて之れを尋訪しき。かくて宗祇は七月晦日相摸の湯本の里に宿せしに病發りて遂に客舎に歿りぬ。行年八十二とぞ聞こえし。辭世の咏あり

はかなしや鶴の林のけむりにも立ちおくれぬる身こそうらむれ

宗祇或時近隣に難産ありけるに宗長と共に其の屋に臨みて摩珂般若はらみ女の奇特かなど唱へけるに宗長之れに和して「一二もすんでさんのひもどく」といひければ男子出生しけるとなり。宗祇また常に鬚髯を美にしけるが嘗て獨り深山を行きけるに偶山賊あり一絲を遺さず彼の所有を奪ひ剩へ其の鬚髯に及ばんとせしかば其の用を問ふに拂子に作りて市に鬻がんと答へければ宗祇すなはち悵然として

わがために拂子ばかりはゆるせかし塵のうき世をすてはつるまで
と詠じ以て山賊の難を免れたる事ありきとぞ。

宗祇の連歌は其基の詠とは異なりて其の長短の各句は孰れも一句毎に獨立の意味を成して而も前後相連接せるものなり。而して宗祇の詠の最も妙なるは着想常人の意表に出で、さながら連歌其のものゝ要求に適合するが如き天才を有するにあり。其の『獨吟千句』の中に就いて數句を引用してこれが例を示さん

なべて世の風ををさめよ神の春

花もたむけのゆふかくるころ

旅立てばかすむ山にもみちありて

かりぬのそらに近き明けがた

誰が里のかねかどばかり聞こゆるらん

霜にふけゆく月のさやけさ

枯野にもなほかげたのむ虫の聲

一むらすゝきちりなつくしそ

秋風やわがそでのみやどらまし

なにどかこえん山ふかきみち

はるかなる高嶺を見れば雲の居て

浦わの波の立ちかはるゝと

措辭も亦輕妙苦作の跡あるを見ず。若し強ひて其の難を指摘せば思想の範圍狹隘にして和歌者流と多く異ならず聲調はた壯大の氣乏しく稍軟弱の風あること是れなり。因にいふ宗祇の如き非凡なる名家の手になれる連歌といへども其が本來の性質として全篇を貫通する意味もなく又趣致もなく只前後長短句の關係推移發展の妙あるのみ其基の所謂當座の逸興を催すまでのものにして一個の大文學としては未だしきところあるは惜しむべきこと也。

宗祇の著は以上に挙げたるもの外『新菟玖波集』あり其基の『菟玖波集』に倣ひて其の以後の連歌を集めたり。『宗祇自讃歌集』といふは後鳥羽天皇が鎌倉時代の高名なる歌人十人をして各自讃の歌十首宛を奉らしめたる事ありし歌の評註なり。

『愚句老葉』は宗祇みづからの連歌を自註せるを宗長の更に評註せるもの『宗祇初學抄』は連歌を詠ずるものために四季折々の景物の分別すべきを説き『老のすさみ』は宗祇以前の連歌の傑作をえり出で、評註せるものなり。其の他尙『山口記』白髮

集『宗祇法師前句付』『宗祇和歌集』『宗祇法師和歌の言葉』『豆爾葉大概抄』等あり以て今世に傳はれり。

宗祇の弟子に牡丹花宵柏(一一〇二—一一八六)といふものありき太政大臣源具通の後裔なり。年少にして世態を好まず粗、奢藉に涉り専ら和歌を嗜み又連歌を能くせり。攝津池田に住居し宗祇に就いて古今の傳授を受けき。其の著に『伊勢物語宵閉抄』とて『伊勢物語』を註釋せるものあり文龜二年勅命を奉じて又『新式今按』を編述し以て連歌に關する法則を追訂せり。是等宗祇宵柏宗長等と殆ど踵を接して世に出で俳諧調の連歌を再興して世に大名を博せるを荒木田守武及び山崎宗鑑とす。

荒木田宗武は後土御門天皇の御宇文明五年(一一三三)に生まれき。伊勢内宮の神官にして園田長官と稱せり。守武夙に宗祇等と交誼を修めて和歌連俳に名ありき。ある時守武連歌興行の席に臨みけるに會合せるもの普法師の人々のみなりければ御座敷を見れば何れもかみな月と唱へしに宗祇すなはちひとり時雨のふる鳥帽子着てと附けしかば一座大に興を催しきといふ。守武また童子の教誡の

ために一夜百首を詠せしことあり一首毎に世の中の三字を冠せしかば世に是れを『世中百首』といひ又尊重して『伊勢論語』とも呼びぬ。別著『獨吟千句』は其の巻頭を「飛梅やかるくしくも神の春の發句を以て端を開きたれば或ひは『飛梅千句』ともいへり。かくて後奈良天皇の天文十八年八月八日享年七十七にして逝りぬ。

山崎宗鑑は近江の人、本性は支那、佐々木義清の裔なり。通稱を彌三郎といひ本名を範重一に範光に作ると呼びぬ。寛正六年(一一二五)後土御門天皇御即位の年に生まれ稍と長ずるに及びて當時の將軍足利義尙に仕へき。延徳元年六角高嶺近江の甲賀山中に據り命を拒みし時義尙義熙と改名之れを伐ちて鈎里に薨去せられしが範重將軍に從うて陣中に在りしかば君臣の別れにまのあたり人生の無常迅速なるを悟り遂に致仕して剃髮し攝州尼が崎に住し後ちまた城州山崎の竹林に移りぬ。致仕せし時齡僅に廿五歳に過ぎざりき。是れより號を山崎宗鑑と稱せりとなり。宗鑑少時僧一休の愛するところとなり朝夕之れに給事せしかば能く一休の風骨を得て滑稽洒落の趣きありき。其の山崎に移るに及び専ら俳諧調の連歌を弄び

て風月を蓬窓の中に賞し或は客を引見して歌書を講ずるを樂みとせり。宗鑑また書法に達し妙技を盡し、かば支那人或は之れを賞揚して金佛を瑠璃盤上に載するが如しと謂へり。居常油筒を嚙きて口を糊し且暮錢十孔を以て食に換へ居室只一藥罐を蓄へしのみ。餐額を掲げて云へらく「上客は立ちどろにかへれ中客は一日にして還れ下客は一宿せよ」と其の素行の程大方推測せらるべし。當時連歌道においては宗祇の名四方に噴々たり宗鑑初めて彼れの右に出でんと欲せしかども到底其の企及すべからざるを見て俳諧調の一派を再興し遂に斯界に異采あらしむるに至れりといふ。宗鑑一日宗長と俱に内大臣西三條實隆を訪ふと常に愛翫しける烟蘭カキツバタを截りて贈りぬ。實隆之を見て戯れに手に持てる姿を見れば餓鬼つばたどて打興しければ宗長のまんどすれば夏の澤水と脇句を附し宗鑑ウチナハに追はれていづち歸るらんと第三句をぞまたりける。晩年西國へ赴き歸途讃岐の琴平山の麓に留まり假居して一夜菴と號しき。天文二十二年癰を患ひて歿りぬ。年八十九。其の著を『犬筑波集』といふ。辭世の一首は頗る宗鑑の人となりを説明するものあり

宗鑑は何處へと人の問ふならばちとようありてあの世へとら。此の辭世の歌といひ彼の筈類といひ何れも彼れの洒々落々たる性質を表せざるはなし。かゝれば傳には宗鑑は所謂本歌調の連歌を以て宗祇の右に出でん事を難しとして俳諧の道に入れりといへども此の人元來不羈洒落なるが故に當時の連歌の繁雜なる拘束あるを煩はしと思ひて法式未だ自由なる俳諧に心を委ねしにはあらざるが。守武が所謂本歌調の連歌を捨て、俳諧調を取りしは全く此の主意に基けりと見ゆ。曰はく

「獨吟千句の立願ありければ打粉れ又は成りがたく過ししけるも空おそろしくいかい
はせん之餘りに御園を作るべきに一ならば本歌二ならば俳諧のあらいまいにてあはれ
二なれよ念下ければ二なりぬ有難き限りなく云々

かくて守武と宗鑑とは同じく本歌調の連歌を捨て、俳諧調を取れりきといへども守武は宗鑑に比ぶれば其の風体頗る異なり彼れは優美にして上品に此れは粗豪にして野卑なる趣あり。宗鑑の『犬筑波集』の中には殆んど卑猥讀むに堪へざるも見ゆるに守武の『飛梅千句』には決してさせる難なし。されども守武の俳諧も宗鑑のも其の滑稽諷刺極めて單純にして未だ讀者を絶倒せしめんことは難

し。即ち其の滑稽は單に一種の地口の如く若しくは落辭の如くにして眞にをか
い、きものにあらず又世俗を警醒罵倒せんとする諷刺的意味を有するものにもあ
らざるなり。否、彼等の滑稽諷刺とするところは其の思想の上にあらず主として
修辭の邊のみに存するが如し。例へば

あつたら味柑くさらかしぬる

『犬筑波集』

正月の茶の子にことをかきばかり

花よりも鼻にありける句ひかな

『飛梅千句』

月はあぼろにふくるあゝあゝ

の如きを見ても言語上縁語又は係辭を以て平凡野卑なる思想を表白したるに過
ぎざるを知るべし。予輩日本文學のために云はば寧ろ此の種の滑稽諷刺を以て
大名を博せしものあるを耻ぢずばあらず。されども此の種の滑稽諷刺にせよ若
し守武と宗鑑と其の時想何れが豊富自在なりしかと問はば勿論宗鑑を推さざる
べからずと信ず。守武宗鑑共に其の發句古雅にして人口に膾炙せるものあり。

元日や神代の事も思はるゝ

守武

摺小木に知らるな製の花ざかり

宗鑑

笠を着て雨にも出でよ夜半の月

宗鑑

守武宗鑑以後俳諧調の連歌甚だ流行し江戸時代に入りて松永貞徳出で、其の極盛に達せり。かくて江戸文學の一異彩たる俳諧は全く守武宗鑑が此の種の先驅によりて一方に旗旛嚴然たるを得たりしなり。讀者須らく之れが研究を忽諸に附することなくば可なり。

第四章 散文

第一節 散文界の概況

此の時代の散文は若し其の大體の性質に就いてをいへばさまで鎌倉時代のと異なるどころなし即ち其の書中に貫流せる思潮も佛教的傾向を帯び文章はた和漢梵の三語を併用したるものなりき。されど強ひて彼此の相違せる點を求むれば其の文體の偶華に過ぎたるものあるも一般に質樸平板なる風の増加せると先代に流行せし繪巻物の發達して御伽草子となり徳川時代に生出せる草雙紙の萌芽をなせるとにあるべし。其の文體の質樸平板なる風の増加せるは兵馬倥偬の際

として其の著おほむね故事有職等を始め實用のもの多きにもよるべきか。予輩が此の時代の散文を大體鎌倉時代のに類せりといふは此の散文界を代表するに足るべき重要な著作の此の傾向あるに依りてなり。

此の散文界を代表するに足るべき重要な著作とは何ぞ。『徒然草』『神皇正統記』『増鏡』『太平記』の如き是れなり。作者の著名なるを兼好法師並びに源親房とす。

此の外一條禪問兼良の作に『樵談治要』『文明一統志』『花鳥餘情』『公事根源』『東齋隨筆』『桃華藥葉』『歌林良材』『藤川記』『小夜寐覺』等あり今川貞世了俊の作に『言塵集』『道行きぶり』『落書露顯』『北條氏康の』に『武藏野紀行』等の作ありき。御伽草子には『浦島太郎』『酒頭童子』『文正草子』『鉢かつぎ』等およそ二十餘種ありて後世に傳はりぬ。歌謡に謡曲のあるごとく散文に御伽草子あるは此の時代の文學を異色あらしむるに足る。

予輩が此の章に於いて散文を評騭するに就いては其の最重要なるものゝみを擧げて先づ

隨筆

正史並びに雜史

御伽草子

の三項に區分して其の作を探らんとす。一條禪閣兼良今川貞世北條氏康の作中數種は多少文學的著作として見るべき價值ありと雖も大方は擬古の牀更に取出だして評すべきふしなきを以て之れを省略す。况や故事有職に關する全く實用一邊の作をや。

第貳節 草子

『徒然草』 吉田兼好 兼好の經歷並に性行

『徒然草』の性質及び文體

此の時代に草子の名を冠せしむべきものは只『徒然草』の一部ありしのみ。其の著者を吉田の法師兼好といふ。

兼好法師は大織冠藤原鎌足の裔にして姓を卜部といひ治部少輔兼顯の第三子なり。後宇多天皇の御宇弘安六年(一九四三)に生まれ後村上天皇の朝正平五年二月十五日齡六十八歳にして逝りぬ。其の家代々神道を以て官に仕へしかば兼好も自然に其の教育を承けて斯學に通ぜりしはいふに及ばず有職故實の事或は儒學老佛の學さては我が朝の古文和歌等にも明らかなりき。彼れ始め吉田といふ所

に住して吉田兼好と呼びぬ。伏見後伏見天皇の御宇禁中の瀧口に參り後二條花園天皇の朝六位藏人となり左兵衛尉に任ぜられしが三十七歳の頃後宇多院の仙洞におはしますに奉仕して北面に伺候しつ。かゝる程に伊賀守橘成忠の女中宮の小辨といへる女房に懸想して假りの契を結びけるが此の事聞もなく世に顯はれしかば人のをもはく耻かしくやありけむ仙洞を辭して東國に下り武藏國金澤といふ所に草庵を結びて僑居せり。かくて此處に其の年も過ぎけるが法皇の御召願りなりければもだしがたくて京に上り再び奉仕するとなりぬ。志かるに是れより先中宮の小辨既になき人となり正中元年六月法皇亦崩御ありしかば兼好今は無常の感交ふ身に迫りて堪へがたく遂に出家し俗名のまゝを音讀して兼好法師とは唱へけり。此の時兼好四十二歳とぞ聞こえし。是れより諸國を歴遊し此處に住みかしこに移りて只管風月のみ感懷を漏らしぬ。或る時信濃國木曾の御坂のあたりに庵を結びて住みたりしに國守鷹狩にとて人あまた具して來にければ其のさまのいと煩はしきに

こゝもまた憂世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな

と詠じて又都に歸りぬ。仁和寺の邊雙が岡といふ所にはかなどころ設け其のたはらに櫻あまた植えて

ちぎりおく花とならびの岡のうへにあはれいく世の春をすぐさん

と詠じつ。此の頃は世の中愈々亂れにしかば兼好は専ら和歌をのみ弄びて貧しき日を送りけりとなむ。順阿淨辨慶運は兼好が和歌の友にして曾孰れも詠歌に巧なりしかば時人之れを和歌の四天王と稱せりしこと曾て叙べたるが如し。正平四年五月伊賀國なる橘成忠に招かれて彼の地につき國見山の麓田井莊の密乘院に住みぬ。其の後いつの頃にや兼好西國を行脚して播磨國の阿部野といふ所に一小庵を營みて僑居せしが成忠の切なる招きによりて伊賀國に還りて住しけり。正平五年二月兼好臨終の際北朝の崇光院典藥頭和氣清元を遣はされて服藥をすすめけるが固辭して受けざりき。此の時二條良基また潜に伊賀に赴きて其の病床を訪ひけりぞぞ。兼好が高師直の爲に艱書を書きたりといふ事に關しては世の毀譽褒貶喧しく甲論乙駁或は淫樂を恣にして花鳥の媒をなす俗僧の如く或は南朝の社稷を挽回せんとする忠臣の如くいひなして諸説紛々たり。是れもと太

平記卷の廿一鹽谷判官讒死の事とある條に根據すといへどもたま／＼『太平記』の記事を皆がら信憑するに足るべき者と考ふるより生ぜし誤謬にして採るに足らず詳細の考證は此處に叙べ置かず。况や兼好の發心して以來の性行を鑿查すれば全く塵世に交はる事を欲せざりし次第の洞察せらるるをや。

道心あらば住むところにもよらず家にあり人に交はるるも後世を欲はんにかたがるべきやはさといふは更に後世しらぬ人なり。げには此の世をはかなみ必ず生死を出でんと思はんは何の興ありてか朝夕君に仕へ家をかへりみるいさなみのいさましからん心は縁にひかれて移るものなれば靜かならでは道は行つがたし

といへる如き彼れが平素の心事を知了するに足りぬべし。

さてかの『徒然草』は一時に書き綴りしものにあらず見るもの聞くものにつけて心に感ぜし事どもを其のをり／＼に記しけるもの、草庵の壁などに貼られて残れりしかば兼好の歿後に曾て召仕はれたる童の形見にもたりし草稿など、共に取集めて一書に編成したるものなりといふ。其の『つれ／＼草』と名づけしは卷首の文章冒頭に「つれ／＼なるまゝに」と書出せしに依るなり。

三光院殿の「観玉集」に曰はく「兼好法師のつれ／＼草はその世には知るものなかりしな

童命松丸今川了俊のものとつかへありしに兼好もしや歌などのころか作のものやあると問はれしに書きすてられし藻鑑草あるは歌のそゝるごと尤も候ふにや多くは庵の壁をほられて候ふ。こゝにも形見にもさたくはへ申し候ふと語りければそれ尋ねさせよとて吉田の感神院へは命松丸を遣はし伊賀の草庵へは従者伊興太郎光貞といふもの歌のこゝろざしありとて歌の集は伊賀の草庵にてやうく五十枚ばかりあつめつれく草は吉田にて多く壁にはられ、あるは経巻などかうつせるものゝ裏書にてありしをさりとて來ぬ。それを了俊命松丸などゝさりとて命松丸がもにありしをもまた二條の侍従の方によみかひはされしなどをもさひあつめ歌の集一冊としまた草子をも二冊させしなり。つれくなるまゝに書出せし語意がらのおもしろく哀れ深きになぞらへてつれく草といふ題號はつけられたり。それより源氏「枕草子」などの如くつたへうつせるをよしとし誰れくもすてぬ草子のおもしろきものになりぬ。」

此の故に『徒然草』は始終の連絡一貫せずきれくなる文長短すべて二百四十餘篇より成る。其のいふ所は大方

あだし野の露きゆる時なく鳥部山のけふり立ちさらでのみ住みはつるならひならばいかに物のあはれもなからん。世はさだめなきこそいみじけれ。命あるものを見るに人ばかり久しきはなし。かけろふの夕をまち夏の蟬の

春秋を知らぬもあるぞかし。つくくど一年をくらす程だにもこよなうのどけしや。あかず惜しと思はれ千年をすぐすとも一夜の夢の心地こそせめ。すみはてぬ世に見にくきすがたをまちえて何かはせん命ながければ耻おほし長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそめやすかるべけれ。其の程すぎぬればかたちを耻づる心もなく人に出でまじらはんとを思ひ夕の日に子孫を愛してさかりゆくすゑをみんまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみ深くものゝあはれも知らずなりゆくなんあさましき。の如く佛説に基き又は

名利につかはれてまつかなるいとまなく一生を苦しむることおろかなれ。たから多ければ身をまもるにまどし害をかひわづらひをまねぐなかだちなり。身の後には金をして北斗をさふとも人のためにぞわづらはるべき。愚なる人の目をよろこばしむるたのしみ又あぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉のかざりも心あらん人ほうたておろかなりとぞみるべき。金は山にすて玉は淵になぐべし。利にまどふはすぐれて愚なる人なり。うづもれぬ

名をながき世に残さむこそあらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきを
 じもすぐれたる人どやはいふべき愚につたなき人も家に生まれ時にあへば
 高き位にのぼりおごりを極むるもあり、いみじかりし賢人聖人みづからいや
 しき位にをり時にあはずしてやみぬる又多し。ひとへに高きつかさ位をの
 そむも次にあろかなり。智慧と心とこそ世にすぐれたるはまれも残さまほ
 しきをつらく思へばはまれを愛するは人のききを喜ぶなり。ほむる人そ
 する人共に世に止まらず傳へきかまたくすみやかに去るべし。誰れを
 かばぢ誰れにか知られんことをねがはん。ほまれは又そまりのもととなり身
 の後の名のこりて更に益なし是れをねがふも次に愚なり。たゞし強ひて智
 を求め賢をねがふ人のためにいはし智慧出でしは偽りあり才能は煩惱の増
 長せるなり。傳へてきし學びて知るはまことの智にあらず如何なるをか智
 といふべき不可は一條なり。いかなるときか善といふまことの人は智もな
 く徳もなく功もなく名もなし。たれか知りたれか傳へん是れ徳をかくし愚
 をまもるにあらずもどより賢愚得失の境に居らざればなり。まよひの心を

もちて名利の要を求むるにかくの如し。萬事は皆非なりいふに足らず、ねが
 ふにたらず

の如く老莊の説を參酌したるもの多し。其の他儒學の口吻を帯びたる或は公事
 有職の道を叙べたる或は和歌を論じ男女の性情を説くなど讀み來たれば時に森
 嚴襟を正さしめ時に妖艶魂を奪ふあり又は眞摯激切肝膽を穿ち滑稽洒落頤を解
 かしむる概あり。若しそれ前論後説時として矛盾の傾向見ゆるは此の草子の
 章段順序時代の経過に伴はず遁世前のごと遁世後のごとの作錯然たるものあるによ
 るあり。さはいへ此の草子を通して一貫せる思潮はなほ全く老佛の教旨に基け
 る厭世的觀念なりといふを妨げざるべし。彼れみづから云へらく

ひこり灯のもとに文をひるげて見ぬ世の人を友とするこそ此上なうなぐさむわさな
 れ。文は『文選』のあはれなるまきく『白氏文集』老子のごとく南華の篇此の國のはかせ
 ざるもの寄ける物も古のはあはれなる事おほかり

と、彼れの思想の根底は是れにても知るを得べし。

其の文章は『源氏物語』『枕草子』など優美なるをとり之れに『文選』『白氏文集』又は『老
 子』のごとく南華の篇さては佛氏の語などを交へたり。此の草子が如何に後世に

影響するところありしかは後に至りて更に説く時あるべし。然れども此の節を終はるに臨みて尙ほ此處に一言の附加すべきは其の詠歌に巧なりしこと是れなり。是は前に掲載したる歌にても略知らるることなるが『岷玉集』に兼好と頼阿と平生歌を詠みしに景色の歌は頼阿まさりしかどまことの佛心無常をよみしは兼好にしくものあるべからずとあるにても如何に其の歌曲玄にして當代に重きを致志しかを推測するを得ん。其の歌集の後世に傳はるもの之れを『兼好法師集』と呼ぶ『風雅』『千載』『新拾遺』『新後拾遺』『新續古今』等の諸勅撰歌集に採録せられたる歌も亦少からず。予輩は兼好が亂離混濁なる世に當り其の名聲實に現代の耳目を衝動せしのみならず永く我文學史上に幾多の材料を與へたるを偉なりとす。

第三節 正史並に雜史

『神皇正統記』 源親房 『増鏡』 『太平記』
 此處に正史として録すべきは『神皇正統記』と『増鏡』との二書なり『太平記』は古來事實の信憑すべきものとせられたれど今は探らず姑く雜史の命題下に攝して之れを録すべし。

『神皇正統記』は後村上天皇の興國元年に准后源親房の著はせしものなり。親房は具平親王の裔權大納言師重の子なり伏見天皇の永仁元年(一九五三)に生まれき。家を北島或は中院と稱せり。花園天皇の延慶の頃從四位下に叙せられ右近衛中將左少辨を經參議に任ぜられしが後醍醐天皇の元應の初め累進して權中納言となり正二位にすゝみ淳和獎學兩院の別當を兼ね元亨三年大納言に陞りぬ。其の後世良親王の傅となりしが元徳二年親王薨するに及び親房痛悼禁ずる能はず遂に官を辭し剃髮して宗玄と號しき。此の時親房既に五朝に歴事して輿望極めて高かりしかば時人朝家のために之れを惜みきといふ。元弘三年王室中興の功成りて車駕隱岐より還り給ふに及び親房復出でし仕へ從一位に叙せられ大臣に准ぜられき。延元三年二男顯信の陸奥介となり鎮守府將軍を兼ねて義良親王を奉戴し彼處に下られし時親房も其の補佐として出立たれしが上總の海にて暴風のため主従父子相失し親房は常陸に漂着せり。かくて此處に義兵を擧げ高師冬之兵を引受けて數度の合戦に及びしが孤軍援なく糧食は乏彈きて遂に支ふるに由なく逃れて吉野に歸りぬ。其の後後村上天皇の正平六年三宮に准せられて

車宮に入るを許され同九年賀名生に薨じぬ。年六十二。親房嘗て僧玄惠につきて和漢の學を承け佛典にさへ暗からざりき。されば當時兵馬惣控の際なりしにも拘はらずその著作の有用なるもの尠からず『正統記』の外『職原抄』『元々集』二十社記『古今集註』等あり。世の人其の學才の該博なるによりて當代の博識家藤原宣房及び源定房を併稱して後の三房といひぬ。北朝の如き南朝昇進の官位は一般に廢止せられしも尙ほひとり親房のみは其の名をいはずして北畠准后と呼びたりとぞ。親房が造次頼滂の間にも純忠の念充滿せし趣は其の経歴にても明なるが『正統記』の著作せられし由來を釋ぬれば一層其の然るを想はしむるものあり。

此の『神皇正統記』は著者親房が後村上天皇の興國中兵馬の間に在り皇統兩立して正潤の分忘れ之れがために人々の方途に迷ふものあるを憤慨して述作せしものなり。上は神代より下は興國の初めに至るまでの歴史を叙し我が國躰の他邦に異なる所以を明らかにし神器の所在を正し以て南朝の正統たるべき理を知らしむるにありき。史論往々佛神の利驗天道の順環に歸着して物足らぬ心地す

るところなきにあらざると雖も公明端嚴の筆致文勢能く人をして襟を正さしむる概あり。若しそれ著者が忠誠の氣作中に横溢して轉其の人の性行を想像せしむる妙あるまた此の書の特徴とも謂ひつべきなり。學者なほ親しく次の文例に就きて之れを見よ。

廢帝仲恭諱は懷成順徳の太子御母は東一條院藤原光子故攝政太政大臣良經の女なり。承久三年春の比より上皇思召し立つ事ありければ俄に讓國し給ふ。順徳御身を輕めて合戦の事をもひとつ御心にせさせ給はん御謀にや新主に讓位ありしかど即位登壇までもなくて軍敗れしかば外眞攝政道家の大臣の九條の亭へ遁れさせ給ふ。三種の神器をば閑院の内裏に捨て置かれにき。讓位の後七十七日の間暫く神器を傳へ給ひしかども日嗣には加へ奉らず飯豐の天皇の例になぞらへ申すべきにこそ。元服などもなくて十七歳にてかくれまします。扱も其の世の亂れを思ふに誠に末の世には迷ふ心もありぬべく又下の上をしのぐ端ともなりぬべし。そのいはれをよく辨へらるべき事に侍り。頼朝功勳は昔より類なき程なれど偏に天下を掌にせしか

ば君としてやすからず思召しけるも理りなり。况んや其の跡絶えて後室の尼公陪臣の義時が世になりぬれば彼れの跡を削りて御心のまゝにせらるべしといふも一應のいひなきにあらず。然れども白河鳥羽の御代のころより政道の古き姿やうく衰へ後白河の御時兵革起こりて姦臣世を亂り天下の民殆ど塗炭に落ちにき。頼朝一臂を振ひて其の亂を平げたり。王室は古きにかへるまでなかりしかど九重の塵もをさまり萬民の肩もやすまりぬ。上下堵をやすくし東より西より其の徳に服せしかば實朝なくなりても叛く者ありとは聞こえず。これにまさる程の徳政なくしていかでたやすく覆へさるべき。たどひ又失はるべくとも民やすかるまじくは上天よもくみし給はじ。次に王者の軍と云ふは科あるを討じて疵なきをばほるぼさず。頼朝高官に身り守護の職を給ふ。これ皆法皇の勅裁なり私に盜めりとは定めがたし。後室その跡を計らひ義時久しく彼れが權をとりて人望に背かざりしかば下には未だ疵ありといふべからず。一應のいはればかりにて追討せられんは上の御科とや申すべき。謀叛起こしたる朝敵の利を得たるには比量せ

られがたし。かゝれば時の至らず天の許さぬことは疑ひなし。但し下の上を剋するは極めたる非道なり終にはなごか皇化にまつろはざるべき。先賊の徳政を行はれ朝威をたてかれを剋する計りの道ありて其の上の事とぞ覺え侍る。且は世の治亂の姿をも能く鑒みしらせ給ひて私の御心なくば干戈を助かさるゝか弓矢を治めらるゝか天の命に任せ人の望に隨はせ給ふべかりし事にや。終にしては繼躰の道も正路に歸り御子孫の世に一統の聖運を開かれぬれば御本意の未だ達せぬにはあらずされど一旦もしづませ給ひしこそ口をしく侍れ。

兵馬倥傯の際勿論充分なる参考書もなかりしことと推測せらるゝに事實正確議論公明文章はた平易にして合格せる何れも以て著者親房の博識老熟の程を窺ふことを得べし。其の他の著書は文學上のものならぬども其の價值又想察するを得ん。

『増鏡』は舊説に一條冬良の作なりといひ傳ふれども永和二年の奥書ある古寫本ありて時代合せざるがゆゑに今は採らず。此の書後鳥羽天皇の御時より後醍醐天

皇の元弘三年隠岐より還幸ありし所までを載せられたれば蓋し建武の中興より程遠からぬ時代に出來しものなるべし。すべての體裁は『大鏡』『水鏡』などのに倣ひ二月の中の五日嵯峨の清凉寺に詣うでける八十にもや餘りぬらんと見ゆる尼の折柄參會せる人々のもどめに應じて語りたる様に作れり。全篇を十七條に分かちて「おどろのした」新島もり「ふぢごころも」三神山内野の雪などいへる雅名を附したり。『水鏡』は神武天皇より仁明天皇まで、『大鏡』は文德天皇より後一條天皇までを記載したるものなれば此の増鏡の記事までは尙ほ後朱雀天皇より安徳天皇の御宇に至る十三代ばかりの間缺けたれども往昔より此の『水鏡』『大鏡』『増鏡』を三鏡といひならはして史學研究者の重寶とせり。此の三鏡の外『續世繼』一名『今鏡』といふもの、後一條天皇の頃より高倉天皇の朝までの事蹟を記載したるものあること曾て述べたる如くなれば此の四篇を通覽せば神武天皇より後醍醐天皇の御宇に至る事件を徵するを得べし。文章は又『大鏡』『水鏡』等のに似て優美なれども事件によりては莊重雄麗なるどころ又なきにわらず。就中其の序文めきたる端書たんしよの文殊に傑れたり。

以上『神皇正統記』と『増鏡』との二書はまづ正史として見做すべきものなれども茲に雜史として列記すべきは離れも知れぬ『太平記』四十卷なり。『太平記』は花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年にかけておよそ五十年間に於ける事蹟即ち南北兩朝の分裂、諸所の戦况、忠臣義士の物語等を記載したるものなること是れまた普く人の知るところなるべし。其の作者は玄慧法師が後醍醐天皇の勅命を蒙りて起稿せしを後に來賢、知教、教圓、能隣等の諸僧の増補大成して四十卷となしたりといふ舊説あれど近年修史館に於いて史料研究の際小島法師といふものゝ作なるよしを發見せり。但し小島法師といへるものゝ如何なる人なりしかは今になほ詳かならず。只、洞院公定の日記に、應安七年五月三日戊辰傳聞去廿八九日之間、小島法師圓寂云々、是近日斷天下太平記作者也、凡雖爲卑賤之器、有名匠之聞、可謂無念とあるのみ。一部の體裁は全く『源平盛衰記』『平家物語』に摸し文章は一層華に過ぎたり。例へば

俊基朝臣は先年土岐十郎頼貞が討たれし後召捕はれて鎌倉まで下り給ひしかども様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるか又今度の白

狀ともに専ら陰謀の企て彼の朝臣に在りと戦せたりければ七月十一日に又
 六波羅へ召捕はれて關東へ送られ給ふ。再叛赦さるは法令の定むる所な
 れば何と陳ずとも許されど路次にて失はるゝか鎌倉にて斬らるゝか二の間
 をば離れじと思ひ儲けてぞ出でられける。落花の雪に踏み迷ふ片野の春の
 櫻狩り紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮一夜を明かす程だにも旅寝どな
 れば物憂きに恩愛の契り淺からぬ我が故郷の妻子をば行くへも知らず思ひ
 おき年久しくも住みなれし九重の帝都をば今を限りと顧みて思はぬ旅に出
 で給ふ心の中ぞ哀れなる。憂きをば止めぬ逢坂の關の清水に袖濡れて未は
 山路を打出の浪沖を遙に見渡せば鹽ならぬ海にこがれ行く身を浮舟の浮沈
 み駒もといろと踏みならず勢多の長橋打渡り行きかふ人に近江路や世のう
 れの野に鳴く鶴も子を思ふかと哀れなり。時雨もいたく森山の木の下露に
 袖ぬれて風に露ちる篠原や篠分くる道を過ぎ行けば鏡の山はありとても泪
 に曇りて見えわかず物を思へば夜の間に、おいその森の下草に駒を留めて
 顧る古郷を雲や隔つらん。番鳥醒が井柏原不破の關屋は荒れはてし猶もる

ものは秋の雨のいつか我身の尾張なる熱田の八劍伏し拜み、鹽干に今や鳴海
 濱傾く月に道見えて明けぬ暮れぬと行く道の末はいづくと遠江濱名の橋の
 夕鹽に引く人もなき捨小舟沈み果てぬる身にしあれば誰れか哀れと夕暮の
 晚鐘鳴れば今はとて池田の宿に着き給ふ。元暦元年の比かどよ重衡の中將
 の東夷のために囚はれて此の宿に着き給ひしに、

東路のはにふの小屋のいぶせきにふる郷いかに戀しかるらん

と長者の娘が詠みたりし其の古の哀れまでも思ひ残さぬ泪なり。旅館の燈
 火幽かにして鶏鳴曉を催せば匹馬風に嘶へて天龍川を打渡り小夜の中山越
 え行けば白雲路を埋み來てそことも知らぬ夕暮に家郷の空を望みても昔西
 行法師が命なりけりと詠じつゝ二たび越えし跡までも羨しくぞ思はれける。
 隙行く駒の足はやみ日既に亭午に昇れば餉參らする程とて輿を庭前に昇き
 どいむ。轅を叩いて警固の武士を近付け宿の名を問ひ給ふに菊川と申すな
 りと答へければ承久の合戦の時院宣書きたりし咎によつて光親卿關東へ召
 下されしが此の宿にて誅せられし時

昔南陽縣菊水

汲下流而延齡

今東海道菊河

宿西岸而終命

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上に成り、哀れやいと増りけん、一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしを、菊川の同じ流れに身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛り、龍頭鷄首の舟に乗り、詩歌管弦の宴に侍りし事も、今は二度見ぬ夜の夢と成りぬと思ひつゞけ給ふ。島田藤枝にかゝりて、岡部の眞葛裏枯れて、物悲しき夕暮れに、宇都の山邊を越え行けば、葛根いと茂りて道もなし。昔業平の中將の、住所を求むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけりと詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀧を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ返さぬ浪の關守に、いと涙を催され、向ひはいつこ三穂が崎、沖津浦原打過ぎて、富士の高根を見給へば、雪の中より立つ煙り、上なき思ひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、鹽干や淺き船浮きて、あり立つ田子のみづからも、うき世を遶る車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯小磯見下し

て、袖にも涙はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば七月廿六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

の如きを見ても、其の文の華に過ぎ又纖巧に過ぎたるを察するを得べし。かるが故に此の書の文は時として厭はしきふしありと雖も、全体的筆致趣味多きによりて、『源平盛衰記』並に『平家物語』等と共に永く世人の愛讀するところとなりき。而して此の愛讀することは古來知らず、此の書の記事を曾て現在したる實事と思惟せしめたりき。されども此の書は只、多少當時の人情風俗を想察せしむる外史上の實事と見做すべからざる、事史家の研究によりて一致するところとなれり。久米邦武氏往時、史學會雜誌に論じたる主意は能く此の書の信ずるに足らざることを表明せるものあり抄録して讀者の參考に供せん。

『太平記』は四十巻の大部にて、而も小島法師が正平の初比までに書綴りたる書簡なれば世には史學の根基とも思ふなるべし。されど此の書を史學の研究にあつれば古編より出でたる所の如く、盛く消失せて中には朽骨さへ無くなることの多きを如何にせん。世に是迄史學の研究は起こらず其の材料も乏しかりし故に、水戸にて『大日本史』を編修するに反て、『太平記』を主にして他の材料を取捨したるより、事實は爲に壞れて是非の

顛倒したる事夥多し。まして其の他私著の編修書に誤謬の多きは怪むべきにもあらす。今研究といふ正針を取りて此の書を讀まば史學の用に立たぬことは自ら瞭然なるべし。

といひ又

抑『太平記』は『平家物語』の跡を追ひ保元以來の合戦を假りて狂言綺語を綴りたる語りも
 のにて謗本淨瑠璃本同様の書なり。其の脚色は早く非命に斃れたる大塔宮新田義貞
 楠正成名和正年行くへの知れぬ萬里小路藤原等を立物として摩氏兄弟阿野の准后を
 淨旦の役に用ひんために先づ開首に中宮准后の正邪と大塔宮との材武を示したり。
 所謂序幕なり事實と引合せ考ふる程のものにあらす

などいひて其の理由を考證せり。なほ委しく知らんと欲するものは彼の雜誌に就いて之れを見るべし此處にはさまで考證を掲ぐる要なければ略しつ。

『太平記』一部を貫流せる大思潮は『盛衰記』『平家』の如く佛教的思想にしてなほ彼等に見えたるよりも盛なり。之れまた當代を貫く一大思潮を表示するものとやいはん。之れに次ぐを神儒二教の思想とす。而して其の筆するところ往々深遠該博なるを見れば作者の之等に關する知識の豊富なりしを想ふに足る。要するに此の書の記事は多く荒唐なる非難を免れざるもなほ長へに良好なる文學的著作

として許多の愛讀者を失はざるべきを信ず。

此の『太平記』の記事を妄なりとして折り／＼引證せらるゝを『梅松論』とす。此の書何人の述作たるを詳かにせず或は云ふ是れこそ玄慧法師が足利直義の命を奉じて撰せしものなりと。言を巷談に託して上は元弘の頃より足利義満の事蹟を叙べたり。事實は正確として學者の許すところなりといへども文章は遙に『太平記』に劣れり。

第四節 御伽草子

繪巻物の發達 御伽草子の材料並に趣向 『横笛草子』

の梗概 御伽草子の性質 草雙紙の萌芽 物語類

鎌倉時代の初より流行せし繪巻物は此の時代に至りて愈發達し從來繪畫を主とせしものも今は多少詞書の上にも留意することとなりぬ。世に之れを御伽草子と呼びて當代の上流社會に持囃されたるをさ／＼往時の物語にも譲らざる程なりき。其の作の今日に傳はるもの數十種。然れども是等の草子は其の主とするところ元來繪畫にありしを以て畫工の外比較的肝要ならざりし詞書の作者は其

の名を逸したるもの多し但し書工の名の詳かならざるものもまた勘からず。各篇の材料並に趣向などは大方古傳説または古物語より採りて増補刪減したるもの文章はた古物語の格法を摸し且つ甚だ杜撰粗漏なる漢語及び俗語を混用せり。例へば『浦島太郎』『酒頭童子』『横笛草子』の『記』『紀』等に見えたる古傳説若しくは『平家』『盛衰記』等に其の材料と趣向とを採りたるはいふも更なり『文正草子』の如き『鉢かつぎ』の如き多少『住吉』『竹取』の物語に類似せる概ある點檢し來たれば其の然らざるもの殆どあるなし。而して是等の草子が其の材料と趣向とを古傳説又は古物語に採るや多くは亂雜疎放原作に比するに遙に劣れるが常なり。予輩はこゝに學者の比較考量せん便宜にもとて『横笛草子』の梗概を掲載すべし。

中ごろ建禮門院の御時淨海入道の子小松殿の御うち三條の齋藤瀧口時頼とて花やかなる男あり。女院の御所に横笛とて楊貴妃李夫人にもをさく劣らざるみめよき女房のありけるに懸想し乳母のなかだちにてやうく逢瀬の中となりてうれしき年月かさなりけり。さる程に父の茂頼此の事を聞き身をいたづらになす事こそ口をしけれどてたびく教訓しければ瀧口

つくく物を案するに此の世ばかりの夢ぞかし。かゝる思ひをする事よ。東方朔が九千歳、四王母が一萬歳、名のみ残りて跡もなし。うき世を物にたさふれば岸のひたひの根なし草、入江の水にすて小舟、波にひかれて行へなく花の上なる露よりも危き人間の知らずすむこそ拙けれ。たいほん王のたのしみも思へば夢のうちぞかし。か程かりなるあだし世に思ふ人になぐさみてこそ思ひてさは成るべけれ。また如何に榮ゆさも思はぬものないかにせん親の命を背かんも罪深かるべし女の心を破れば一念五百生けんれんむりよりごうの罪たるべし。

とは思へども是れを菩提の心と觀じつゝ餘所ながら横笛に名残をつけ其の身十九と申すに『嵯峨』の奥なる往生院にとち籠りぬ。横笛はかゝる事のありきとは夢にも知らず只瀧口のすさみ給ふをのみ恨みにて明かし暮らし給ひけるが親の不興を蒙りて遁世したる由を聞き思ひに堪へかね忍びて御所をあくがれ出で給ふ。たどりくゝてゆく程にやうく往生院にぞ着き給ふ。柴のとぼそに佇みてほとほと叩きつゝ横笛と申すに瀧口障子のひまより見給へば古の有様にもなほまさりて見えければ一目見せばやとは思へども二たび物を思はせんもむざんなりとて下の僧して歸り給へと云はせけり。横笛これを見給ひて

なまけな有様や昔に變らて今は契らんといはゞこそかはりしすがたたい一め見せ

させ給へど時雨に濡れぬ松だにも又いろかはる事もあり火の中水の底までもかはらずそこそ思ひしに早くもかはる心かな。ありしなさをかけよといはゞこそ自らも共に様をかへ同卜庵室にすまひして御身は花を摘むならば自らは水を掬ひひきつ癖の縁さならばやと思ひ是れまで尋ねまいり。夫妻は二世の契りき聞きしかど今生の對面だにもかなうまじきかあさましや親の不興を蒙りてかやうにならせ給へば自らを深く恨みさせ給ふも理なり。思へば又みづからは御身ゆゑに深き思ひに沈み互に思ひふかゝるべしと涙を流し申すやうさても古は雲を動かす雷も思ふ中をばよもさけしと契りつる首の葉は今の如くに忘れず隨言の袖のうつり香は今もかはらず匂へどもいつのまにかは變りはてうたての瀧口やとて聲も惜まず泣きければ瀧口これを見てあまり歎くもいたはしせめては聲なりとも聞かせばやと思ひていくなん

梓弓そるをうらみさおもふなよまことの道に入るぞうれしき

さありければ瀧口か聲き聞くよりもあまりの嬉しさに横笛をりあへず

あづさゆみそるをなにしに恨むべき引きさむむべき道にあられば

さなくく打ちながめもだへこがれて泣きぬたり

かくて横笛今はたのみもつき果てければまだ十七の花のさかりに大井川の底の藻屑となり給ふ。瀧口柚人の物語にありし事ども聞くよりも急ぎ大井川に到りつき横笛の死骸を尋ね出し涙ながら鳥邊野の煙となしはてゝもとの庵室に歸り

やがて高野山に上りけり。

此の『横笛草子』の如きは御伽草子中の傑作と認むべきものなるも其の趣向はなほ『平家』『盛衰記』等に見えたる原作前に掲載したる事あれの深刻なるど比すべくもあらず文章はた然り。其の他『横笛草子』に及ばざるものゝ如何殊更に論ずるまでもなし。要するに御伽草子は其趣向も文章もいまだ幼稚なるものなり。

御伽草子著作の目的は上流社會の慰みに供すると共に教訓を兼ねたり。而して其の教訓の主義は全く神明佛陀の靈驗功徳を説いて讀者の道義心を養ふにありき。故に各篇大方は

これたゞはせの觀音の御利生とぞ聞こえける。今に至るまで觀音を信ず申せばあらたに御利生ありと申しつたへはんべりける。此の物語をきく人は常に觀音の名號を十返つゝ御さなへあるべきものなり。南無大慈大悲觀世音菩薩。

の如き又は

後々までも此草子見給うて親孝行に候はゞかくの如く富み榮えて現當二世のれがひ立ちどころに叶ふべし。まづ現世にては七難即滅し障りもなく衆人愛敬ありて末繁昌なるべし。後の世にては必ず佛果を得べき事疑ひなし。偏に親孝行にして此の草